

真
多
滿



五



尾道市立高等女學校友會



眞玉第五號目次

○口繪

○第七回卒業生

○說苑

○奈良に遊ぶ人々の爲に

○メンデルの法則

○家庭洗濯法の擴張

○俳句小話

自一至一六

大河内定雄

秋山幹

一色保子

三橋六治郎

○講演抄記

○萬葉集以前の女性

○文苑

○またま句集

○修學旅行記

○競點作文

○休業中の日誌の中より

○普通作文の中より

自一七至一八

折口信天氏

自一九至六四

○學校彙報

○日誌摘錄

○身体検査表

○生徒原籍別表

自六五至七三

○朝會訓話抄

○現在職員表

○父兄職業別表

自七四

○雜報

○教員室だより

○寄宿舎だより

自七五至八〇

○校友會報

○文藝部報

○役員

○運動部報

○會計報告

自八一至八三

○同窓會報

○同窓會

○會計報告

自八四至一〇四

○消息

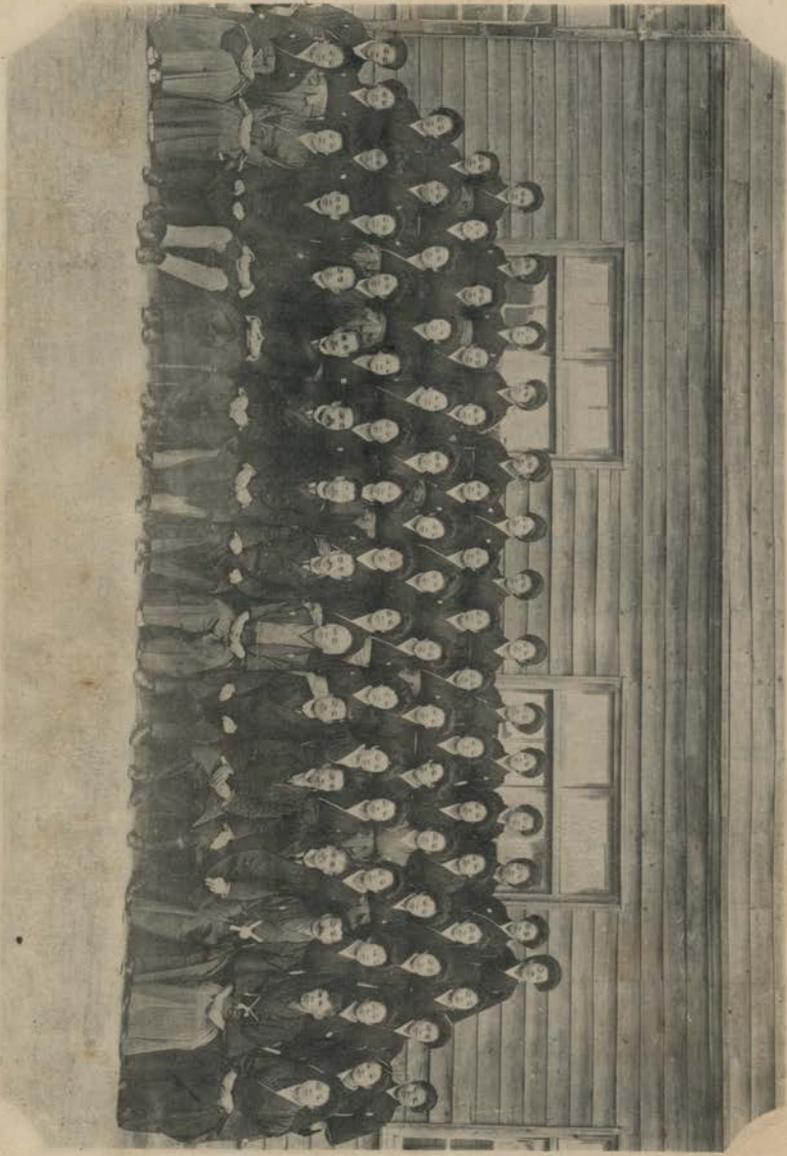
○旧師消息一括

○雁のつて

自一〇五至一一二

○附錄

○同窓會員名簿



第七回卒業生

真るは 第五號



說苑

奈良に遊ぶ人々の爲めに

大河内定雄

毎年秋季には四年級生徒が奈良京都伊勢地方へ修學旅行を行ふことになつてゐる。殊に其の地方が歴史上からも美術上からも由緒の深い土地であるだけ研究すべき興味ある材料が随分多い。これ等については大体の智識だけでも豫め準備して出掛けるのは最も必要なことであらう。此の意味に於て余は自分の立場として美術的方面から觀察した同地方について聊か述べて見たいと思つてゐるが全般に渡つたら到底一朝一夕には書き盡せるものでもなし又自分の頭では到底六つかしいことであるから今は奈良市内だけについて極大体を記して見るつもりである。幾分でも奈良に遊ぶ人々の爲めに参考になつたら幸だと

思つてゐる

春日神社

奈良に行つて春日野の鹿を見ると其の好く人に馴れ馴れしいキョトンとした姿が如何にも悠々とした氣分を與へる。猿澤池畔を左にだらだらと少し坂を上り氣味にこの鹿の遊ぶ春日公園の老杉の下道を眞直に行くとき春日神社の前に來る。其の丹塗は緑の暗い森の色と相映じて所謂優雅な春日造の社殿が如何にも美しい

春日神社は祭神が四座あつて一殿に武雷神二殿に齊主神三殿に天兒屋命四殿に比べ大神を祠つてある。社の現在の地位に創建せられたのは神護景雲二年で建物を丹塗にするといふことはこれが嚆矢だと傳へられてゐる。社の建築様式から云ふと所謂春日造である。春日造といふのは神社建築の一形式で屋根には反りを生じてゐること、千木を單に神社の象徴として別に屋根の上に附けたこと、社殿を丹塗にしたことなどが重な特徴で春日野一体に散在してゐる小さな春日末社の建物に至るまで皆此の形式である。然し今の社殿は決して創建當時のものではない。最も古い建物さへ藤原時代の末期のもので今の樓間な

どは治承二年に建つてそれから廻廊を廻らすやらしめて社殿は其の後に建つたものである。神社の前に樓門を建て廻廊を廻らすといふことについても本來からいふと從來の鳥居と瑞籬が社殿の附物であつたのに對して一寸變つてゐることでこれは佛寺建築の方から來たのである。さてこの樓門は格好から見ると稍々低い感じがあるが廻廊と共に藤原時代の神社建築の附屬物としては極めて珍らしいものである。

春日若宮

春日神社の前から南の方へ元來た道から云ふと右の方へ林の中の小暗い中を少し行くと春日若宮がある。ここで建築上注意すべきで例の春日の巫子が舞ふといふ社前の神樂殿である。治承年間の建築で藤原時代の寢殿造の傍を有する唯一の材料として建築史上主要なるものとなつてゐる。普通の神樂殿と異なつてゐるところは床が低く屋根は流檜皮葺でゆるやかな勾配を有してゐる點などは如何にも優美で輕快瀟洒を極め藤原時代の繪巻物に見る様な感じがある。

三月堂

奈良に行つたものに三月堂は如何でしたかどたづねるとそんなところがあつたかね二月堂は見たが三月

堂といふのは知らなかつた。案外香氣な返事をするものがある。二月堂を見ながらそれ以上に歴史上からも美術上からも遙かに價値ある三月堂を知らずに通り越してそれで奈良を見物したといつてゐる人がある。とすれば美術國だといつてゐる國民もあんまり當てにならない。奈良に來て三月堂を見落すといふのもつまりはその準備の足らないのによることだらう。何故に三月堂がうれ程有名なだらうか。現今奈良に残つてゐる建築物の内第一に古い建築であり千二百年間風雨雷震の災を免れて而も天平當年の藝術の香りと奪い歴史の蹟を多量に持つてゐるからである。三月堂は天平五年良辨僧正の開創で大佛建立より十五年前である。尤も今の建築物は鎌倉時代に禮堂を増したもので外觀の体裁は一寸變つてしまつたが其の兩時代の建築の接合が巧みに出來てゐるので屋根などの傾斜の緩い曲線の具合など何とも云はれない程美しい。兎に角一つの堂で同時に天平時代と鎌倉時代との手法の比較が見られるといふことは美術として味ふと云ふ點は別として建築を研究するものゝためには他に類例の無い貴重なものである。斯く三月堂は歴史上からも建築上からも價値あり興

味ある建築であるが更に内部に安置された佛像等は天平時代の傑作のみを集めたといつてもよい様なのでこの小さな堂は實に世界萬國に對しても誇るに足るものである。本尊不空索觀音、脇立梵天帝釋を始め二力士、四天王及び背面厨子の内にある執金剛神の如きは何れも不朽の傑作である。中にも本尊は天平時代の最高潮に浮び出た傑作で生死の大海に妙法蓮華の餌を下し心念不空の索を以て衆生の魚を釣り菩提の彼岸に送るといふのであつて二重の臺座の上に立ち其の表情の高渾にして而も典雅、流麗なる衣紋の曲線美など至極をだやかに出來てゐる。其の寶冠に至つては全体に無數の瑠璃水晶眞珠等の寶石を以て裝飾され全体は金具の透彫の中央に八寸ばかりの小佛が安置せられ其の背光は優美なる唐草の透彫で飾られて蓮花があらはされ實に華美を極めたものである。梵天帝釋は本尊のすぐ脇にあり曲雅崇高を極めた其の姿には誰れでも恍惚とならないものがあるまい。高山樗牛をして「男女神人の特相を絶し、空靈超脱の威嚴を表はす」と曰はしめたのも無理はない。

二力士、四天王、熱金剛神も見るべきものではある

が本尊、梵天の二像に比しては氣魄技巧の點に於て稍々劣つてゐるし執金剛神は秘佛で堂内の厨子に藏められてゐるから一寸見られない。先づ三月堂では本尊と梵天の兩者だけを注意して見るのが肝要だろ

二月堂

三月堂の北側の崖の上に二月堂がある。奈良に遊ぶものは此の二月堂が三月堂より一見して古く見えるし由緒も深い様に思はれるので足元の三月堂を忘れて二月堂の方へ向ひたがる傾きがある。うれ程に二月堂は世人からも中々大した信仰があるが今の堂は徳川四代將軍家綱の再建で建築は未だ新しいし其價値は到底三月堂と比較にならぬ程劣つてゐる。只僅かに本尊の背光だけは火災にかゝつても辛ふじて取り出したものと見え粉砕はしてゐるが立派に残つてゐる。其の緻密な毛彫の模様は臚けながら天平當時の藝術の香を留めてゐる。其の他は毎年修二會といつて舊曆二月に東大寺の僧の行法が行はるゝ際若狹井から神水とすべき水を汲み上げる御水取といふものがあるのが有名になつてゐる位のものである

大佛殿

二月堂から西の方へ杉の木立の下を通つて行くと東大寺の鐘がある。これが日本鐘樓建築の大關といつてもよいので其の建築から云つても鎌倉時代の傑作で屋根の張り具合といひ、其の軒先の組物といひ巧妙な手法が認められる。何しろ熟銅五万斤白蠟二千斤を費して出来上つた一丈三尺余もある大鐘を樂々と釣り下げて然も余裕綽々としてゐる有様は驚くべきものである。老杉の木立を背景に此の嚴然たる姿を仰ぎ見ながら行くと間もなく大佛殿の横手に來る正門の方へ廻つて門を這入ると成る程其の建築は中々大きい。東大寺が奈良地方に於てのみ名高いのみでなく世界最大の木造建築として奈良朝佛敎の一大紀念物としての大佛殿を有してゐるので其の名は三尺の兒童も尙知らぬものは無い位である。この大佛殿は今より千二百年前天平十五年に聖武天皇が金銅廬舎那佛の大像を作り併せて其の殿宇をも營まんとの勅願から出來たものではあるが、現今の殿宇は元祿年間に公慶上人の勸進によつて再建せられ二百七十年ばかり前に出來たもので其の規模に於ても甚だ小さいものとなつてしまつた。天平當年雄渾なる美術の結晶とも曰はるべき大佛殿の莊嚴雄大なる面影

は遺憾ながら偲ぶことは出來ない

本尊の金銅蓋舎那佛は蓮座の上に跌座し五丈三尺五寸と云ふ大きなものである。面相胸部と脊部は後世の修補であるが下腹左右の袖、膝まはり蓮座などは天平當年のもので、この蓮座の蓮瓣の彫刻なども實に立派であるし、衣の摺襞の手法や袖の兩腕に纏ひ裾が蓮座の上に垂れてゐる具合なども悪くはないが大佛の最も重要な頭部は元祿時代の作である。惜しい事には此の元祿時代は不幸にして吾が彫刻史上最も衰頹した時であるから面相は到底天平時代の面影だになく只大きいといふだけで其の拙劣さは到底見るに堪へられない

大佛殿を出で眞南に進むと南大門がある。創立當時のものは大風のため仆れたので鎌倉時代の始めに再建されたのが即ちこれである。美觀上からは左程の價値は認められないが運慶湛慶の力を籠めた仁王の木造があるので名高い。呵呷の氣勇ましい鎌倉時代彫刻の一大傑作である。ついでに天平時代の仁王と鎌倉時代の仁王との相違について一言加へて見たい天平時代の仁王としては三月堂にある仁王等であるが凡て天平時代に出來た仁王は鎌倉時代のものゝ様

に敢て憤慨怒號といった様な激しい姿態は見られな
い。其の貌は鎌倉時代のものに比して畏壓せしむる
といった方は無いが、何處か近づく事の出来ない雄

大崇高な威嚴を備へてゐて何となく大きいゆとりが
ある様で觀者は知らず知らずに畏服されてしまう様
なところがある。此の點に至ると鎌倉時代のものは
たしかに奈良時代のものに一步を譲つてゐると曰は
なければならぬ。寫實的の技巧に至つては美術上
これに優るものはないかも知れぬがその表情はあま
りに皮想に走り過ぎてゐる。一見したところは甚だ
痛快の感はあるか觀者をして此の感を永續せしむる
といふことには行かない。これに比すれば奈良時代
のものはたしかに無言の雄辯といふことが出来る。
如何に運慶だらうが湛慶だらうがやはり奈良時代の
藝術に比較すると一段劣るものと曰はなければなら
ない

興福寺

猿澤池畔に立ちて先づ第一に眼に映する建築物は誰
れしもあの興福寺の五重塔であらうと思ふ。附近の
松林の間に程なく隠見して然も山窓水態と如何にも
よく調和して奈良の自然美に一段の光彩を添へてゐ

る。奈良に行つて先づ第一にこれ等の堂影を見た
けで早や何となく胸が躍つて神往無限の感に堪へな
いものがある

興福寺の建つたのは千二百年ばかり前で創建當時に
は春日野一帯の地二十七町もある場所に然も輪奐の
美を集めた諸建築が百七十宇もあつたといふのだけ
ら其の當時の宏大莊麗な有様が想像されやう。然し
創立以來千二百年の星霜を徑ては如何に莊大を極め
たこれ等の伽藍も再度の風火雷震と兵燹とに遭つて
廢滅の悲運に遭はねばならなかつた。だから重なる
建築物は大抵無くなつてしまつた。現存のもので比
較的古いのは北圓堂と三重塔である。何れも鎌倉初
期の建築である。南圓堂は參詣するといふ點からは
有名の様であるが今のは徳川時代の再建で建築の價
値は北圓堂と比較にならぬものである。其の他は足
利義滿が再建を謀つた時に今の五重塔と東金堂とが
出來た。其の他遺物として重なるものは今より約二
百年前享保二年の大火で失つた。明治初年には食堂
や四圍の築垣を取り壊したり、南大門跡の石壇を崩
したり、五重塔も僅か三十金余で一炬に附せられん
としたなど今一步で興福寺の全滅となるところであ

つたことを考へると思はず戰慄せざるを得ない譯だ
興福寺の重なる伽藍が森林の中に包まれて春日山や
其の附近の老杉古松は何れも巧みに其の背景を務め
てゐるといつた具合は實に何とも日はれない程美し
い。かゝる地形上に巧みに配置を取りその附近の自
然美と調和させた手腕は敬服の外はない。若し今假
りに天平時代の昔に歸つて今の猿澤池畔以南の今の
奈良市街あたりから興福寺高臺の方を望んだと想像
して見給へ。右に春日の森を控へ杉や松の茂みの間
に程よき格好を持つた伽藍の薨が具合よく隠見し順
次西に五重塔が聳えてゐる。正面には南大門が巍然
としてゐるし、其の西には南圓堂や三重塔が見えて
緑の森の色と赤い堂の色とが相映じて何んなに美し
かつたらう。又西方から見れば春日三笠の兩山を背
景として南圓堂やその他の堂宇が恰も優美な山水畫
の様に見えたであらう。要之興福寺の伽藍は其の配
置に於ても建築の外観にしても又其の自然との調和
に於ても一の非難點も認められない。よくも之れ程
までに絶好の地形を選び然もよく之れに適合した建
築物をして、又よく自然美と人工美との調和を巧み
にとつたものかと誠に驚嘆敬服の外はない。以上は

余が奈良市に於ける建築物や彫刻物についての貧弱
な研究で至極大体のものについてとあるが更に研究
を進めて行つたら又興味ある材料にも出遭ふだらう
と思はれる。尙又奈良市以外にも次第に研究を進め
て行きたいと思つてゐるから何れ又其の發表を掲げ
る機會のあることを信じ楽しんでゐる次第である。

「メンデル」の法則

秋 山 幹

人からは必人が生れ、馬からは必馬が生れるばかり
でなく、子はすべて特に其の親に似る。

かく、親の性質が子に傳はる事を、遺傳と言ふ。

遺傳に就ては、其の研究が近年益盛になり、色々な
方法で之を行ふて居るが、其實験的研究の元祖と言
ふてもよいのは、維新前後「オーストリア」の「ブ
リュン」と言ふ小さな町に、牧師をして居た「グ
ンター、メンデル」と言ふ人である。

「メンデル」は「アウグスチン」寺院の庭園に有る狭
い地面に、豌豆を栽培して居たが、其花の色や實の
形などに、色々な相違が有るのに氣が付き、特に性
質の異つた二品種をかけ合はせて雜種を作り、兩親

の性質がどんな風に子孫に傳はるかを八年もかゝつて調べて見た。所が此結果は遺傳學上實に大切な法則、即「メンデル」の法則の發見となり彼の名はこの法則と共に不朽となつた。扱雜種を作るには、一品種の花(A)の咲く數日前、即ち花粉が葯から出ない内、其花を靜に開いて雄蕊を皆取り去つて終ひ、自花の花粉が自花の柱頭に付く事——即自花授精——を防ぐ。次に之に蜂や蝶が色々な花の、花粉を付けて飛んで來るのを防ぐ爲、囊を被せて置く。そして此(A)なる花が自然に開いた時分、豫め囊を被せて置いた他品種の花(B)の花粉を(A)花の柱頭に付ける。これで仕事は終つたので、この(A)花に出來た種子を取つて播けば、以上二品種の雜種が出來るわけである。今「メンデル」の行つた實驗の内、簡單な例を上げて見る。「メンデル」は丈の高さが六尺位になる豌豆を母とし、一尺八寸位にしか伸びぬ豌豆を父として雜種を作つて見た。然るに其種子を播いて出た植物、即雜種の第一代は皆丈が高くてどれも六尺位あつた。さうして見ると父の「丈の低い」と言ふ性質は、子に傳はらなかつた様であるが、此雜種に自花授精をさせて出來た豆を播いて

雜種の第二代を見ると、丈の高いものと他に低いのも出來る。この事から考へて次の事が言へる。即雜種の第一代には、父の性質も母の性質も共に傳はつて居るのであるが、「高い」と言ふ性質は「低い」と言ふ性質よりも優勢なので、低い性質が隠されて外には現れず、高い性質のみが露はれて、どれも丈が高くなつたのである。之を「優劣の法則」と稱しこの場合高い性質を優性、低い性質を劣性と言ふ。前に雜種の第二代には、高いものと低いものとが出來ると言つたが、面白い事に其割合は、高いのが三に對して低いのが一である。實際の數を上げて見れば、一〇六四本中七八七本は丈が高く二七七本は低かつた。即總數を四とすれば二・九六に對する一・〇四の割合となる。この理由は雜種の第一代には「高」と「低」との二性質が交つて入り込んで居たのであるが、是は花粉と胚珠とを作る場合、一つの花粉或は胚珠の中に、相對する「高」「低」と言ふ二つの性質が一所に入り込む事は出來ず、花粉或は胚珠の半分には「高」と言ふ性質のみ入り、他の半分へは「低」と言ふ性質のみが入り込む。之を「分離の法則」と言ふ。扱此花粉と胚珠とが組合つて實が出來る場合、其性質の組

合せを見れば、其の割合は次の通りとなる。(左圖で
 高胚とあるのは、高い性質を有する胚珠の意味、高
 高胚 — 高粉
 粉は、高い性質を有する花粉の意
 味である。低胚、低粉の意味も自
 然御解りの事と思ふ。)即(一)高
 低胚 — 低粉 胚と高粉とが一所になる場合が一

回(二)高胚と低粉とが一所になる場合が一回(三)
 低胚と高粉とが一所になる場合が一回(四)低胚と
 低粉とが一所になる場合が一回となる。右の内(一)
 の場合の種子からは、純粹に高い性質を有する高い
 豌豆(A)が生へ、(二)の場合に出来た種子から
 は優劣の法則により高低の二性質を有しながら、外
 観は丈の高い豌豆(B)が出来、(三)の種子から
 は(二)と同様のもの(B)が同理によつて出来る
 即以上三つの場合、外觀だけは皆丈の高い豌豆が出
 来る。然るに(四)の場合の種子を播くと、純粹に
 低い性質を有する低い豌豆(C)が生へるから、前
 に言ふた如く高三に對して低一の割合になるので
 ある。次に雜種の第三代を見れば、Aの種子よりは
 丈の高いのが生へ、是は何代たつても丈の高いのを
 生ずる。即もこの母の性質に歸つたのである。Bの

種子を播けば、高いのと低いのが三と一との割合
 に出来る事は、雜種第二代の出来る場合と同じ。C
 の種子を播けば、皆低いのはかり生へる。是は何代
 續けて栽培しても同様。即是は父の性質に戻つたの
 である

今假に一代に四つの種子が出来るとすれば、高い母
 と低い父との間には雜種の第一代として、混合性の
 ものよみ四本、第二代には混合性のもの八本、父母
 の性質に戻つたもの八本、第三代には混合性のもの
 十六本に對し父母の性質に歸つたもの四十八本とな
 る。此様に折角出来た雜種も代が立つに従つて段々
 両親と同様、純粹な二品種に分れて終ふ「メンデル」
 の實驗の結果では、豌豆の豆の丸い事、莢に縊れの
 無い事、若い莢の綠色な事、子葉の色の黄色な事は
 優性で、之に對して豆に皺がある事、若い莢の黄色
 い事、子葉の綠色な事は劣性である。「メンデル」以
 後の研究により、豌豆以外色々の物に此法則が行は
 れて居る事がわかつた。たうもろこしでは粒の黄色
 が優性で白色なのが劣性、麥及小麥では穂芒の無い
 のが優性で、有るのが劣性。稻では之と反對。小麥
 では銹病にかかり易い性質が優性で、かかりにくい

性質は劣性である。動物では蚕の黄色い繭を結ぶ性質は優性で、白い繭を結ぶ性質は劣性。兎では毛の短いのが優性で、長いのが劣性。人では髪の色は優性で、黒いのが劣性。黒いのが優性で、赤いのが劣性。眼の褐色な性質は優性で、青いのが劣性。神経質は優性で、遅鈍性は劣性。普通の才能は優性で、特に秀でた才能即天才、或は著しく劣つたもの即低能は劣性である。其他病的又は不具の性質を遺傳する場合、「メンデル」の法則に従ふ物が随分多い。

最後に「メンデル」の法則がこれだけ人間の役に立つかと言ふに近來歐米で盛に唱導されて居る人種改良學の土臺をなして居るのは「メンデル」の法則である。前に「メンデル」の實驗の例として上げたのは相對する一つの性質に就ての場合であつたが二つの性質例へば豆が青くて丸い蠶豆と豆が黄色で皺のあるのとの間に雜種をつくり其第二代を見ると黄色で丸いのが丸、黄色で皺のあるのが三、青くて丸いのが三、青くて皺のあるのが一の割合に出来る此内其性質を何所までも子孫に傳へる純粹なのは両親の性質に戻つたものゝ他に黄色で丸いもの、青くて皺

の有るものが各一つの割合に出来る。これもやはり「メンデル」の分離、優劣の法則によつて起つた現象である。この純粹な二つは親と異つた新品種である。「スエーデン」の或る農事試驗所で行つた實驗であるが英國種で澤山收穫は有るが寒氣に堪へない小麥と收穫は少いが寒氣に堪へる「スエーデン」種との間に雜種をつくり、收穫が多くて寒氣に堪へる新品種を得た。其他もつと多くの性質に就て雜種を作れば一層面白い結果が得られる。

この様に「メンデル」の法則は、農業や牧畜上の改良にも大に役に立つ

家庭洗濯法の擴張 一色保子

只今は丁度衣服の入換時として、今まで着用致したる、袷、綿入、羽織の類を洗張し、仕立換へる好時期なり。此の衣服の洗ひ方張り方は、木綿の類は誰もみな家庭にて行ふ様なれども『ガス地』名仙、お召縮緬、薄絹の如き類になれば、これを家庭にてなしあたはざるものとして、高き賃金を拂ひて紺屋に托する様なり、併し其法は少しも困難なる事に非らざれば少しの時を利用して家庭にて行ふを得ば、誠に

便利ならんと思ふ

今染色ある絹織物及毛織物に就て其洗張方を述べん
一、塵を拂ひ特別汚れし所に白糸にて目標をつけを

二、褪色するものは色止めをなす

水二升に就焼明礬五匁位を溶したる中に一寸浸

す、又は水二升に醋酸小盃二杯位

三、微温湯に浸す（熱湯は決して用ひず）

四、洗濯用水につけて洗ふ

用水

(イ) マルセール石鹼の溶解水

粉末マルセールなる時は水二升に小匙二

杯を溶す

(ロ) 石鹼のみにて、おちぎる時はこれに礬砂

を小匙に一杯を加ふ

普通のもの、右の用水にて誠にきれいになる

(ハ) 油污のつきをるものは『ふのり』の濃き液

(ニ) 『ふのり』にてきれいにならぬ物は椿油の

糟を水に溶して用ふこれは最もよろし

洗ひ方

右の用水のいづれかを盥に入れ張板の一端をこ

の中に入れ他の一端を斜に高く何かに立てかけ

微温湯に浸しおきたる被洗物をこの中に繰り入

れ一端より順次板の上に引き上げ今までの表を

上に出して刷毛にて液をつけ乍ら順次布の縦糸

に添ひて軽くこすり洗ふなり名仙の如き面の平

かなるはこれにてよろしきも縮緬又は薄地もの

は刷毛にて軽くたつき洗ひどなし又毛織は石鹼

液の中にて手にてつかみ洗ひどなすべしこの洗

ひ方を心得なば少しも地質を損ずる事なし

五、微温湯にて濯ぐ（熱湯を禁ず）

六、お白粉を用ふる人の襟汚は第四の洗濯液にて落

ちぎる事ありこの時はアルコールを齒揚子（一

本一錢）につけてこする尙落ちぎるときはアル

コールとアンモニヤ水を等分にして処理す多く

用ふる時は色を損す事ある故注意すべし

七、完全水洗ひを行ひ最後の水に醋酸を数滴落し一

寸酢い位の液にて注ぐ（こは絹布に限る）尙一

度水洗をなす、これは光澤を出し絹鳴をよくな

す爲故必ず忘るべからず

八、糊付

糊は水二升にゼラチン一枚又はふのり極く極く

薄きもの

九、仕上

(イ)湯伸——お召、縮緬の類

湯沸の底に清き湯を極少し入れて充分沸騰したる所にて蓋を取り布は裏を出して端と端とを縫合はして輪になしをき両方に竹を通し一方の方にて布の幅をろろへて拵指にて廣げながら釜の上にて充分伸し乍らくろろくまわすなり(裏よりのす事)

(ロ)火伸——毛織類

メリンス、セル、フランネル等の地質の如きは洗ひし後すべて絞らずして蔭干となしをき湿布(手拭五枚位用意)の上から蒸氣の出るまでかけ下に湿りの渡りたる時これをのけしつかりかけ(かくせば小皺がのりてきれいになる)

(ハ)板張——薄地物類

裏地用薄絹の類は清く拭ひたる板の上に廣げ一方より腰の強き刷毛にて糊を含ませて板に張りつける。其上を白金布の如き纖維の細き布にてかるくすすつとなどでおくかくせば小皺も取れ地も損せず

(ニ)簇張——其他総べて面の平かなる物

飛簇(各縫目に二本づつ)なしおき今度は五六分おきに簇をかつて行く、左端より刷毛に糊を含ませて向より手前に引きて順に右に進む縫目の所にて一度切をつけて一布を平に糊をして次の布にうつる刷毛は成可くねかす様にして用ふ糊が乾きてより耳水を引く即ち刷毛に清水を含ませ左の方より両方の耳に五分幅位に水を引くしかして飛簇丈残して右の方より左にすつと簇を取るしかして耳水を引きたる所を右手の拵指と人示指とにて左右になでるかくせば簇目が消えて平となるこれ乾きてより取り入れ紙棒に巻きて上を布にてつよみて砧にて打つなりかくせば糊やはらかとなり光澤出づ。縫目を解き裏より耳と縫目とにアイロンをかけて仕上を終る

注意

一、絹布は糊の薄き方よろし今實驗の結果を一例せば左の如し

名仙二分

セラチン半枚に上等フノリ三寸角位を水七分

合位にてつくる

二、毛布又は毛織の衣服は水二升にアンモニヤ水盃一杯、硼砂を二十匁の割にて浸し大なるは足にてふむか又小なるは刷毛にてたきき洗ひどなす、マリンスの如き薄きはつかむ、
 附 灰汁の取り方

醬油櫛利用



灰は藁灰にても普通の灰にてもよろし冬季火鉢の中に灰のかたまりが出来来るこれをこはさず取りおきこれにて灰汁を取る時は強き灰汁取れる灰を櫛に入れる時は一度水にてねつて入れ其上に藁又は『むしろ』のしめしたるをおきて水を入れるべし

櫛の口には藁を澤山さして滴下せしむ

右の洗張を行ふにつきての経費を見るに

マルセール石鹼 一ポンド 二十錢(二寸角)

セラチン 一 枚 三 錢 位
 醋 酸 一ポンド 九 十 八 錢

この石鹼及醋酸にて幾十枚か洗ふ事を得今名仙一反を家庭にて洗張せんとせば十錢位と思はゞ充分ならん時によりてはまだ安くも出来るならんしかしこれを紺屋に托せば少くとも三十錢は取らるかくの如くなれば家庭の事情の許す方々にありては家庭従来の洗濯も少くも平絹名仙及縮緬の衿地の如き地質までは其範圍を廣め一家經濟の道に進みたき事を望む次第なり

俳句小話 喬木老生

明治以後の俳句に就て少しくお話をする

蚤振ふへき千匁の筒もがな 紅葉

小説家で有名な尾崎紅葉山人の俳句である。漢文の本に振衣千匁筒、濯足万里流、といふ句がある、其れから取つたものだ。學問ばかり有つても俳趣味の無い人は兎角斯ういふ句を珍重したがる。何の事は無い衣を蚤に代へただけで一向味の無い句だ。此人は明治の初めに紫吟社を組織して小波、水蔭、眉山等の顔觸れて盛んに書生俳諧をやつたのだが物に

はならなかつた

露の身や露の袂や露の宿

竹冷

有名な角田竹冷宗匠の句である。小林一茶が「露の世は露の世ながら去りながら」と詠んで長女の死を悼んだ痛切な句には及ばない。此人は明治廿八年に秋聲會を起して『秋の聲』や『卯杖』に當識的な月並的な句をやつたものだ。

四つに割りて粉砂糖かけし瓜の味

知十

岡野知十といふと誰知らぬ人なき非文學的の俳人である。讀賣新聞の文藝欄で能く見る宗匠である。明治三十六七年頃であつたが、子規派を新派、秋聲會同人を新舊調和派而して知十派を新新派と他から担がれて既に入り理想の、厭世の、煩悶の、と詠つて俳人仲間には頭痛鉢巻さしたのは此宗匠である。

つはものを琵琶の泣かする夜長哉

松宇

俳諧島に生へた神童であつて明治の中頃は子規一派から客將として尊敬された人であつたが麒麟も老いては驚馬に劣るの例で今日に至つては更に進歩の形蹟を認めない。此句の意は天徳寺といふ戰國時代の大将が宇治河先陣の琵琶を聴いて佐々木高綱の心事に同情して泣いたといふ事實を詠んだものらしい。

私は早速白樂天の琵琶行をも聯想する

行違ふ女禮者のゑまひ哉

青々

年禮の途上行違ひ様、ちよと笑まひした貞淑の様子が目の前に彷彿するではないか。『笑顔』でなくて『笑まひ』といふに千金の價がある。明治三十年の頃新派の奇調變調乱調に陥つた際、蒼古沈痛眞に人の腸を割る底の句作をなして子規を初め新派同人を驚かした大阪の傑物松瀬青々の句である

藻の花や水ゆるやかに手長鰻

子規

明治中興の俳仙正岡子規の偉勳は今更言ふだけ野暮である。此句は寫生の成功として同人仲間を持矚された句である。初め碧梧桐の句に『深き藻の花の白き鰻の長き足』といふのが有つた。子規の此句を見ると碧梧の深き白きは贅語である、到底子規の『水ゆるやかに』と糸所を捉へたのには及ばない

領巾借りて君が菱に似るべうも

鳴雪

句法が粹で氣が利いて居る。鳴雪老先生の人格をつくりの句である。實に溫柔優美な詩人の性情が善く發揮されて居る。老先生は伊豫松山の漢學者で弘化四年の生れである。それが慶應三年生れの子規を師として俳句を學んだといふのは如何に道の爲とは云

へ先生の謙抑による事と深く崇敬の念を禁ずる事が出来ない

山の上の涼しき神や夕詣り

虚子

虚子は子規より七歳の弟で明治廿四年以來子規の薫陶を受けた。感情的で保守的であるから理想に傾く前の句も普通なら『社涼しや』とやる所だが『涼しき神や』と理想を含んだ點が此人の特長であり手際である

人を見て蟹逃足の汐干哉

碧梧桐

此人も松山の生れで虚子と一所に子規の門に入つた子規が寫生をやれと絶叫した當時思切つて嶄新な寫生句をやつた者は此人一人であつた。其性情の極めて單純率直なものにも因らうが兎に角子規歿後客觀宗の開山様である。同じ寫生でも平淡な調子で味ふと何等感興を惹かぬものも調子を一寸變へて面白味を持たせるといふのが此人の手柄で、前の句も『蟹の逃出す』とすれば興味の湧かぬのを逃足と名詞にした所に非常な味が生じて來るのだ
以上を名づけて明治の俳風とでもいはいうか、兎に角明治俳人の主要なる者について其代表的とも思ふのを掲げた次第である。以下更に筆を進めて大正現代

の俳壇に就て瞥見する事にしよう

明治三十五年子規歿後の俳壇は群雄割據の有様で各々旗幟を一方に翻して現今に及んで居る。今其主なる者に就て極めて簡單に其俳風を窺ふ事にする

高濱虚子は子規の衣鉢を承けて雑誌「ホト、ギス」に據り極めて平明の調子を歌つて居る

蚊遣火の松葉は痛き涙かな 虚子

同人の句に

春淺く飯焚き慣れぬ嫁女哉

鳴雪

木槿白し一朝雨忽ち晴る

露月(秋田ノ井)

厠に起きて雛の間を寝巻で行きけり三允(中野)

鴨浮てぼとゝ日のある入江哉 鬼城(村瀬ノ上)

枯草にゆよくしく飛べる飛行機哉 零餘子(長谷川)

虚子の句は『松葉は痛いよ』と言つた所に味がある別に理るといふ程の『は』では無い。之を『に』と代へて味つて見ると自ら其聲調に區別ある事が知れる。鳴雪のは月並で、露月のも古い。三允のは新傾向を帯びて居るが我々にも斯ういふ經驗がある。感じのよい句である。鬼城のは『ぼとゝ』と言つた所に不可言の味がある。入江の寒い感が身にしみる程好い句である。飛行機の句は嫌いだ

河東碧梧桐は明治三十八年頃から新傾向句を研究し雑誌『海紅』に據て自覺を突き詰める事に腐心して居る換言すると微妙な現象に對する敏銳な感受性の發露、其れは從來の慣習によつた形式や内容やに束縛さるべきもので無い自己感情の儘を歌ふと言ふのである

樹の籠る裏戸出て畠の百合を見る 碧梧桐

團扇白う人黄昏る草の中 六花(喜谷)

灰作る事に我がする焚火哉 一碧樓(中塚)

手水鉢氷浮べり啄木鳥去る 鶯平(盛谷)

きびくど花さほひ薊の莖太 露石(水落)

霜燒の手いとしけれ灯を明るうす櫻碗子(安齋)

碧梧の句は闇い所から明るい所へ出た感じ、六花のは夕納涼の暮れ行く感、一碧樓のは場所が不明ではあるが自分は今灰を作るために焚火して居ると云ふ自覺の感じ、何れもよく出て居る。手水鉢は純客觀句で末二句は『きびくど』『いとしけれ』に何れも主觀を含んで居る。それが一番よいかといふと、私は霜燒の句を採りたい。『灯を明るうす』といふに其人の動作を活躍せしめて居るからである
大阪の傑物松瀬青々は大自然憧憬を標榜して機關雜

誌『倦鳥』を發行して居る。彼は言ふ、『生を離れた自然の憧憬は趣味に墮する。自分は何の爲に生きて居るかといふ生の問題が大自然と接觸し融合する時思はず知らず涙が翻れる。茲に俳句が生れるのである』と

粟を蒸す晝一時や蠅の聲 青々

春の海渡らば其所に何がある 別天樓(野田)

都外れの一小茶店でもあらうか、粟飯炊く暫しの間蠅の鳴聲が閑寂を破つて聞えるといふ夏の眞晝の情景、座敷の方には盧生が枕をつけて午睡をして居ると見てもよし、又、見てもよし、蠅は竈の邊をブンブン飛廻つて居ると見てもよし、見てもよし兎に角しみくどと生を思はせる佳句である。別天樓のは解らぬ

『石楠』といふ雑誌は白田亞浪の編輯に係る同人に大須賀乙字といふ論客がある。此雑誌の言ふ所は『現實生活より生れ来る、眞生命を十七字と季語とに寄せて人生の爲の藝術を研究する』にある。至極穩健なる抱負である

雲帯に嶺々浮ぶ見ゆ稻光り 亞浪

大風や榎子の月のひそかなる 乙字

前句は稻光りのした刹那に遠山の嶺々の上に棚曳ける雲の見えたる叙景後、後句は大風吹き荒れた夜半の月が櫺子窓から窺に覗いて居る叙景として何れも大千世界の眞諦を咏つたものである

論客荻原井泉水は碧梧桐が新傾向句の研究を初めてから一種獨特の句論を公にして居る新進氣鋭の勇將である。恐らく斯界の急先鋒であらう。其處論は要するに、俳句の中核は生命にある(一)句形としては舊習を打破するにある即ち音韻的節奏よりも心象的律動を重んずるの極、句形はどうでもよい(二)從來の季題は江戸や京都を中心にして居るから汎日本のでないからいけない依て季題を超越する事(三)の三條に歸する。代表作に就て見やう

鼎坐そごろ梨もひく程に燈されつ
暑さ戻りて雷雲や稻田果てもなく

何れも井泉水の近作である。三人鼎に梨をむぎつゝ四方山の話に耽つて居る程に燈で電灯がともつたといふのが前の句で一時涼しくなつたと思つたら又もや暑さが後戻して雷雲が天を蔽ふて耐えられない厭な日だ、見遙かす稻田はそよ風のそよもせぬといふ初秋の暑い〜光景を詠んだのだが後の句である

此外『澁柿』は松根東洋城によつて主幹され

ついそこに雪の高嶺や冬木澤 東洋城

感冒に三日寝て春立ちにけり 霽 月村上(伊豫)

桃林を出てゝ大河の白帆哉 格 堂赤前(備木)

の句に依て芭蕉や去來の示しゝ道を進みつゝある

『懸葵』は粟津水棹主幹の下に東本願寺の句佛上人や

中川曰明、大谷繞石等同人によつて『自然隨順』を標

榜し碧梧一派の官能的を排し虚子同人の遊戯的なの

を斥けて居る

大衆や點心の鐘牙ゆる朝 句 佛

鹽辛あり此寒さ酒足らむ 繞 石(金澤人)

點心とはお茶受けの事である

『南柯』 武田鶯塘主幹 内藤鳴雪指導

夕星の柔かに春を領しけり 鶯 塘

『曲水』 渡邊水巴主幹 鳴雪虚子贊助

冬山や何所まで登る郵便夫 左衛門(吉野)

『木太刀』 星野麥人主幹 角田竹冷指導

鶯の地を踏む松菜ひよろ〜と 竹 冷

春の人轉た遊びに忠なりけり 小 波

足跡や砂の中なる櫻貝 麥 人

『にひばり』 伊藤松宇主幹

呼次かはす淀の舟子や朝霞
客を前に煙管掃除や春の雨

松 宇
迂 外小泉

『俳句世界』 社主佐野天浪

蟻つきし雞頭に暑さ戻りけり 未 洲齋田

『俳諧雜誌』 社主靱山庭後

酒飲まぬ己れ可笑しき櫻かな 庭 後

尙數へ來ると僕を更へるに違が無い。最後に此等撰

に漏れた先進の俳人に就て一二其代表作を掲げて筆

を擱く

寒月や砂丘が見えて小屋見えて 沼波瓊音

焚火して人煙に小さし冬川原 峯青嵐大分師範
學校長

逃げさまに糞落す雞よ靱筵 高田蝶衣兵庫人

冬籠兒等と遊びて兒の心 島田五江秋田人

校正疲れ居眠る人に暖かき 寒川胤骨

因に 俳名の下に地名を付せざる人は皆東京の人である



人生古より誰か死なからん、丹心を留守して

汗青を照らす。

(文天祥)



講演抄記

萬葉集以前の女性

折口信夫氏講演

余が此の演題を撰びし所以は平安朝以後に於ては支那及印度の思想が餘程我國民固有の精神を磨滅し若くは變化せしめたる爲め、純正なる日本古精神を見るに不便なるに反し、萬葉集以前に於ては此の事なきを以てなり。

萬葉集以前の歌、傳記、歴史等によりて吾人が窺ひ得る我國女性は實に下の如き特徴を有す

(一)處女の神聖 上代には處女を清く尊く美しきもの、神に近きもの、従つて神の思召に叶ひたるものと考へたりしことは、多く女が神主となりしことによりて知らる、即ち齋宮とて伊勢神宮最初の神主は倭姫命にして御代毎に御一人の齋宮が伊勢の大神に御奉仕になり永く後醍醐天皇の御代まで續きしはるの著しき例なり。又、卑彌呼とて筑前筑後の地方の

女酋の事が傳はり居るが、此は祭政の首長なりしことを知る。天照大神も亦女性に坐ます。大神は即ち祭政の首長にて夫神の御名の傳はらざるは女神なる天照大神が最高最貴の地位におはしませしが故なり

(二)母權の強大 次に母權の非常に強きは大神の御例にても知らるゝことなるが子は母の子として母のみの教養によりにき。従つて母の子に對する權は最も重し。又結婚法より見ても男子が妻を得るには女子の家にて男子は其の働らきを示して後許されたり。大國主命の須勢理媛を得らるゝ爲に蜈蚣責や火攻めに逢ひ能く此の難關を突破せられて始めて媛を與へられ給ひし神話も之を證明す

(三)勇敢 伊弉諾尊が伊弉冉尊を求めて黄泉國に到り給ひし時の神話に醜女の事を傳ふ。思ふに醜女は女軍なり。女子も亦戰鬪に従事せしなり。又、大葉子が夫に従ひて新羅に遠征せしこと、上毛野形名の妻が軍中に夫を勵まし敗を轉じて勝となせしことなど上代の女子が如何に勇敢なりしかを証するものなり

吾せこは物なおもしそ事しあらば

火にも水にも吾無げなくに

君が行く道の長手を繰りたゞね

燒き亡ばさん天の火もがな

右二首前者は夫を勵まして水火の難をも共にせんと歌ひ後者は夫を慕ひて遠き道程を燒き亡ばすべき天火なきやと歎じたるものいづれも語調強く勇ましく到底近代の柔弱なる男女の歌ひ得ざるものなり

(四)固有道德 此は男女に通じたる道德なるが天武天皇は天智天皇が唐の文明に心酔し給ひしに反し頗る國粹を重じ給ひしが天智の定め給ひし位の名に徳仁義禮智信等ありしに對し之を改めて明淨直勤等を立てられたり。之によりて上代の男女が公明正大清淨潔白を重んぜしを見る

要するに上代の女子は地位重く自重して自らを尊く清きものとし、勇敢にして心廣く清く又熱烈にして水火をも恐れず猛進せし意氣の溢れるたるを看取することを得べし。近代の女性が虚榮にあこがれ柔弱に流るゝは果して如何。若し諸子が此話によりて上代女性の長所を知りて自ら益する所あらば余の幸ひ之に過ぎず

「布は緯ヌイから男は妻から」

(男作五雁金)



眞玉句集

文苑

三橋先生を先達と頼み足元危い俄行者達踏みも習はぬ俳諧の林に入つて掻き集めた言の葉草は是かごよ是れかごよ

涼 嫁一人容崩さぬ涼哉

風に消ゆるビールの泡や舟納涼

涼さや水新らしき金魚鉢

舟の火を見つゝ漁村の納涼哉

蟬 蟬鳴くや夕日に赤き松の幹

蟬に清水に涼しうなりし山路哉

鞦韆に雨後の夕日や蟬の聲

朝顔 朝顔や翌日咲く花をかぞへ見る

朝顔の咲く間を朝の勤め哉

朝貞に早起す我に病あり

朝顔やそと櫛入るゝ纏れ髪

蚊帳 明くる戸に月の入るなる蚊帳哉

美登里兒の夢な漏しそ枕蚊帳
醉人に紹暢釣り去る女哉
一人寝の二階涼しき蚊帳哉
茸狩の山路に入るや蕎麥の花
秋風や津浪の跡の両三家
新調の服の香や秋の風

小春 飯事のお客は嬬小春哉
立膝に顔剃る女に小春哉
稻干すと木を組む人に小春哉
唐薬の匂ふ日影や小六月
切干の芋乾く小春難遊ぶ

頭巾 黒頭巾の囁き去し舞臺哉
挨拶をするたび寒き頭巾哉
白毫を埋み残せし頭巾哉

山茶花 山茶花に苔拂ひ讀む碑銘哉
小鳥啼く山茶花に弱き日さし哉
山茶花や互に炊く尼二人

炭 新建の部屋の薰りや櫻炭
炭の火のコンロに青き焰哉

賜香 素行 喬木 素行 全 溪泉 全 藝洲 全 溪泉 素行 素行 素行 素行 素行 素行 素行 素行 全 全 溪泉 全 素行 喬木 溪泉 全

炭竈に訪ひよる人や暮せまる

待つ戀の遅し粉炭の片起り

夜鍋する夫婦にはねる粉炭哉

水仙に藪千両の實の飄れ

水僊や陋卷に老ゆ彫刻師

水僊に藪千両の實の飄れ

水僊や惜しまれて死ぬ繪師の妻

冬の月寒月や戸ほそを漏るゝ行者の灯

法話果てゝ戻る野道や冬の月

新年雜乞食つやゝ眠れる小屋に初日哉

瓜揚の集ふ窪地や夕日照る

雙六や賽を怨する京訛り

大名の登城下城や初日影

さかしげな子の片言や繪双六

神棚の灯にもなれけり嫁が君

骨牌更けて月の凍道戻りけり

元日や日いづる方を仰がるゝ

句を採る神代の卷や筆はじめ

壽語呂久や上り嬉しき二重橋

寂しらに雜煮祝ふや獨者

即吟 藁火焚て手をあぶる兒や梅島

素行

溪泉

喬木

素行

全

喬木

全

溪泉

全

一笑

溪泉

素行

友鹿

素行

溪泉

素行

沼村

素行

全

喬木

素行

洪水の跡其儘に浦敷む

水郷の森臙なり夕霞

寒梅や藪かげにして金を鍛つ

師の留守を寺子遊ぶや紅椿

箒目や玉椿咲く寺の朝

枝川につなぐ小舟や落椿

全島を蔽ふ椿や海はゆる

堀越に視く椿や黄蘗寺

水汲んで歸れば落る椿哉

數咲いて小鳥喧まし鋳椿

寺に入る一路片側椿哉

春の雪唐傘の雫となりぬ春の雪

雞に掻き消されけり春の雪

醉人の踏散らしたり春の雪

神殿を下り來る巫女に素の雪

春の雪雨となる夜や京の宿

紅梅の蕊に消え入る春の雪

春の雪禿が腦む指の腫れ

田螺 橋杭の節に隣す田螺かな

聊かの芹もくれけり田螺賣

雨晴れを水田に浮くや田螺殼

溪泉

友鹿

素行

素行

全

友鹿

素行

孤村

喬木

全

全

溪泉

湘陽

素行

賜香

素行

全

喬木

溪泉

素行

溪泉

接木 鈍れ合ふて斧をこぼるゝ田螺哉
 簞を開き臺木見つけて接木哉
 接木すや裏山眉に迫る處

日永 君が名を鵲鸚に教ふ日永哉
 永き日や椽に茶をひく靜心
 長江を下る筏や日の永き

飴賣りの笛に聞入る日永哉
 佛壇に鼠顔出す日永かな

病床の時計遅々たり日の永き

土筆 野火跡の黒き斑や土筆
 草隠れ葦とありぬ土筆

鹽務署を圍める畠の土筆かな
 首抜けて猶笑ひ居る籬かな

草の戸や籬繪菱餅桃の花

苗代 苗代や豊年祈る虫祭り
 苗代に聊の山田ありにけり

一村を包む若葉の茂りかな
 鹿の子の目に柔き若葉哉

若葉 高窓に吹きこむ雨や若葉風
 敷千の螢放つや酒の興

螢 螢打つと羅の袖かざしけり

喬木 溪泉 素行 素行 全行 友鹿 孤村 友鹿 溪泉 友鹿 溪泉 素行 喬木 友鹿 素行 湘陽 素行 素行 素行 素行 素行 素行 全行

悠々と螢飛ぶなり川の上
 笛の音は臙に消えて螢哉
 衣掛の柳を迂る螢哉

暫くは花藻に憩ふ螢哉

虫干や西日猶あり紅絹裏に
 亡友の文なつかしき曝書哉

絹すれの音に涼あり虫拂
 虫干の遊疊むや雨遠し

修學旅行記

尾道より奈良へ 四乙 國近ヒデノ

天高く隈なくすんだ秋の月に自分の影に添うて停車
 場へ着いた時は人々は未だねむりをむさばつてゐた
 寒げに電燈のみは白晝をあざむいてゐるけれど、か
 ねて行く先きくの運命を共にと契りし友はその影
 すら見せない。あゝまた早い。しかし同じ思ひに集
 ふ誰や彼、しばらくの中に驛は私共で一ぱいに賑々
 しくなつた。互にかはす言葉の底には常になりました親
 はしさが通ふた。しみじみと自分は限りない心強さ
 を覺えて握り合す手もかたく終に車中の一人となつ
 た。心のぞよめく中にも想像をたくましくして未だ

溪泉 全行 素行 喬木 素行 全行 喬木

見知らぬ旅行先の事をあゝか、かうかど軽い不安と無限の喜びに淡くも胸を轟かすのであつた。はや見送り下さる方々の姿は朝靄に消えてかすかにふるふ御聲を名残に喜びをのせた涼車は目的地さして故山を後に進行してゐる『間違のない様。』にと後ふり返つて去つた父の面影は未だ印象に新しい。私は旅の一婦人の隣に座を占めた。『あれが名高い姫路のお城ですよあら須磨が見え出しました』と指す方には西洋婦人が私共を見送り乍ら話してゐるらしい。

見る人の心々に任せられた楽しい瀛車の旅

葦の淀川をすぎ早くも私共は大阪を迎へた。大阪大阪と心の響に何故か私は全身の力をこめて身振ひして思はせ友の手を強く握つて笑はれた。廣い／＼驛前の大きな建物。プー／＼と珍らしい自働車が走る電車が飛ぶ。忙し氣に歩む人々、あゝ之で大都會の空氣は大方想像が出来る。井の中のかはづ大海を知らせ。自分は丸で夢心地でもう方角なんか一つも分らない。間もなく私共は大阪城に行た豪壯な建物絶大なる石にて築ける石垣はそごろに秀吉公の大人物の程を窺はせるに適してゐる。殿下御手植の樟は直徑四五尺長さ數寸の殘骸を横へて居る

定まつた運命には非情の草木さへも逃れ得ないのである。今は二代目の木が先代の体の真中から城の天高くそびえてゐる。あゝ雪の夕花の朝淀君は幾度秀吉公をこゝに慰さめいたはられた事であらう。あゝ思ひ返せばあの時代がなつかしくて堪らない。河馬の出るてふお濠は僅かに名残のみにて茂り合ふ秋草にあやふくも埋められてゐる。大規模の堤も蟻の穴より崩るゝ如く大人物にて小さき事に執着なき秀吉公はかつて酒宴の機嫌に任せて家康公に『家康殿この城を攻め落す事が出来るか。なにわけは無いさ。堀を埋めさへすれば。』何と云ふ恐ろしい大きな力のひそんだ言葉だらう。悲しい言葉だつたらう。禍は口より出づ年來胸に持てる野心は終に形に現はれて秀吉公亡き後に夏冬の陣を起した、この城中の清い流れをくむ勇士はあゝその時の忠義の鬼となつてよく防ぎ戦つたが天運拙なくもろくもこゝに討死してしまつたあゝ古戦場の秋寒し、世に疑程恐ろしいものが又とあらうか。幼少にして母に先き立たれ義理ある叔母を母として不貞な彼に可愛い妹をさいなまれては流石に堪へ兼ねて是非なく妹をすくひ出して

浮世にもまれ／＼て身はずでに老ひぬ。あゝ蒼天無

情。精忠天に通せず。淺はかなる者のかりそめならぬ疑ひに城の運命を自覺して堤にこまをどぶめて號泣した片桐且元が胸中はどんなであつたらう。御家の滅亡を自覺すればするだけ老いた胸はどんな切ない血をはいたであらう。又死を決してかぶとに香を焚いた重成公や一足先きに自害して内々に勵まされた室眞野氏の心中は又どうであつたらう。すべてのうらみと悲しみとはすべてのなげきといきごほりと共に熱し／＼て大阪の天を焼き染めたであらう。かうした幾百年前悲劇をくり返して心ばかりも櫻花の如く散つた勇士の靈を慰め度い「ねえあの勇士の方々が忠義の犠牲となつて苦勞をなさる事なんか思ふと情なくなりましてねえ」との先生の御言葉に先きだつて私もホロ／＼としてゐたのである。歴史は流れて幾百年世相は如何に遷り變つても亦年号は明治大正と改められても古今東西どうして／＼人情に變りがあらうか。ふと耳許にひびく信號に驚いた所は嚴しい門前であつた。やむなく後ふり勝に烈しい執着を殘して茲を辞した次は三越見物！さても流行の中心の華やかさ恐ろしさ。先刻と只々友の表情の變化の又著しさ。新世界を通り越して天王寺見物を終

へたのははや黄昏時だつた。人出の多いには全く驚いた。大都會の遊樂地とはすべてこんなものか。やがて又車中の人となつた。ゆられ／＼ながら私は今日一日を反省したり次に迎へる青によし奈良の都の事などの想像は限り無い楽しみであつた。奈良驛に下車すると嬉しい迎の提灯を案内に夜の奈良を宿に向つた。すべてにゆどりのある靜かな都。昔なつかし湖畔の古柳。宿にて疲れた身を忘れて私は私の友に手紙をしたよめる。折から誘に任せて共に外出し神祕な古の都の夜景に身心の勞れを一掃した。折しも東大寺の鐘の音床しい寺院の多い尾道をどうして思ひ出さずに居られよう。歸つて見ると床もちやんと出来てゐる。之から皆の友と枕をならべて夢の國に迷ふのか人生是程迄の快樂が又とあらうか。すや／＼と寢息が微かにひびく。故正岡子規氏が「奈良の一夜」を記せられた宵は丁度今夜の様な晩ではなかつたらうか。鹿も澤山居るし又柿も眞盛りだから

奈良大文字屋

四乙 村上文代

六日午後九時奈良の大文字屋についた。未だ瀛車に乗つて居る様な心地がする。時々目まひを催し、倒

れんどするを軽く友にさへられて又元に復す。一日中瀛車にもまれ身体は非常に疲労して居る。私共の室はおにかいなのださうである。私は只ぼうせんと室の一隅に座したるまゝ動きもやらで嬉しどもおぼえず悲しどもおもはない。急に食事を知らず下女の聲。皆さんはそろ／＼と階段を降りて行かれる。私も友達二三人と食堂に向つた。間もなくけたまはしい音を立てゝ入つてきたのは先に來た女中である。「食事の御すみの御方はどうぞ御湯にいらつしやい」と云ふなり又駈けて行つた。お湯はどこだらうかやとあちらこちらをさまよひ居る時一人のぼういが通りかゝつた。ボーイの案内によりて風呂に行つた。何だか穴倉へ引き込まれる様な氣がした。皆さんと一所にお湯に入るのは始めてである。ざんぷどお湯につかり今日一日の疲労を流した。始めて元の活氣が出てきた。見るもの聞く物皆異様に感じた。女中の言葉のかしい事側に聞いて居ても何だかさつぱり判らない。室に歸つて見ると縁側に皆のぞいて

『あゝ澤山居る事あそこにもここにも』『一匹二匹三匹』と數へて居られる方もある。又頻りに『チョツ／＼』と呼んで居らつしやる人もある。何事が出

來したのかと急いで行つて見ると、こはそも如何に多くの鹿のそゞろあるき。此様な澤山な鹿は見た事がない。第一胸に浮ぶのはこの鹿といふ事である。當地方をよく御存知の方と見えて向ふの隅の方より『あれは春日様のお鹿よ』といふが聞えた。其れで始めて判つた。いづぞや三宅先生が春日神社の鹿は藤原の紋がついてると……それから次へ／＼と當時の事が思ひ浮んだ『外出をしませう』といふ聲に不圖後を向くと數名の御方はペンを走らせて居られる他の一人はもはや濟んだと見えて外出の友を誘つていらつしやるのもある。おや私も御手紙をと筆を取つた。ものゝ誰より書いてよいやら、少し筆を持つたる儘考へて居るとあちらで『お父様や弟やそれから』といふ聲がしたので早速筆を取つた。旅に於て宅に手紙を出すは初めてである。何んど書いたら宜からうか。何でも弟には、うらやませてやらう、そしてお父さんには元氣に且つ無事に着いた事を自慢せよう。

葉書は書終つた。はつと安心して室を見廻すと大分出ていらつしつたらしい、私はお友達三四人連れ立ち宿を出た、見ると目の前に淋しさうな大きな池が

ある『何といふ池でせうか私は来る時に一向氣がつきませんでしが』といふと隣りの金子さん『其筈ですよ、あなた目をつぶつていらつしたから』他の人『まあ』そこで一颯り笑つた、何にしても池の名が知り度と思つて居ると『あら是があゝの猿澤の池ですよ向ふに柳がありません』と國近さん

此の猿澤の池、彼の衣掛柳、うたゞ昔を偲ばざるを得ない。あの悲しい物語采女が君寵の衰へたるを歎き彼の柳に御衣を掛けて入水する時の御心はどの様であつたらうと思ひちつと柳の方を眺めて居た。すると可愛らしい小鹿一匹大人らしく柳の根元まで來てしばしの内又引返したあの『汝や知る幾百年の故事を』など次から次へと追想する。他の人々も多分同じ想ひであらう一様に池のみ眺めて居らる、一人がため息をつかれたので始めて、元の心に歸り、いそぎ足に『ポスト』をさがし當て葉書五六枚投げ入れ宿に急いだ。見れば早床はのべてある。嬉し明日はお伊勢様まゐり。何時かくと思つて居た伊勢參宮の目的も明日いよく達するのである。望多き明日の喜を胸にいだいて寢についた

奈良の半日 高垣當子

午前八時宿を出で、春日社へと志した。すくすくと大杉の立ちこめた境内には日の光も流れかねて陰森の氣がたゞようてゐる神鹿の此の木蔭の草むらに此處に一團彼處に二三群をなして餅をねだりに傍に遣つて來る狭い往來などで四五匹に包圍攻撃を受ける。と二進も三進も行かなくなるさうである爪先き上りに行くこと少時結構壯麗な春日神社に着いたあたりは何となう神々しく大正の今日も尙神代の空氣がたゞようてゐるやうに感ぜられた

次は嫩草山、打見るより美しくなつかしい山である霜枯れ初めた薄や刈萱の中を人が踏み鳴らした路が幾條も麓から頂に通つて居る吾等はその一を傳うて上つた見たよりも山は高く思ふたよりも路は急に辛うじて頂に登つた頂はやゝ平坦で麓から見えなかつた絶頂がまだ二重になつてゐる案内者の話によると『三笠山といふは春日山だといふ説もあるが實は此嫩草山の峯が三つあつて丁度笠を三つ重ねたやうだから三笠山といつたので此所がほんとうなのだ』といふことである此日京都の小學生が遠足に來て麓でうよくして居たが頂上から見ると一寸法師のやう

に見えた居ること約半時二月堂三月堂を巡りて東大寺に行つたまづ南大門を入る運慶の作といふ金剛の二力士は三丈に餘らうといふ躰を起して胸肉を張り寶杵を揮うて張り肘に控へてゐる此稀世の傑作に隨喜の涙を注ぎつゝ金堂に入つた五丈有余の毘盧舍那佛は巍然として靜かに眠つて居る天平の昔聖武天皇の勅願によつて建立せられしより此方度々回祿の災にかゝつて屢々修理して今日に至つたもので奈良朝時代のものでは只蓮華座の彫刻のみと聞けど頭部だけは殊に新しく見受けられた『來て見れば左程でもなしおは佛』思つたよりは小さいと感じたあゝ此大佛も建立のそのかみは上は天皇を始め下一切衆生の渴仰を受けられたことであらうが末世に及んで齊衡に首を落され治承永祿には焼かれ久しく露佛であつたがそれでも慈眼慈視衆生醉心地になるまで三笠の月に見とれ澆季の浮世をかこちた事であらう青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如くと稱へられしは勝實の古へ今は大小の京坊大半田圃と化し一條大路輾轢門など只昔の榮華の儔を止むるのみ吾等は幣取り敢へぬ手向山にも詣です九重に匂へる八重櫻をも見ずして一路猿澤池に行つた池は周圍二三丁ば

かりの一小池、池中には鵜、鯉など恰も天平の昔を語るが如く洋々として泳いでゐる池畔の一小祠はかの采女を祀れるもの鳥居は池に面すれども祠はあらぬさまに向きゐるこそをかしけれ傳云ふ往時此社を建つるや采女『此池なくば吾死なじ池こそ恨めしけれ』どて一夜の中に背かれたるものとか時日正に午に近し吾等は古への奈良の都に名残を惜みつゝ停車場へといひだ

二見の夜

四乙 濱 中 瀧 江

『山田！山田！』驛夫の寒むさうな聲が突然車窓から響いたあゝもう山田か二見へは間もあるまいと思つて居ると先生から『次は二見ですから取り落のないやうに荷物』との御注意に皆網棚からバスケットや袋物や蝙蝠など下して下車の支度をする

間もなく二見の驛に着いた驛で宿から迎へに來て居る車に手荷物を預けて手輕になつた長い田舎道を冷たい夜風に吹かれながら疲れた足を其方へと運ぶ。やがて町に入ると大抵の店に具細工など賣つて居るので初めて二見へ來たやうな感じがした

町を通りぬけると海岸に出た暗い々々はても分らぬ

様な沖から故郷などでは中々見られぬ大きな波が『ザアザア』といふ凄い音と共によせてはかへすのはいふにいはいぬ旅の淋しさを感じさせる黒い門構の宿の前へ来ると提燈をさげた女中が愛嬌よく迎へてくれたのが何より心地よく感ぜられた玄關を上ると左手の座敷へ案内された廣いお座敷に一列に並んでゐる皆さんの顔からは無上の嬉さがもれて居るたのしい夕食がすむと長い廊下を廻つて湯殿へ行く綺麗なお湯に連日のつかれも忘れた湯殿から歸りに玄關で名物を賣りに来た女から繪葉書を二三枚求めて故郷へ便りをした

友達二三人と町に出た沖から吹いて来る風のちぎれるやうな潮風にゾットしてシヨールに深く顔をうづめたどの店前も學生のお客ばかり一番綺麗な店で名産を印ばかり求めて宿にかへつた

今晚は空模様がいから明朝はうららかな日の出を七五三岩から拜まれるだらうと考へつゝ玄關に来るとさつきの店はまだ片付けてあつた座敷一杯にしかれた寢床の中にはや夢みていらつしやる方もあり四五人圓くなつてうれしきうな顔して何やら話しながらバスケットの整理をしてゐる方もある私達も

持出して整理をしたそして今まで買求めた名産物をこれは誰にこれは彼れになど心に定めるのが何ともいへぬうれしきを感じた折しも何處からか十一時を報ずる時計の音が夜の空気を破つて見えたので明朝の日の出を樂みに床についた

二見の朝

松本よしの

午前五時半『サア皆さん日の出を拜みに行きませう』との先生のお聲に可惜夢は破られた目をしばたきながらあたりを見るとまだ寝て居る方もあり支度がすんで出掛ける方もある私もそこく支度をしてあくせくと出掛けた遙か七五三岩の方を眺むるにこの中學生やらが恰も黒法師のやうに岩下の汀にたぐづんでゐる伊勢の海を吹き来る潮風は身を切るやうに寒むい漸く岩の下についた日の出にはまだ三十分もある時に一人の船夫が一艘を岸に横へ『皆さん舟にお召しなさい海上の日の出は格別です』と誰にいふともなく叫んでゐる私共は之を聞いてうづろに心は動いた。と、森先生は、つと前に身を進められ「いくらう」「お一人前五錢つゞです」先生之を聞き流して大河内先生と何か御相談なされたそして「皆

さん乗りますか」と森先生「乗ります乗ります」との聲は異口同音にそこより口をついて出たまもなく我等一行五十余名は舟中の人となつた搖曳として一上一下遙沖合に乗出した某中學生等も四五艘の舟を舳して吾等と相前後して乗り出したるして何やら校歌でもあらう突拍子の節で歌つて居る吾等も興に乗じて迦陵頻伽といったやうな聲を振り上げて歌出したげにや海若も驚き走り空行く雲も止るべう覺えた時に徐々として旭日天の一方に現れた「皆さん太陽が地平線上に上つてしまつたら拍手をしませう」と先生の發議——見る／＼中に全く波上に黄金の塊のやうな朝日が輝いたと同時に五十余人の手は一齊に拍手急霰暫くは鳴りも止まざりけりであつた居ること少時舟を反して七五三岩の直下に舟を留め恰も繪にあるやうに兩岩の間より拜し又拍手したあゝ二見の朝海上の日の出伊勢の海の舟遊びこの愉快この誇り私共は永久に忘れぬであらう

伊 勢 參 拜 宮 邊 ふ み

我等五十余名を乗せし電車は轆轤として間もなく宇治橋のたもとにつきぬ直に御橋を渡りて神園に入る

宮丁等朝清めの跡見えて一本の塵たになき芝生に先づ目を障りぬ行在所を左に行くこと半丁ばかり五十鈴川の清流あり水晶を溶したる如く天のこんづもかくやと思はるゝ靈水に心身を清め年來崇敬し奉れる内宮の大前に恭しく頭を下げ暫く黙禱しぬ何事のおはしますかは知らねども唯有りがたさに涙こぼるゝばかり境内は氾々數十丈の神杉高く中空に聳えその神々しさ尊さげに書くべき筆も言ふべき言葉もなかりけり

時に一團の女學生これも修學旅行と見え皆一様に紫紺の揃にて優にやさしいでたちはいはでもしるさ都の姫達田舎育の吾等うごろに忸怩たらざるを得ざりき後にて聞けば跡見女學校のとか

電車にて約二十分徴古館に至る古今の武器調度等のある中に上代上達部殿上人等の着給へる袍直衣水干さては鎌倉時代の綾蘭笠徳川時代の大名行列の繪なぞ身はこれ恰も今の時代にあるが如く最も感興を催しき時に日正午に近づく吾等は茲を出で館前の一茶亭で晝食し山田に至り外宮を參拜し停車場に至りしは正に午後一時半これより吾等は山紫水明の大津に向はんとするなり

とかくして三井寺についた此日天氣晴朗寒から巻暑から巻探勝には注文の日和である寺は湖水に面した一高地眺望絶佳の形勝を占めて居る見渡せば遙か湖水の彼方に白雲皚々たる高山は伊吹山とか此方には比良の峯暮雪に名を得たれども未だ雪降らぬころ物足らぬ次に矢走瀬田打出濱弓手唐崎堅田など皆指呼の中に見えるあゝ此美此勝歴史の感興と相俟つて無限の感に打たれ露太子の奇禍を買へるもげにどうなづかれた低回少時茲より磴道を下り所謂辨慶の引摺鐘を見る「抑々此鐘は壽永の昔辨慶比叡山に居ました時毎夜『三井寺に行かう三井に行かう』と鳴るので同所より坂本に引き下しられより茲に安置したものでありますうれ故地につきし半面は摺り切れて残はありません云々」と誠しやかに番人の喋べるを聞き見れば成る程引き摺り来りしものと見え其擦痕瞭然として半面にある實に其怪力に驚かざるを得ないやうであるが高所より下すことなれば鐘自身の重さにて自然に下る敢て辨慶ならずとも出来る藝當だと抱腹の至りである

それより電車に乗り粟津ヶ原にさし掛れば右手の田

圃に一本の松ありこれぞ義仲の深田に陥りて討死せしといふ所とか流石の旭將軍を以てしても時利あらす馬行か巻恨を呑んで此地に斃る星霜七百年、一本の松昔を語るのみあゝ盛者必衰會者定離とはよくいへるものかななど思ひ耽る中いつか電車は石山の麓についた

停留所より約五六丁にして石山寺に至る前面瀬田川を隔てて群山に對し只北方僅か湖水を見るのみ寺内を一週して歸る内陣を見るには三錢づの木戸錢を要すとか此故に彼の有名な源氏の間を見ずして下山した獨り先生は非常に興味を持たれたものと見え内陣に入り源氏の間紫式部の筆蹟硯など見られたと後に聞いてぬ

此寺に一の珍器がある有史以前のものなりといふ其形半鐘に似たれども只両面に羽毛の如きもの一刻に突出してゐるこれら異なる点であるげにや此寺は藤原の宮の頃建立と聞けば此時開堀せしものとすれば成程どうなづかれぬ眞偽は別として兎に角珍しきものには相違ないと思つた

歸途車掌の厚意で途中下車瀬田の唐橋を渡る欄干の高さ七八尺擬寶珠之に副ふ橋下帆船の往來する様筆

にも口にも盡されない此時恰もよし打出の濱より矢走に向つて數多の歸帆滿帆に風を孕んで歸るさま思はず「打出の濱を後の追風と」誦んだ

午後二時名残多き大津を辞して鐵路京都に向うた

京都の一日

竹部キヌエ

昨日までは飽くまで自然の美に接した今日は花の都を週り人工の美を賞せんとするのである午前七時半假の宿を出て三條大橋を渡り左に折れて御所につき兩陛下を拜せんと建禮門の此方に整列して居ると一警部來りて「此處は少し場所が悪い彼方はよろしい」どの厚意によりて建禮門の側に陣を取つた先着の中學や女學校の生徒の最先頭に立つた其喜び其誇り衆皆期せずして「嬉しつ」と叫んだ

午前九時陛下は鹵簿蕭々として建禮門より御出ましになつた吾等は半上体を屈して謹で拜した列前御通過の時忝くも龍顔を向けさせられた咫尺の間にて天顔を拜し奉る其ありがたさ覺えず冷汗淋漓として背をつたうたお轍の遠くなるまで奉送し皆感喜の笑を漏して居ると九時十五分といふに建春門より皇后陛下御出ましになつたあゝ今日は如何なる吉日ぞ天さ

かる賤の女が兩陛下を一度に拜し奉りしことの有りがたさよと衆皆感極りて暫し茫然として居た御所を出で電車で北野神社に詣り參拜しそれより田舎道を辿ること約半里にし金閣寺に至る義滿蒙奢の餘は巍峩たる三層樓に残れども金箔は大半剝落して残るは只三階の天井のみ寺後に有名の茶室あり境内の紅葉は龍田姫の丹誠をあらはし錦とは世の常譬へやうもない美しさであるあゝ三代將軍の威を以て天下の寶をこの閑雅幽邃の地に集注し月に花に榮華を極めしことであらう奢るもの久しからず間もなく應仁の乱となり洛中洛外をして灰燼に歸せしめた思へば此閣其導火線とも云ふべきものか

此を去りて電車を買切り一路智恩院に向ふ金堂には數多の圓顛稱名の最中余等に案内者に隨つて彼の鸞廊を渡る實に一步毎に「キツキツ」と鳴ることの可笑しさよ先生は案内者に向つて「此構造如何」問はれたが笑つて答へなかつた神秘否や佛秘といつたやうな面持ちで

それから彼の巨鐘を見た打てば洛中洛外に響き渡るとか又嘗て講讀の時に讀んだ此鐘の下を婦人が通れば蛇になるといふを思ひ出し物數奇に通るものもあ

り流石に逡巡して退くものもある時に雨肅々として降り出した電話にて宿より傘を取り寄せ清水寺に向ふ時に細雨益々加り加之連日の旅行の疲にて拂々しく歩むものも少く三々五々漸く清水寺についた見渡せば花の都は暮靄に包まれ只々冪々たる廣野の如く處々に魔の如き燈火あるのみ三十三間堂は時間後れて入ることが出来ぬ經書堂鳥邊野なども見せして歸つた

あゝ樂しかりし修學旅行の最終日も暮れた吾等は今數時間ならずして故郷に歸るのである嬉しくもあり名残り惜しくもある

佛通寺に修學旅行の記

二甲 大 淵 三 枝

十一月七日。チンと五時を報ずる時計の音に驚き目醒む。銀をまき散らしたるが如き星は空一ぱいに瞬けり。喜び勇みて支度を調べ、急ぎて家を出づ。七時五十二分發の下り列車に身を投じはつと安堵の息をつけば、我等多數の望を載せたる汽車は今や黒煙を残しつつ尾道を後にせり。

森々たる海中に夢の如く浮べる小島も、朝靄を透し

て淡く見ゆる白帆の影も、眞白き砂原の上に形おもしろき磯馴れ松の生へたるも、紅葉せる山々も、一として我等旅行圖を祝せざるはなし。汽車は間もなく糸崎、三原を過ぎ行きて無事本郷驛に着せり。我等の豫想せしよりは人家尠く驛も小さし。之より高橋様のお父様の御案内によりて路を左に取りて約二里なる佛通寺を志して出發せり綿の如きちぎれ雲は高くそびゆる山々の彼方にたゞよひ、十時過ぎの太陽は暖く我等を照せり居並ぶ人家は前に豊けき田畑を控へ遙か向ふに川を横ふ。地味の良好なる事實に本郷の名に相應し。驛より一里半許りも辿り來たる時、其處は人家なく、田畑なく、唯淋しき一條路なり。左も山右も山なる其の間を趣ある巖のあまた散りしける清き溪流は斷崖絶壁の上にあやうげに立てる松、賑はしく紅葉せる木々をうつして潺々として流る。あゝ氣高くも優しき自然の眺め。我等の心持ちも自ら美しくなりぬ。

暫くして稍々廣き所に出づ。道の両側にすく／＼と生ひ立てる老杉は枝を交へて高く凌雲の勢を示す。やがて我等の一行は奇しき流れにかゝる橋を渡りて『禪宗臨濟派總本山』と大きく掲げられたる門に入

る。我等は今待ち兼ねたる佛通寺に來りしなり。正面には金堂ありて其の左側に庫裡あり其の他經藏、鐘樓等も廣き境内にゆつたりと坐を占む。金堂の前面には寺内伯爵其他名士の記念せる植木等あり。先生の御言葉のもとに我等は楽しく御飯を戴く。食後一同開山堂に詣でんとて前の橋を渡り勾配の急なる石段を登り行くに我等四五人にかゝへ猶余らんとのみ思はるゝ大杉は幾本となく生ひ茂れり。下より開山堂を漸く望み得るあたりに數多の羅漢あり立たるも、ひざまづきたるも一樣ならねど何れも顔のひつかしきは共通なり。「ようく御覽なさい。羅漢様の中には必ずあなた方の亡くなつた祖父母様の顔と少しも違はぬのがありますから」と眞面目に語る校僕さんの言葉も面白し。

開山堂は今より約五百年前の建築物にて當寺の建築物中最年代を経しものなりと。我等はやがて前よりも險しき路をたごりて元の處へ歸るに御堂には種々の寶物を陳列しあり。狩野元信、雪舟の畫は我等にも流石に立派なるものよとなづかれたり、後小松天皇の皇后の一度織りては三禮して織り給ひし佛様の織物をも拜す。其の他小早川隆景、愚仲和尚の像

等あり。之は眞物は出だされずとの事なり。

一時間程自由行動を許されたれば向うの山にてめづらしき花、茶の實など尋ね遊びぬ。其の内に早時間にはせまりしかば名残を惜しみつゝ一同は此處を辭したり。清き流れはやはり紅葉の錦をうつして流る。斯る深山幽谷に居を構へ、以て靜かに風流なる餘生を樂しみし足利時代の人々の氣分を遺憾なく顯せり途中時間の都合上本郷の小學校に立ち寄りて休息せり。此處にて一時間以上を費し、驛に著きし時は七時二十分の發車時間迄に猶一時餘りの間あり。さても其の間のもどかしさ、げに平生の四五時間にも當れり。大空には星もきらめき夜風は冷くそごろに我家の幕はしくなりぬ。漸く瀛車も來れば急ぎて乗り込むには乗客充ちて大混雜なり。我等の乗り込みし室には廣島歸りの三年生の方、大勢見受けられたり。漸くにして瀛車はなつかしき尾道に着したり、我等は先生に別れて家路を急ぎぬ。無數の星は我等を祝福するものゝ如く輝けり。

宮島遊覽の記 三甲 今井 小園

時は十一月七日の朝またき私等は同級百人の生徒と

共に安藝の宮島に汽車旅行を企てた

廣島城の遠望に眼がさめて宮島驛に着いたは八時過ぎであつた

三十間餘の棧橋から御座船の様な連絡船に乗つて四海波靜かな海を嚴島へ渡つた

名だゝる大鳥居は先づ私等の血汐を沸かす

狭いながらも奇麗に片付いた町を通る。兩側の家々にはいづれも名物の杓子や貝細工を並べて客の好みに任せて居る。浮世離れた平和な幸福な生活らしく思はれて床しい

白い神馬に氣高い感じを持つて廻廊の中へ這入つた折目正しい袴を着けた老祠官に各種の説明を聽き乍ら右に左に曲折迂回した

時々説明から耳を外づつて海を見る。折悪しく千潮であつたが數知れぬ朱塗の柱の下にはそれでも若干の忘れ水があつて、それに名も知らぬ貝も見える、海の目高も居る、何かしらツブツブと無数の小孔から泡が湧く

最う大鳥居の近くまで來た

扁額は畏くも有栖川宮熾仁親王の御筆になるとか。

一同は寶物拜觀の順序となる

甲冑、太刀、繪書彫刻いづれも國寶この事ではあるが私には解らない。賣店の前を通り抜けると廻廊は終りを告げて陸地となる

鹿が居る、鳩が居る、大公園である、物賣る店料理店貸別荘寫真館、逍遙の人、漫步の客、赤い廻廊と青い海を背景にした此快樂園、私は暫く夢心地であつた『晝飯』の聲に驚かされて四五人の友と稍々奥まりたる清流の側に座を取つた。やがて清盛塚を訪問する事に一決して紅葉谷へ向つた。左手に方つて五重塔や千疊閣が見える。惜しい事には千疊閣が今普請中であつた。紅葉谷も時季が過ぎて居る。岩惣旅館の前から元來た道へ引返し惜しき別を嚴島に告げて午后一時何分再び車中の人となつた

之れから廣島を訪ふのである

已斐に下車して電車に乗り練兵場から廣島女學校の前に來た時切りに舊知が戀しくなつた。舊知とは新帶先生と吉岡貴美子嬢である

泉邸を見るべく交渉半ばに二人の方が來られた。圖らざる遭遇に、夢かさばかり喜んだが、それも束の間、二人の姿を松の梢に見送つて、私共は泉邸を見た。曾遊を追憶するばかりで紅葉の美しかつた事の

外何等の印象も残らぬ

やがて廣島驛から三度車中の人となつて本郷に入日
を惜しみし代り、佛通寺遠足の一年級を車中に迎へ
て、互みに話し交々聽いて流車の發着もうはの空

立花村遠足紀行 四乙 岡田三樹枝

昨日の今日ではあるし、空模様も何となく可笑しい
降らねばよいがと皆様の後へついて校門を出たのは
午前十時過ぎであつた。立花村つて未だ一度も行つ
た事がない。高見山の裏手の或海岸の一村落で眺望
もよいこの事。夫れに春の遠足は遊びといふよりも
寧ろ足を鍛へるのが目的だといふので常から餘り強
くもない私にはよい鍛錬になるだらうと尾いて行く
兼吉の渡舟に先頭の人々が乗つて船頭が中流へ漕ぎ
出した所を眺めるとホントによい景色だ。白いバラ
ソルが青海波に映つて銘々の海老茶袴の影が波にゆ
られるなどは丸で唐紅に水くゝるといふ立田川の紅
葉の様である。一行の中には今日の天氣を氣遣ふて
か傘をお持ちになつた方も二三見えたが、東村の菜
畦麥圃の間を縫ふて行く頃にはお天氣も大丈夫らし
かつたので知る邊の方へお預けになつた方もある。

小學校の前を通ると多くの生徒が物珍らしさうに眺
めて居られる。川の流れに沿つて進むと大きな溜池
がある。こゝから道は段々小砂まじりになつて川原
の様な所を行く。暫時休憩の後急坂に差しかゝる。
坂の巔には大きな一本松があつて村の歴史を語り顔
である。坂を越すと行く手に當つて海が見える、漁
村が見える、大方立花村だらうとお隣の方に何ふと
果してさうであつた。遠見は大さうサツパリとして
品のよささうな家並である。里は見えてゐても遠い
ものだ幾百歩あるだらうと試みに一ト足二タ足……
百歩二百歩果ては計算もウルサクなつてお友達と四
方山の話をかはし乍ら着くともなしに海岸についた
道沿の家々からは老若男女の三三五々私共一行の雄
々しく勇ましき貌を眺めては口々に評してゐる。立
花、ア、立花、尾道を去る事さまで遠くもないのに
斯うした女學生の遠足に幾百人と揃つての行列を見
た事は初めてだらう。個人としては兎も角此村とし
ては蓋し開闢以來今日が日まで無い事だらう斯う思
ふと私達の眉には何となく或る一種の誇りが浮ぶ惡
い事かも知らぬが之が學校の示威的運動にもなる
と思ふと愉快でたまらない。一行の休憩所は小學校に

沿ふた沙原で寄りては返る女浪男涙を手に掬ふ事の出来る汀である『もう何時でせうかと先生に伺ふと早十二時を過ぎたと仰やる。其内にお晝飯を頂いても宜いどのお觸が出たので兎ある小舟に腰を卸し持參のお握りを頂戴し乍ら、アタリの景色をしみくると味うと思ひの外好い景色である。向ふに見えるが例の百貫島、今日は燈臺がはつきりしない。雲煙模糊の間に見え隠れするのは四國の連山眞向ふの新緑滴るばかりの山々は弓削の島に因ノ島、あれく澤山の帆前船を一艘の蒸氣船が曳いて来る。海士の釣舟か何かは知らんが涙の間にくく浮んでゐるのは丸で青壘に椎の實でも蒔いた様。後方に見える險山ヲ、高見山の雄健なる姿よ。巖こぶしく峙つて、向島全島の坤軸をなして居る。あれ頂上の一本松もかすけく見えるではないか。オ、それよ、學校の教室の窓から見える。私達は今あの松の下の立花村此處にお辨當を食べてゐるのだ。學校に居残られたお友達の幾何はどんな感じを持つて居らつしやるだらう。初めての私にはあたりの様子が珍らしく感ぜられて少時お辨當を手に見惚れてゐたのである。やがて小學校からお白湯が運ばれる。私達は之に渴を醫

して猶暫らく遊んでゐたが其内に歸校すべく命令されて再び隊伍肅々と海岸傳ひに今度は桑田麥圃の間を迂回して干汐に向つた。高見山の麓を一週して歸校する方針である。何とかやら坂に差蒐ると風雲少しく急になつて磯打つ浪頭に咲く花の常ならぬを見る。後の方に『雨ですよ』といふ聲がする。一ツ二ツ、點滴は顔を打つ、袴を打つ、見上げると暗雲空を蔽ふて龍も出でんす有様。先頭の方は皆一様にパランルをさされる。傘も二三本は見えるが何物もお持ちにならない方も見える。やがて一陣の風と共に雨はいよく降出した。最うこうなつては用捨はない。袴の裾をかき上げるもの、足袋を脱いで袂へ入れるもの、各々思ひ思ひの身仕度に取り蒐る。それでも平素の心掛は大切なもので面目を崩し品位を傷ける者とは一人もない。中には御自分の傘を先生にお貸せ申して隣の方と相合傘になられた殊勝な方もある。干汐を通る頃は篠つく雨に海の眺めも何處へやら、濡れまじと厭うても心なき雨は襟といはせ袂といはせヒタ襲ひに襲ひ來て私共は全身濡れ鼠と化し去つた。辛うじて江與小學校についた時は先着の方が學校の傘をお借りになる時であつた。私達は此

所で少憩して歸途についた。雨の間から尾道の市街を望んだ時は久しく別れてゐた慈母に再會した様な氣持がして降る雨も泥濘も苦にならず、疲れ足も自然と軽く、氣輕な先生の面白いお喋りに慰められて間もなく兼吉の渡についた、折りしも潮流は東へく流れるので渡舟は有らぬ方面に舵を向けた。舟の中でも降る雨と傘の雫にぬれぬれて、或る棧橋から上陸した。他から見たら哀れども不機も見えなであらう。併し幸に一人の怪我もなく落任もなく豫定の行動を豫定の時刻に執行して困苦缺乏にも耐へ忍び、人知れぬ或物を獲得したと思ふと、此一日の清遊は決して無意義ではなかつた

雨は降りしき。慈母と降つて我等の向上心の萌芽を永久にはぐくめよ

競點作文中より

叔母さん 一甲 高橋ヨシエ

私の御友達で年は十二で、早叔母さんになつて居る人があつた。それは町田さんといふのでした

叔母さんと言ふよりは寧ろ姉さんと言ふ方が適當だと思ふ位だけれど、その家の人は嚴格だから、小

さい時分から言はせつけないで大きくなつてもなほらないと言つて、叔母さんと言はせるのだそうだが私なんかよく『十二の叔母さん』と言つてからかつたものだ。けれども今思つて見ると、一つもおかしくも何ともない。姪よりは叔母さん方が歳の少い人さへあるのだから

この叔母さんが、私とよくつれだつて學校から歸つて來ると、姪の俊ちやんは遠くの方で遊んで居ても直ぐ走つて來て『叔母さんお歸りおんぶして』と言つて色々すかしても聞かき、袴の上から負ふて家へ歸るのが例であつた。そして家の門まで來ると町田さんが私に『さよなら』と言はれる、するとそれに續いて俊ちやんも『よちよの叔母ちやんさようなら』と言つて居りました、俊ちやんは町田さんを叔母さんと言ふから、それと同年配の人は誰でもやはり叔母さだと思つて居るのでせう

ほんとに可愛い子でしたが其の翌年四つの歳の夏開もいまはしい赤痢でなくなりました

あゝそれから『よちよの叔母ちやん』と言ふ聲を私は最う聞く事が出來なくなつた

それから半年もたらない内に町田さんは學校の遊動

圓木から落ちて、頭を打つたのが原因となつて腦病になり、病院の白いベットの上に久しく寝て居た。私は病院へは一度も行かなかつたが、御手紙は度々頂いた。それにはいつも世を悲觀した様な事ばかり書いてあつた。四度目の手紙には『私は死ぬ、可愛いと姪の後をついて行つて、あの世で又守をしてやろう、私の死んだ後で空を見て下さい。星が一つ殖えて居りますから、それを私だと思つて下さい』と言ふ様な悲しい事ばかり書いてあつた。それから丁度十日目の時とうとう御自分で豫言して居られた通りになくなされた。あゝ、今から思へば四度目の手紙が形見だつたのだ。私はそれから夜になると、數ある星の中から町田さんの星をさがし出さうとしたけれど、どうしてもわからなかつた、かうして小さい叔母さんは、此の『よちよの叔母』を残して可愛い俊ちやんの後を追ふたのである。噫

其の日其の日の仕事 二甲 石井 トラ
それは目の可愛い子でございませう

毎朝定つて六時頃丁度水色の薄絹で包んだ様な寒空を知らん顔にスタ／＼と上から下へ向いて行きます

此の子は誰の子何をする子かは私は知りませんが、風がおそろしく強く吹きまくつて大きな音を立て、屋根の瓦を蹴落し砂を捲き上げます、良神社の老松がひしと折れたのも此の日の事でございませう。此の日少し早目に起きた私は又あの目の可愛い子を見ました、今日も又何處へ行くのだらうとじつと其の行き過ぎる後姿を見送りました、引きつめて丸く低く出したびんの上に赤い鹿の子をかけた小さい桃割を結つて洗ひぎらしの茶縹の木綿着の上に紫地に水仙模様を浮した前垂をして居るのは此の子の年中變らぬよそほひでございませう、それから紺足袋をはいて後の低い下駄をはいて居ました、じつと見送られるとも知らずスタ／＼と下へ行きました、も少し小路へ曲るといふ角の所で何につまづいてかはたと倒れました、私ははつと思つて見てゐると其子は容易に起きず何か拾つて居る様子なので一体何を拾つて居るのだらうとよく見ると其は思ひがけない髪結道具でしたので私は直其の子は髪結の弟子だと思ひました、何處へ行く何をする子かといふ事がよく分つて其日私は永い間考へた謎が解けた時の様に爽やかな氣持になりました。それで其の夜さも得意らしく

姉にあの毎朝見る子は髪結の弟子であつたといふ事を話しました、すると姉は一寸針の手を止めニツコリして『其事は私はもうどうから知つて居ました』とおつしやつてだん／＼と其の子の身の上話を語られました『あの子の名は美代お美代さんとか聞きました年は十四ですかあの子位よく働く子はまあ無いでせう其の日／＼の仕事は一から十まで親の爲家の爲にして居るのです、あの赤い顔した脊の高い仲せ風の人がよく通でせう、あれがあの子の父親で松助さんといふ酒飲でかせいだお金は皆自分のお酒代にして失ふのでお美代さんも好きな學校を中途でよしで、やさしいお母様をたよりに幼い弟妹や大酒飲のお父様の爲に一寸の假もない位働きつゞけて居ます朝は未だ屋のある内に起きてお茶をわかし自分だけ先に戴き弟や妹が起きると直ぐ學校に行かれる様にといろ／＼仕度をして置いてくれからあ／＼して早くから髪結の家へ出かけ晩は月を戴いて歸つて冷いお残りのお汁をす／＼つて直ぐ又ふじくらの裏をあんだり麻糸をつなぐのです、又お父様の腰をもんだり妹や弟の復習を手傳つてやる等並大底では無いでせう正月や盆前には髪結は忙しいので夜明しを度々する

さうですがお美代さんはお客様にも大層親切ですし又先生にも非常にまめ／＼しくつかへるのでお美代お美代と可愛がられるさうです、ろうしてせつせと働らいてためたお錢は皆お母様の前に出し決して自分の物は買ひませんそれから下駄や布を貰つても成るだけ姉弟にゆづります。眞當に感心な子ではありませんか、其近所の人達もよく働くよい心がけの子だと賞めて居られました』と姉様の永い話が終りました。カン／＼と焼えて居る櫻炭の光で私の頬も姉様のもほてつて居ました

私はあの子の可愛い目が今も目の前に見えますが實に何ともいはれん貴い氣がします、其の日其の日を最も有益に過す人の貴い魂があの子の中にあふれて居るやうでございます

後 一 年 三 乙 岸 田 道 惠

春寒く。荒れくるう戸外の景色を、硝子越しに眺めた。底曇りのある空の色が、壓へつける様にかぶさつて、紅椿が一輪二輪、はかなくも梢に命をつないで居る

ガサ／＼と落葉かく音がして、紅襷を無雜作にあや

つり、紺足袋を穿いた松や（下女の名）が現はれた
をして私の方を見て

『もう、お別れしなければなりません』

と一言云つたきり、何も云はずに一所懸命掃き出し
た

その甲斐くしい姿、可憐の娘、同情せずには居ら
れない

松やは一先づ掃き上げた庭を尻目にかけて、ドツカ
と椽側へ腰を下して、思案氣な目をしばたいて吐
息をついた。十七八のよく肥えてしつかりした顔

『ネ、母様もあんなに云はれるんだから、もう一年
辛棒しておくれ』

私は、母様の云はれる様な口調でかうすゝめて見た
『私もそう思ふんですけれど、里から歸れどやかまし
う云ふて來ますので』と云ひ盡る

こんなによく働く娘が又とあらうか。どうか手離し
たくないよと云ふ母様の心をよく知つて居る私は、折
さへあればかうして尋ねるのでした。『來年になれば
私も卒業するんだから、どうかうれまで辛棒してお
くれ。里の方へは此方からよく云つてやればいゝじ
やあないの。』と云へば

それもさうですけれど、と淋しく笑ふ

ビュー／＼と木枯しが吹きあれて、さつき掃いた庭
に又も木の葉が散り布いた

折から、可愛い手毬歌が聞えたかと思ふと、寒そう
に赤い顔をした妹が入つて來た

そして二人の様子を不思議さうに眺めて居たが、や
がてニツコリ笑つて毬をつき出した

又落葉したのに氣のついた松やが、急いで立たうと
した拍子に、折わるく手が毬にふれて、毬は庭の隅
に落ちた。遠慮も何もない妹の事とて、『悪い松や
だわち、拾つておいで』と妙な目つきをした。あゝ

其の目つき、松やはどんな氣で見たらう。もしこん
な事の後一年がつどかないといふんだつたら。どて

も此の事が成立する事はかたからう。いや／＼、松
やは此んな事を氣に懸ける女ではない。でも、不安
な後一年。どうぞ辛棒しておくれ

ホトリツ、と心ありげに紅椿が散つて行く

嬉しかりし思出 四甲 上月 庸子

梅のたよりならで訪ふ人の稀な如月二日

落日はしばしたゆたふ紅をのこして西山に没し、や

がて緑の大空に夕づゝ一つ。さびれし下界を見わたしてゐた、『嗚呼今日も暮た、神秘の扉はあけはなされ、偽も飾もない夜の空氣はみなぎつた。』と、一人ごちながらまぶしい燈火の下にたわいもなく散る梅の一ひら一ひらを詩集の中にをさめた。折しも荒々しく襖を開けはなち、つく息もせはし氣に『父上が急病』との母上の知らせに平和な心は破れ全身は黒雲におほはれた。その刹那手はかたく、心はつめたく、髪の毛のみだれた父の影を想像し父の部屋には丁度死といふ影が満々てゐるやうな氣持になつた父の居間には白い床はひかれ屏風はたちまはされてうつり行く時計の刻一刻は皆無言の内にすすべされた蒼ざめた顔色。わななく眉毛。力なく結ばれた口、嗚呼昔は紅顔の少年も變りはてたるこの唇
人は生死のちまたにさ迷ひ世は興敗のわだちを廻る夜風あらく雨戸をうつ毎に、今か、死の手は、我父上をうばふ神かと幾度もく／＼総身はおのゝいた床の椿はおちる父上の命もあの花の様にと思つた時又も御眉のあたりを拜した。次第く／＼に變り行く御顔
悲しみもなく、そねみもなく、偽も憎みもない山や

川春秋の榮滅を見る人々の心々にまかせせるあの大自然に身をかはしあらゆる浮世のかなしさ、嬉しさを感ぜぬものになりたく思つた。父なき後は母をはげまして等心はそれからうれへと變つてとりとめる術すらわからなかつた
みだれたりとは云へ美しき母上のあの御ぐしも切りはなされる時の身にせまつた淋しさ、なげふごもつきぬ心を何度もく／＼ひきしめて星かげまばらの曉となつた
明くれば三日
憂に沈みし一家も冬ごもりより明けた高原の如く春の七草も咲きそろつた野良の如く、喜びの光りはたぶよつた。それは父上の病うすらぎ御景色の復した事である。死の影は春風をふくんで行く白帆の如く逃げ去り、蒼かりしは紅く、憂は笑にかはつて散らんとした梅はみきを離れ毛落んとした椿は希望にみちた色をそへ、よろこびの曲は我家をおほひ麗かな春風は門をなでた
すこかつた昨夜の月は謝し暖い惠の太陽は光をさしました。門をたゞいた昨夜のあらしは梅が香を送る春風とかはり、あやうくも黒く染められんとした日

記帳はまだ眞白い紅く染め様と紫色に染め様とも私の心一つである

我家は蘇つた、昔日にました幸福な日は今日までつづいた。両親のある子として幸におほはれながら私は今日の日までをすこした

嗚呼如月の二日、その日は思出の頁に花を咲かせてをります

忘れめや梅か香ふ如月に

父のやまひのいえし思出

休業中の日誌の中より

七月二十九日晴天

二甲 西原 キヌ

一昨日尾道を發せしに早今夜は夕涼みにと大阪の地を蹈んだ。まづ天王寺の夜の動物園に行つた。廣大な園内に數へきれぬ程の緑樹生ひ繁りて自から風をさうひをよくと袂を拂ふ風情、日中の苦熱も忘れていと涼しさを感じる。所々に設けられたるベンチも人待ち顔なり。大なるは象より小なるは鳥類にいたるまで數多く集められたる中でも獾といふ獸や鵜のどじょうを取る早業はなかく珍しかった。鵜のどじょう取りを思ふと長良川の鵜飼一そうの舟の鵜

が一二時間で千尾も取るといふのも道理であると考へらる。何時もいたづらなのは猿である。猿の子が親の腹に抱きついてゐるのを見ても親子の情の厚いことが感ぜられる。あちらこちら散歩してゐると何處からか樂器の音も聞える。又水邊にはをし鳥の泳ぐ様、さぎの樹木に宿つてゐる有様、眞に美しく又愛らしいものである。動物園を出で、白晝の如き新世界を散歩して歸つた

八月一日 水曜日 晴 一乙 梶山 里子

長いと思つて居た一月ももう過ぎてしまつて、八と言ふ字が柱曆みや日誌等の頭に附く様になつた眞に夢の様な感じがする。あゝ此の一月を私は如何にして暮さうか。出来るだけ勤め、出来る丈奮つて成る可く有爲に、此の新しい月を迎へようと思へば俄に重い荷物を負つた様な心地がし、何だか向ふの方に目に見えない奪い光がさして私をこちらへくと好い道にさし招いて呉れる様な氣がする。本箱に貼り附けて忘れない様にと、何時も注意して居る心得書に、じつと瞳を落せば、眼は次第に輝き胸は躍る。この希望に満ちた一月を考ふれば、六年の

間辛苦を共にし互に手を取り合つて學びの道にいそしんだその懐しいお友達とお目もじする事の出来る同窓會や、母様ともお慕ひ申して居るお慈しい先生仲の好い皆様と一日の間、彼の校舎の中で楽しく團樂する事の出来る十日の集りのこと、さては學課の事等思へば、心がわく／＼して、これから手を着けようかと思ふ程色んな事がある。今日も登山から歸りに『ほんどうにもう三十日しかありませんのね、三十日つて言ふと如何にも長い様だけれど、ほんとは短い物よ、私なんかその間に色んな事が出来るかしら』と或るお友達が言つて居られたが、私も出来るかしら『精神一到何事か成らざらん』あゝ出来な事はないのだ屹と出来る、と思へば大そう嬉しかった。久しく御無沙汰をして居る大阪の姉の許へ、お手紙を書いた。午後は大そう暑かつた。針持つ手には絶えず汗が出て針がきしみ、ともすれば布を通らなくなる。弟は海水浴にでも行つたのだらう、少とも聲がしない。次の間からぐう／＼といふいびきの聲がする。ほつと一呼吸して汗をふいて居ると、側でお金の勘定をして居た父が、突然『里子お前は何時か英和字典を買つて下さいと言つて居たね、ふ

ん／＼』と一人點頭いて居られた。私は心の中でどうか買つて下さればいゝがと思つて居た。晩になつて弟達と遊んで居ると、父は散歩姿で『里子行かう』『どこへ』『兒玉へ』と言はれた時の嬉しさ、一緒に行つて字典を買つて戴き轉げる様にして家にかへつた。そしていきなり祖母に『お祖母さんこれ、お父さんに買つて戴いたのよ』と言ふと『どれ／＼まあ／＼よいことね、この字は何といふこと、お祖母さんにはさつぱり分りはしないが』と言はれた私は又それが嬉しかつた。母も『よくお禮を言つてしつかり勉強なさいよ』と言はれた。父は唯ニコ／＼して笑つて居られた。私はおねだりしたのではなく、理想通りの求め方をしたのが何よりも嬉しい。今日は嬉しい事はかり

八月十七日

二甲 岡崎 和子

今日は下枝姉様の家の三徳丸の進水式に行つた先日行つた時とはまるで違つて大層混雑もしてゐる大勢の船乗りは始終出入りして居る暫くたつと人の出入がばつたり止つたするとばつばつ造船所へ行くお餅を拾ひに來た群衆は黒山つくつて待つてゐる丹靑を

盡した旗は勇ましく翻つてゐる上つた事のない梯子を恐る恐る上つて乗船したお婆様は「口をしつかり閉ぢてゐないと舌を噛むから」とおつしやつた私は小さく縮まつて大きな柱にかぢりついた頼て下の方でごろご雷の様な物凄いな音がしたかと思ふと船は海に滑り落ちた此の時皆んなは萬歳を三唱した、これから船は三度廻つた、大工や船員はお餅を懷の中に押込めて一散に投げ出す、女連中は力が弱いので皆海に沈む、陸では老も若きも入り乱れて拾ふ、中には脊に負ふてゐる赤兒の泣いてゐるのも忘れて争うてゐる。海では海底にもぐり入つて取つては浮上る、此の様にして進水式が終ると通ひ船で陸へ上り美登屋に歸つた。お晝御飯を頂戴して二時半の土生丸に乗つた、幸にして船は大きく、又造つたばかりであつたので、氣持がよかつた、小窓へ首を突き出して所々の夏景色を眺める、其の内船は尾道港に入り向榮舎の棧橋に横づけになつた、今まで涼しかつたのに、俄に氣候が變つた、急いで家へ歸りお父様やお母様弟に今日の愉快であつた事をお話したら大層お喜びになつた、弟は「姉様等は好いが」と羨やましがつた

八月二十三日

働いた一日

二甲 岡田カッヨ

夕焼の雲は次第に薄れ果て、羊のやうな白い雲が空をふわり／＼と漂ふて居る。一日中蒸し暑い田の中に屈んで草を取るのには苦しいけれども歸る途すがら田舎の静かなをとして又自然の景色を眺めるのは私にとつて、此の上もない慰めの一つである。毎日田に出て同じ仕事を繰り返して居ても其の景色は朝に晩に變化して幾度見ても少しも厭な感じは起らない私はいつも歸りには一生懸命で働いた今日の満足とあたりの景色とによつて、體にも心にも疲れを覺えないのである

遙かの沖合に浮いて居る島は、一つ一つ次第に暮れて、明らかで水の面が紫色になつて來た。今しがたまで釣りをして居た沖の小舟も亦ゆるゆると入海に入つてきた。私はその堤つたひに北の方に足を運ばせてゐる、よく見ると舟の中の人々は中々愉快さうに騒いでゐるから餘程多く取れたものだ云ふことが直ぐに想像が出来る。舟が近づくにつれてぞん／＼様子がハツキリと分る。キウ／＼と響く櫓の音の一つ毎に空の星は殖えて、水中にうつゝた舟の影

が、高い空の、黒い入道雲に乗つて走つて居るやうである。それを見ながら歩いて居るといつの間にか我が家に近い鐵道線路の所まで歸つて居た。家々には皆燈火が明るく光つて居る、けれど田舎はまだ釣べの音が聞え、夕餉の仕度の煙が屋根の廻りを取り巻いて居る、田舎は實に悠長であると私はいつも感じる。やうやくにして家に歸り風呂に入つて手足を休ませた。やがて楽しい夕食を濟ませて九時過ぎ寢床へ入つた

今日も暮れた、もうあと八日して九日目から學校に行かれるのだと、獨り天井を見ながら咳いた。俄にお隣から陽氣な笑ひ聲が聞えた

八月廿七日 月曜日 晴 二甲 和田 イサヨ

空は清く晴れ渡つて居る。今木蔭にある鳥小屋の前で暑いのも忘れて、三四人の小さい女の子が蟻を見ながらさんざんと話の花を咲かせて居る。私の妹も仲間に入つて居る、私はどんな話をするか知らんと聞耳を立てた。すると中で一番小さい花江さんが口唇を振はせながら、白い可愛らしい齒を出して『色の黒くて大きいのは獨逸の蟻』さうして『茶色の少

さいのは日本の蟻ぢやんで』と皆に聞かして居る。今迄聞いて居た三人は『さう』と半信半疑、呆れた様な、何とも云へぬ顔付き

『あれ／＼獨逸の蟻が日本の蟻を追つて行く、そら追ひつめた』『あゝ今度は日本の蟻の方が先に行つて居る、早く行け／＼』等四人の者は夢中になつてそれ／＼本當らしく辯舌つては追つて行く、一人の純江さんは『あら獨逸の蟻が日本の蟻の持つて居るものを取つた、あの蟻殺してやろう』今一匹殺さうと片足をばた／＼させて居たが、殺したものと見えて『憎たらしい此蟻』と一心に踏んで居る。私は熟々考へた『あんな小さい罪なき蟻迄も獨逸のだと云へば、あんなに憐な事をして居る』『防主憎けりや、袈裟迄憎い』とは此事だと一人うなづいた。やはり小供連中は騒いで居る、砂糖の少しも落ちて居るのか、多くの蟻が皆の足下を行來して居たが、今争が始つたらしい『是は獨逸の蟻ぢや』『是は日本の蟻ぢや』と。小さい花江さん一人が獨逸のだ、獨逸のだと我を張つて居る、他の三人は反對派、其の内に三人は一緒になつて『もう花江さんと遊ぶまい向ふへ行かう』と三人連を取つて向ふへと去つてし

まつた。可愛さらに花江さんは一人ボツチになつて皆の行つた方を恨めしうに睨んで居た、其の目には涙が一ぱい宿つて居たがやがて後を振り歸り、振り歸りしをくゝと家に歸つた、後では鶏の聲がはつきりと聞えて、淋しく葉櫻が風にゆれて居た

十二月二十五日晴

二甲 大淵 三 枝

學校がお休みになつたので兄様は昨日京都から歸られた。今日其の荷物を受け取る爲めに尾道驛迄行つた使の人が夕方あはたどしく飛んで歸つて『大變な事を致しました。私は荷物を失くしてしまひました』と言つて苦しうに荒い息吐かひして居る『少し心をおち付けて』と兄様が言はれた。使の人のどぎれぐゝに語つた事はかうであつた

驛で荷物を受け取つて車に積み込み、少しばかりの用事の爲めに荒神堂に行き車を置いた儘或人の處でお話しをして居た其の留守の間に取られた。そこで大急ぎで、其の事を警察へ訴へ今迄探したけれどもどうしても手懸りが無い、と言ふのである。彼は面目なげに幾度もノゝ頭を下げて居る。荷物の中には兄様に取つて大切な書物やノゝ下が澤山入つて居た

と聞いて、私は兄様に心から同情した。又自分の少しの不注意から他人の大切な物を失つて、大層心配して居る使の人に對しても、大變お氣の毒である。盗んだ人は、何と思つて取つたのであらう、中には貴重な衣類や、お金が一ぱいあるだらうと思つて取つたとすればそれは大いな間違ひである。兄様は學生であるから、ろんな物は少しもない。其の人は書物が目的であつたらうか。否、又貴重な衣類やお金を目的としたのであらうか。若しさうだとすれば、彼の目的は果さなかつた。みだりに美しい衣服やお金の欲しい人に眞に貴いとして高尚な書物が何の爲めになるであらう。之を考へて見るのに不正な事をし得ようとした物は、何事でも決して果す事は出来ない、却つて其の罪に對する悪い報酬を得るものである。私共が人と交るにも其通り、善くない心を以て交れば、又それだけ悪いを報いを受けねばならない其の反對にどこまでも美しい、優しい心で交れば私共は何時までも幸福で居られるのである。此心掛けは實に忘れてならない大切な事である

美しい衣服や、お金を得ようとして却つて思掛けない書物を得たとは、きつと神様や佛様が『此の書物

を讀んで、汝の其の不潔な心を洗ひ流し、正しく美しく、優しい心を持つた眞人間になれよ』と彼の心に御示しになつた教訓ではあるまいか

十二月二十九日

三乙 田 中 利 惠

ガタ／＼と雨戸をうつ風の音、時々襖のすきまからフウ／＼とくる風に、母様は首をちぢめながら、うすぐらい電燈の下で、セツセと針をお運びになる。何やら思ひうかひ給ふたのか、手をやすめて天井の一隅を見つめなされて、小さなト息を一つ吐き、私の顔をシゲ／＼と御覽になつて『お前も、もう後一年で卒業するからうれしう、それまでには父様もお歸りになるだろうから——私はお前等二人を無事に父様の手に渡しさへすればいつ死んだつてかまやしない。人様からあそこの子供は母の手一つでぞだつたのだから、役にたかないと云はれない様にして呉れ』と云はれて涙ぐまれた

あゝ十四年前父は親子三人を故里にのこして、はるばる外つ國へ行かれた。其淋しい留守中、母のかよわき手一つで、これまでに教育していただいたのである。思へば小學を卒業して櫻咲く春に女學校の門

をくくつてから家では、やさしき母、學校では御慈愛深い諸先生方の御手にはぐまされて三年の長き年月を何不足無く暮し來て、今はもう、後一年でこのなつかしく、思出多き學校と別れて、荒れにあれ、狂ひに狂ふ世の大海原へ小さき、舟に棹して進み行かなければならないのかと思へば、思はず兩の頬へ涙がつたはつた

あゝ此残れる一年長くてあれよ

外は一しきり風がないで、サク／＼と雪が降りだした様、なんとなくしんみりとした夜である

十二月三十日 日曜日 天氣快晴

反 省 一乙 矢野シツコ

ふと目が覺めた。枕元の時計を見ると四時十分。母様も田鶴さんも隆ちやんもよく眠つて居られる。ムツクリと起きて敷布團の上にキサンと座つた。私はこれから過ぎ行く大正六年の事を反省しやうとするのである

第一、嬉しかつた事及心配であつた事を反省して見た。數々あるが今覺えて居る中で一番私が嬉しく心配であつた事は忘るゝ事の出來ない四月八日の事で

ある。此の日は此の女學校の入學試験に及第した者落第した者とがチャンと解る日であつた。私は此の日朝から心配で心配でろくろく御飯も戴かず唯々午後一時の來るのを待つて居た『チント』と一時を打つとすぐ祖父様の手を引はつて學校へ行つた。そして早速掲げてある合格者の氏名を一々探して二十三番目に「矢野静子」としてあるのを見出した時の私の喜びは何にたとへてよいやら、尤で天國へでも登つて行くやうな氣で飛び立つて喜んだ。

第二番目にどんな悪い事をしたかと反省して見た。此れも考へれば考へる程ドシ／＼と頭に浮いて來るけれども、ろの中で一番私の心にひどく響いたのは母親無しの田鶴さんを傷つけた事である。つい近頃の事で、或日私は裁縫をして居た。そこへ田鶴さんが來て色々邪魔をするので私は腹が立つて、丁度ろの時鐘を持つて居たので「そんなに邪魔をするのを當てますヨ」と嚇した。田鶴さんは怒つて「當てなさい／＼」と泣き出した。私は相手にならず黙つて居ると「當てなきや聞かないから手當てなさい／＼」と頻りに言つた。私は面倒だつたから一寸でも當てれば泣くのを止めやうかと思つて一寸手に鍔

を當てた。すると「あついで／＼」と泣き出した。驚いて見ると人さし指を大分ひどく焼ごして居る。此の時私は「悪い事をした。初めから「此鍔を當てますヨ」など嚇しを言はなければよかつたのに、あの一言であんなに焼ごまでさせたのだ。まだ私の堪忍が足りなかつたのだ。可愛さうな事をした」と後悔したのである。

この他腹を立つた事泣いた事善い事をした事等色々反省して一番後で反省したのが○○さんの事である。二學期の初に高橋先生から「矢野さんは○○さんを引いて上げて下さい」と命令された。その時私はあゝ、こまつたことだと思つて皆に何だか恥かしいやうな氣がした。と同時に又嬉しくもあつた。ろうしてこれからは自分の責任は重いと云ふ事が頭に浮いた。そしてこんな命令された以上はどうしても○○さんを善い人にして上げやう。自分の方ある限りは○○さんの爲に盡さうと思つたのである。それで自分の決心した通りを盡したけれどもどうも二學期末には好成绩を得られなかつた。私はガツカリしたのである。そうして之も私の盡力が足りなかつたのだと思つた。それで今日のこの反省の時に當つて私は神

様に「どうぞこの三學期に先生から再び〇〇さんと命令されたならあなたの御力をお借し下さつてどうも善い人にして上げるやうにして下さい」と祈つたふと頭を上げて枕元の時計を見るともう五時五分。母様も今日はお疲れになつたものと見えてよく眠つて居られる。私はヨツソリと立ち上つて火をおこしにかゝつた。

午後二時頃私はガラス越しにお庭を見て居ると向ふからバタ／＼と田鶴さんが走つて來た。そして「年のはじめは黒でもつー尾ー張名古屋は白でもつー松竹ひつくりかへして大ーさーわぎーあーすの祝はどーしようーかー」と高慢らしく歌つて「お姉さん面白い歌でせう」と言つた。私は「ほんとに面白い歌ネ何處で習つて來たの」と尋ねた。田鶴さんはチョット頭を右に傾けて飄りに考へて居たがふと思ひ出した様に「あのネ、聞いた所で聞いて覺えたの」と言つた。私はおかしくて／＼吹き出しさうであつたけれども我慢して居ると「お姉さんこの歌の意味を聞かして上げませうか」と言つた。エ、どうぞ」と言ふと、わけもわからぬ面白い事を説明するのでどう／＼こらへ切れなくなつて吹き出して仕舞つた。

田鶴さんは「まあお姉さんの顔と言つて又笑ひ出したので二人は互に顔を見て笑ひ、顔を見ては笑ひしてどう／＼終には涙まで目にためて笑つた。やがて段々と日も暮れて來た。

九時が打つた。「もうおやすみなさい」と母の聲がした。私は「ハイ」と答へて一日中身に附けて居たボツ／＼と暖かな着物をあらん限りの勇氣をしぼり出して冷い冷い寝衣と着かへた。

ろして急いでねまの中へもぐりこんだが、こたつが無いので又ヒヤリとした。けれども、我慢して居ると次第々に暖かくなり出した。と共に氣持もよくなつた。そしてフト思つた事がある。それは今晚の中に大正六年の幸福に暮された事を神様にお禮を言ひ、尙大正七年も去年の通り幸福に暮す事の出来るやうにと神様にお祈りしてそして明後日のお正月を迎へようと言ふ事である。私は靜かに目を閉ぢた。ろして両手を胸の上に組んで置いた。そうして前のやうに神様へお祈りをささげ、もう一度氣になつたので〇〇さんの事をお祈りして、パツと目を開いた。私は九で大舟に乗つたやうな氣がした。それで今晚も夢路に入つたのである。

十二月卅一日 年 の 暮 二甲 松 本 榮

今夜は何處からも餅搗の音は聞えない。宵月は薄く町を照らしてゐる。兩側に竝ぶ家々からは皆燈火が障子にうつゝて楽しさうな話聲のもれる家もある私の内に色々のかたづけをした時はもう十一時であつたが外にはまだ提燈をつけて掛取りに歩いてゐるものもある。嗚呼之が今年の最後の活動である。靜かな風は軒に飾る注連繩を騒してゐる「お休みなさいませ」母に挨拶してから暖い床にはいつた「カチツ」スイツチは姉様によつてねぢられた。あたりは闇、私は色々過去の事が思はれた。大正六年はどんなにして暮したであらう。元日の朝一學期の末或は夏休み中こんな度からはしつかりやらう、力んでやりませう、と思つたがだめ、來る學期も來る學期も不勉強に不成績に終つてしまつた「まあどうしても少し有益に暮さなかつたでせう」あくつまらない、くもくも此度からはうか／＼してゐられやしない。十六になるんだもの、又母様に「もう大きくなつたんだからこの位のことばしてもいゝでせう」と言はれるにはちがひない。思へばいつそ何も知らない子供でいた、どうして自分も人もこのまゝ年をどらむに居ら

れないのでせうか。こんなことを次から次へと考へた、けれども皆出來もしないこと許り、こんな事を思ふよりか今まで不勉強であつた自分を捨てしまつて三學期からは心をかへてしつかり勉強し唯一人の母をなぐさめよう。私の頭にはこのことがつよく／＼びゞいた。あたりはしんとして大へん靜かである。もう三四十分の間で十五の年も去るのであらうあくなつかしい、なつかしい。様々の事を考へてゐる内にこれらはしらす／＼私からばんやりと段々はなれて行つた。私は眠りについたのである

十二月三十一日 歲暮の鐘 二甲 木曾 靜子

今日は大晦日である何處の家もいろがしさうに働いてゐる外では早や門松を立てゑる家もある庭を洗つてゐる家もある七五三をはつてゐる家もある『山草へ／＼』と聲を高らかに山草を賣つてゐる婆やもある又買物帳を手にとつてあちらこちらと走り廻る下女下男もある誠に歲の暮といふものはいそがしいものである今年も早や幾時間か後には何處かへ去つてしまふのである今宵こそは十二時を聞いて寢床へ付うと少しおそくまで起きて机にすがつて時計の

針のチツ／＼と音を立てて廻るのをながめてゐた早や時は十一時となつた夜は段々静まつて物音一つも耳に這入らぬ如何にも歳暮らしい心にさびしさがかんだしばらくすると遠い／＼彼方にて「うば／＼」とそば賣りの聲がかすかに耳ぞこにひびいたあともう今年も四十分餘りでなくなるのだと思ふと今年中の事がありありと頭中にうかんだあゝ自分は今年中にどんなことをしたであらうか學業に勉勵したであらうか骨身をします一心不乱に働いたであらうか此の長き長三百六十五日を如何にして暮したであらうか自分に取つては唯々遊んで過した様な氣がしたあゝ此の残りすくなき今年をも少し引きのばしたいやうな氣がした今更如何にしたとても月日は後へはかへらぬ自分は大切な月日をむたにつひやした大へん残念な事をした等思ふ内早くも千光寺の鐘はゴーン／＼と十二時を知らせ出した高き山より出でて雲の彼方に消へ行く此の鐘の音は如何にしても打さぬ様には出来なかつたなほ／＼續いてゴーン／＼と夜の静けさをなほ一ろうました此の歳暮の鐘は自分にとつては「今後は勉勵せよ今後は勉勵せよ」と幾度も幾度もささとしてくれるやうな心ちがした此

の鐘の音が長く長く自分の頭に残つゐるやうにと神に願つて床に就いた

大正七年一月一日晴天 一甲 片山不二子

ふと目を覺ますと、四方はもう随分明るなつて居ります、私は大急ぎで飛び起きました

「一日の計は朝にあり、一年の計は元旦にあり」とか今日こゝろ一年中で最も大切な元日であります。噫大正七年、大正七年、最近年も幾時間か減せられて居ります。何故月日はこんなに早く、私達が安かに夢路を辿る間も待たずに逝き去つて終ふので御座いませう

お座敷ではもう裕子さんの快活な唱歌の聲が聞えます。雀は庭の木に留つて千代万代に幸あれかしとさへすつて居ります。私は急いで身仕度をして、はるか、東京の方に向つて、宮中に在します陛下を伏拜しました。お日様はこぼれさうな笑を地上にもたらしていらつしやいます。それから常に私の心に慰安を與えて下さる神様に「今年も相變りませず、か弱き我身を助け導き給へ」とお祈りを致しましたやがて案内の言葉に應じて、私は一應衣服を正して

お座敷へ参りました。室の真中に置かれた長火鉢には、見るからに暖かさうなお火が山の様に、いこされて、紅い炎をペーロリ／＼と立てて居ります

お正月と云ふと何となく改まつて、清い／＼心持で叔父様や叔母様に新年の御挨拶を致しました。裕子さんには簡単にと思つて

「裕子さんお目出たう」

と申しますと、後からゆつくりと「昨年中はどうも……今年も」なんて片言交りに申しますので思はず吹き出して終ひました。もう笑ひ初めもすみました嬉しいお祝もすんで、學校へと年賀狀をしたよめました

第一禮者の御祖母様お姉様等皆得も云はれぬ喜を口元に浮べて、御年始のお言葉を交してお居でになります

私は書齋のテーブルにもたれて、走り逝く雲の行衛を眺め乍ら、此大正七年を如何にして暮さうかと色々な空想に耽りました。私はもう今日から十六と呼べなければならぬので御座います。噫十六十六ジャンダークがあつばれの功名を立て、御國の爲に身を亡したのも、大石主税が、主君の仇を報じて

切腹したのも皆此十六の年で御座います

又此世界大戦亂の爲に英國等では、少年十六歳に達すれば皆戦に出征し御國の爲には身命をも省みずあつばれ働いて居ります。斯の如く、壯烈なる歴史ある此十六の年を如何にして暮したならば誠の意義ある、印象の深い一年間を送る事が出来ませうか

人生行路平坦ならせ

風浪逆巻き風亦荒し。

百折たわまぬ決心あれば

光明常に彼岸にひらめく。

正義の道を踏行く我が身

恐る可きもの又世に非せ。

困苦は我を奈何にともせず

艱難汝を玉にすと知れ。

九仞の山を築かんとする人

功を一簣に虧くこと勿れ。

人を羨みねたむは愚

彼も人なり我も人なり。

一念こつては何成らざらん

成らぬは人の成さざる故ぞ。

運拙しとかこつを休めよ

自ら助けて人又助く。唯人力の及ばん限り

盡し〜てたふれてやまん。

噫これだ〜此進取の歌を私思はず口すさんだ

一月七日

木村八重子

今店の時計が五時を報じた、日は西山に顔を寫つさうとして居るお向の陳列箱の魔法瓶の口は日光に照らされてキラ〜と反射して金剛石の様にあたりに光りを撒いて居るバチツと丸火鉢の炭が散つたグジュと立てられた火が崩れた自分は暑くなつた火箸で元の通りに直して外を見た時は日影はもう見る事は出来なかつた。ビューと西風が強く少さなれんを吹きまくつたと思ふ間もなくバラ〜と小雪が散り出して黒いこの上に白梅の花瓣をこぼしてはバツと消えた、續いて後から〜とこの黒布の面に舞ひ舞ひ來る六つの花は愛らしくも春野を飛び交ふ胡蝶とも見紛ふ程に

普通作文の中より

佛通寺に修學旅行の記 一甲 市川ヲユキ

明日はあの懐しい佛通寺へ旅行するのだ、小學校の時に二三度旅行したことのある、あの懐しい佛通寺へ旅行するのだ。色々仕度をして居ると、三木先生が「早くお寝みなさいよ、朝早いですからね」と廻つて來られた。今朝は四年のお方の京阪地方へ旅行なさるのを門までお見送りしたが、いよ〜明朝は私等の旅行する時が來たのだ。お辨當も丁度上級のお方が拵へてきて下さつたので、風呂敷へ包んで鼠に食べられないように枕元へ置いて「明日は日和でありますように」と、神様にお祈りして眠りについた。リンリン〜楽しい夢を破つて、起きよの鐘が耳に響いた。ねむたくて〜仕方がなかつたが、旅行だと思ふと、ふいに目が覺めて、嬉しさに胸がどき〜とするのであつた。窓を開いて天を仰げば空はあつらへむきの上天氣で、寒い風が吹いて腹の底まで泌みわたる。面を念入に洗つて仕度をすましお辨當を大切に持つて停車場に行つた。時間もせまつて整列して人員調査の後、プラツトホームへ入つた。やがてゴウ〜と大きな響をたてゝ入つて來た瀛車に、どびのつてその一隅に坐をしめた。ピリ〜と瀛笛の音、空にひびき渡りて、瀛車は又もやゴ

ウ／＼と大きな響をたて、本郷方面に向つた、三原までの間の松等のよい枝ぶり、長閑な海に帆船の通うよい景色もだん／＼とすぎ去つて遂に本郷驛についた。こゝで下車して佛通寺にと向つた。或は歌を歌ひ、或は話をして、田舎の石ころ道も夢のようにかはる景色を眺めながら佛通寺に近づいた。近づくにつれて、遠い道の而かも田舎の石ころ道を歩いた事故、少しは弱る人もあつたが、天際から覗きかゝつた奇妙に高い断崖絶壁、さては静かな川の流れ實に繪にもまさるばかりの景色に慰められつゝ、目的地の佛通寺についた時には、皆々歡呼の聲を打ちあげた。深山を負うて大きな寺院があちこちにある私共は佛殿方丈に休息した。そして携へてきたお辨當を戴いて、お美味しいお茶を御馳走になり、又整列して開山堂の登り口から山へ登つて行つた、羅漢山の羅漢さんを見ては今更に、ろの多いのに感心し愚中和尙の住はれた舎輝院を見、又約五百年以前の納骨堂の建物を見た時には、まぎ／＼とこの佛通寺の歴史がうかんできました

あゝ世は戰國時代の頃群雄各地に割據して天下麻の如くに亂れたその時にその麻の一葉はこゝへも飛ん

できて立派の城を築きあげました。これが即ち土肥某で、後に小早川家より養子を迎へました、これが小早川隆星で、近鄰を征服し、こゝにも立派なる寺をたてました。爾後愚中和尙こゝを治めました。その後幾多の變遷ありて、世は天災地變の數ありましたが、こゝは幸にも、それらの害もうけず、無事に今日に及びました

と、昔を考へ今を思ひて感慨無量でありました。ふと氣がつくと先頭は既に彼方に向はれん有様、驚いて列を正し、諸々方々の深山幽谷なる景色を眺めて歎賞の聲を放ちながら、可愛い欄干のある巨蟒橋を通つて、又佛殿にかへつた。あの美しい三級の瀧を眺めることの出来なかつたのは遺憾であつた。寺へ歸つてから、種々の寶物を拜觀し、暫く遊びて、懐しきこゝを出發した。あゝ懐しき佛通寺よ、さらば山紫水明なる景色よ、さらば／＼と名残を惜しみつゝ、元來た道へと歸りました。歸りは來た時よりも足も軽く、眞良小學校に一時間餘休息し愉快に面白く遊び且話して、あく所を知らず、こゝにても又名残を惜しみこの小學校の健かに幸多からんことを祈りて楽しく本郷驛にかへりました。すでに薄暗くな

りて人の面も定かならず、驛内の腰掛に腰を下し、こゝにても又一しきり話に花を咲かせ眞暗の中に唯一つ目を光らしてきた怪物の如き流車にのりこみ、遂に再び車中の人となりました

あゝ今日一日の樂しかつた事、愉快であつた事、佛通寺よありがたう。今日一日を無事に清遊させてくれた佛通寺よ、さらば

雪 ふる日 二乙 桑原好子

私はつと立つて前にある障子を細目にあけて外を覗いた。圓い電氣燈に淡雪がサラ／＼としふる。と、小刻みな足音がして誰かうちの門に這入つた様だ。紺と柿と萌黄で三升を出した細柄の蛇の目傘をくる／＼と宙に輪を描いて、トンとすぼめて格子にそつと手をかけた人は、やつぱり今思つてゐた英子さんであつた。メリンスの前掛の雪輪つなぎが白くさびしく浮き出でゐる。顔見合せてニッコリ、恥かしさうな片ゑくびが可愛い。二人は火鉢の上におしかぶさつて、近く来る春のうれしさをしみ／＼と語る、ガラス戸を透して、吉野紙を揉んで散らす様に雲の降るのがうつすら見える

母校を尋ねて 二甲 葛西壽香

懐しい母校の校長先生を訪問すべく二三のお友達をお誘ひして午前八時といふに家を出た。夏とはいへ朝の空氣は又格別心ものんびりと春のやう、久しく通らなかつた長江の通りは過ぎし六ヶ年の長い年月を恰も一日の如く朝に夕に學校と我家を往復した懐しの道である。行々お友達と昔の樂しかりしことあるは悲しかりしこと等語らひつゝ、早や母校の下迄來た。九分通りは出來上つた美しい學校を見上る拍子にふと去年の暮の聞くと恐ろしい物凄しい光景が目のあたりちらづくと覺えて思はずぞつとした。そうだ去年の十一月廿三日の祭日、生徒は皆宅に居た晝過ぎだつた。私はお姉様と二階でお裁縫に餘念もなかつた時俄に外が騒々しくなつて續いて『火事だ火事だ』と叫ぶ人の聲私等はおど／＼しながら階下に入りて人々の話しによれば第三の小學校だと云ふ。私は始めはまさかと思つたが心中中々穩かでない。併しそれが本當だと知つた私は心もしどろもどろあちらにうろ／＼此方にびんやり青くなつてふるふる振へてゐる。もう外に何も考へる餘地なく恐ろしさと悲しさが一時にもつれ合つてどうすることも出來

なかつた。あゝ私の愛する思出多い母校は煙々を燃え上る火の手に包まれてそれは／＼悲惨な最後を遂げたのでした。太陽は早や高く／＼昇つて過去の追憶に堪えぬ私等の横顔を哀れげに照してゐる。さうして無意識に一歩々々長い／＼石段を上り盡して案内を乞ふ事もなくやがて二階の應接室に通された。見下ろす窓からは市中が一目三方を圍つてゐる山は青葉に茂り其中にしほれた蘆葺の一軒家其のよい眺めをあかす見とれてゐた。折しも後の方の人の氣はいに驚いて振向けば平素に變らぬお優しい校長先生はあはて／＼お辞儀する私等に、軽く受けられる。その間先生は堪へず莞爾として成績表を持つたまゝ私達の顔を見比べられる時の心苦しき『今度の成績は一般に悪いといふではないが、尙一層勵んで貰ひたい』と仰つしやつた時ははつと息をついた。併しお言葉はごこ迄もお優しいが私の胸には一々五寸釘、全身冷汗がびつしより同時に今度こそはの念がむら／＼と湧き出た。其の他本校の様子も交る／＼お話してお暇しやうとしてゐる處へお世話になつた諸先生がお出でになつて引止められるまゝに又面白いお話等に花を咲せ一座の者皆笑い興じ互の心は春の野

邊を遊ぶが如く浮々として陽氣立つた、ふと誰かど『ほんとに元の母校は思へば短い一生でしたわね』と仰つしやると前の陽氣さは何處へやら一座は落葉散しく秋の如く淋しくなつて何だか泣きたい氣がした然し邊の生新しい木の香の半ばうせやらぬを嗅げば其の事は忘れて喜び合ふ。話して居れば限りがない故漸くお暇して後振り返り／＼後髪引かれる思ひして日はもう私等の頭上にあつて遠慮なく夏の暑さを發揮してゐる。と千光寺の鐘が續けざまにびーん、おやもう十二時か

昨日 今日 三甲 稻田 トミ

昨日は野邊に今日は山にと人々は毎日浮かれ／＼と遊んで居る。それもその筈。此の長閑な春の日を家にすつこんで居るのはばか／＼しい様な氣がする、兄は私と三人の子供を連れて日曜の一日を朝福山方面に遊んだ。幸ひうら／＼と油の様な太陽がかどやいて好天氣であつた。十時少し前の汽船で行くのだと昨晩は云つて居たが今日は十時の汽船で行くのだをうだ。兄は大層汽船が好きであつた。それにひきかへて祖母さんは昔氣質に汽船へ乗ると云へば『歸

るまでけがはないかと心配ばかりせねばならぬ」と云つて居られた『行つてかへります』と挨拶をして尾道ホテルの所の棧橋に行つた。所が十時の汽船がおくれたので今は何時に着くとも判らない。これには困つた。それでは流車にしようかとも私等は思つたが流船の好きな兄は『まう少し待つて見やう』と云つた。我々もその氣になつて待つ事にした。十一時に尾道に流船がついた。一同これに乗つた。此の前の日曜が雨降であつたので今日は中々人が多い。銀行員等の團体が二組位もあつた。沖賣の爺さん婆さんが長い柄の附いた籠で果物や卵等を入れては乗つて居る人の方に渡す。こんな風にして渡すところではそれを受け取つてお金を入れる。この籠が商賣の媒をして居るのである。私等の乗つた流船はやがて尾道を出發したので東西に別れた。この老夫婦は商品が大分賣れたので嬉々たる顔に笑を浮べて『エッセン』と櫓をこぎながら嬉しさうに流船の方を見て居る。あはれこの老夫婦。彼等の心は清水の様に清いであらう。彼は神様の住んで居られる様な所に歸るのであらう。私は深い因縁がある様に思はれた。私は彼等が見えなくなるまで見つめて居た。汽

船の一人が今買つた物をムシヤ／＼食べながら『さよなら』と大聲で云ふと彼の老夫婦も笑いながら又『さよなら』と答へる。皆は大笑した。汽船は波をきつて進むので真白い泡をたてる。妹は『姉さんあれは誰が洗濯してゐるの』等と尋ねた。風が吹いて袂がふくらんで襦袢の袖がはみ出る。髪は乱れる、汽船はやがて美しい島々の間を通つて段々尾道を遠ざかつて行く。山には澤山躑躅が咲いて美しい。朝に着いた時はもうお晝時分であつた。御飯を食べやうと思つたが汽船の食堂へはもう入れない。いや入れない事はないが御飯の支度が出来ないのである。仕方がないから小舟を一艘借りきつて、仙醉島へ行く事にした。海岸を少し離れた所に水雷艇が二隻居た。おそくなりついでに見に行く事にした。中に入ると足の裏が黒くなるので甥を船頭さんが抱いて海に足をつけた。それを海に落すのだと思つて甥は何ぞか不平を云つて居た。島に着いて御飯の支度をさせたが。中々出来ない。皆腹がペコ／＼になつて居る。一時間も過ぎてやうやく出来た。食べたのが二時半頃であつた。あまりおいしくはないがお腹がすいて居るので大分かへて食べた。甥は此所でも不足

を云つた。「私のお刺身は皆のとは悪くて臭い。」と前に足を海につけられた事などくり返し、云つて居た。美しい景色を油繪に書きたい様である。それから前の借船に乗つて輒に歸り停車場に行つた。ちようど汽車がこれから出る時なので好都合である。それに乗らうと思ふと人が多いのもう乗られない。仕方がないので水族館に入つた。なまくらな鰯は足を揃へて一尺位行つてはグニヤ／＼足をまいて居る意地悪の蟹は大きな爪で鰯の足をつめた。中にも奇麗なのは黒鯛の列をしておよぐのであつた。八貫からあるといふ大鰯は死んで干されてあつた。水族館を出て汽車に乗る。我々の乗つた汽車は四方に幕の様なものがあつた。馬車に乗つた様であつた。福山に着いた時はもう暮れかゝ居た。博覽會は見る事が出来なかつた。宿のお湯に入つてつかれをやすめ夕飯をすまして尾道へ十時に着く汽車で歸つた。窓から千光寺のイルミネーションを見た時は大層美しかつた赤堂は下の木でかくれたり又木と木の間から見えたりして恰も消えたり燈つたりする様で一層面白かつた。汽車にも汽船にもよはなかつたので大變よかつた。

尾道の四季 三乙 藤井喜代子

「備後といへば尾道、尾道といへば備後」と音に聞えた我が尾道市は、世界海上の一大公園なる瀬戸内海の沿岸に、あるのである。内海の静かな氣候をうけ、東に高く瑠璃山、南に突き出でて愛宕山、西に近く大寶山。この三山が、防地ヶ谷、長江の町を挟んで、北の方中國山脈に連なる。南は内海の小波、三四町海を隔てゝ縁の山多き、向島がある。かく四方山に團まれて、川の様な海と、山の尾道の様な町とは、氣候温和、商業繁榮なる小都市を、なしてゐるのである。川の流に、小蒸氣船浮び、柳の土手に若草の萌え出る様な、美しい川はなくても、南を望んだ景色は、内海の景をエキスにしたものである。春の美しさ、賑しさを見んには、大寶山千光寺に限る。色濃い松の綠葉の中に、霞と蒸せる櫻花、を遠く大寶山の半腹の望んだ時、町の人々の心は、一時に浮き立つてくるのである。そして、めいめいに、重箱をたづさへ、瓢を提げて、のどかなる春の歌を歌ひつゝ、千光寺さして上る。寺の少し下の櫻の林爛漫として、春を誇る。運動場のベンチに、腰を下して、はるか南を見渡せば、向島を隔てゝ、彼方に

遠く四國の連山が、或は淡紫に、或は淡青に、或は淡黒に、ぼんやりと霞んでゐる。更に上れば、寺がある。千光寺だ。その本堂の横に大きな岩がある。この岩が、即ちこの海濱一帯を、玉の浦と呼ぶ源をなしてゐる玉の岩である。石碑に、岩の上に玉があつて、夜々光を放つたと云ふ事である。

ねば玉の夜はあけぬらし玉の浦に

あさりする田鶴鳴き渡るなり

萬葉集にある歌だ。玉の浦は、萬葉集時代から、有名かと、流石に嬉しい、太陽は西に傾いて、残んの光赤々と、赤堂の朱塗の柱を照す時には、下の町にも、はるか向島の人家にも、紫の煙が横たはる。ぼんやりと霞んだ臘月が、梅の花にかゝる頃には多くの人々が、夜櫻見物に上つてくる。晝を欺く様な電燈の光、人々のごよめき、笑ふ聲、歌ふ聲、三味の音、大鼓の音、實に一年歡樂を集めた遊びである。

美しいものは脆い。脆いものは又美しい。春の魂とも云ふべき櫻花も、漸く散り果て、葉櫻の蔭に、ナルの單衣のちらつき初め、四方の山は、緑の衣と衣更へをすると、町にも夏の氣分が漂ふ。降り續く

五月雨に、乾く間もなく、狭い町に、蛇の目傘所狭き迄に見え、外に出るのを大儀と、家に籠り勝ちであつたのに、霽れると一時に凌ぎ難い暑さになる。そよどの風も吹かず、蟬の聲のみ、かまびすしい。夏の眞晝の暑さよ。白い着物に、バラッル傾けて、一歩足を郊外に出せば、毎日の好天氣に、塩田には多くの濱子が、暑さをおかして田に塩水を撒いてゐる、其後から後から、陽炎が舞ひ上つてゐる。鹽焼く煙突からは盛に煙が立ち上つてゐる。瀬戸内海の夏の塩田は、盛んなものだ。夏の夜は美しい。晝間の汗を流して、白い浴衣を着流し、團扇片手に水のほとりをさまよふ時、小暗い中に、三つ四つ五つ、あれ／＼螢が飛ぶ。更に足を轉じて、海邊に行けば「灯美しき港の町よ。」と、他郷人に賞賛されし港の灯は長く短く、小波にゆれて、他國の港に、淋しう止まる和船の屋根には、寝ころんだ船頭の、静かな舟歌が聞える。機橋の方には、多くの涼み人が居て中には、釣糸をたれたのん氣さうな者もゐる。濱町には、水店が軒を並べて、盛んに客を呼んでゐる。向ふの島は、海水浴で賑しい。

冷風立ち初め、山の麓が、段々と紅に染まると、秋

になる。朝露を踏み分けて、山に入れば、女郎花、桔梗、撫子等、千草が生ひ茂つてゐる。此間まで、青田であつた稻の田は、今は黄金の波を立たせてゐる。町は段々と淋しくなつて行く。月の澄み渡つた夜、静かな虫の音を聞きながら、思ひにふけるのも面白い。後の大寶山には、目も覺める様な紅葉がある。

それも落ちてしまふと、冬だ。いやなく冬だ。寒い木枯の風が吹き荒んで、紅の木の葉がキリ／＼と舞つて落ちる。うれに時雨が、サツ／＼と襲ふてくる。朝起きて見れば、地一面に霜がおいで、萬づの物皆凍り、膚を裂く様な風が、ヒユヒユと吹いてゐる。町は益々淋しくなる。寒い日には、炬燵に入り、四方山の話に花を咲かせる。静かな夜だ、と思つてゐると、翌くる日は、一面の銀世帯となつてゐる。併し滅多に、雪は降らない、暮に近くなる。何處の家にも、餅搗きが初まる。二三日中は、ぼた／＼とどきねの音が、所々から聞える。暮の市になると、又町が賑やかになる。村の人、島の人、町の人達で、目貫きの濱町邊は、大變賑やかだ。ううして市がすむと、もうお正月を迎へる支度は整うたの

である。

以下の二文は講義を如何に咀嚼し如何にまとめ得るかを試みたるものの中より撰ぶびしものなり

狂言に就て 四甲 吉井千代子

晩春の浅みどり煙るシーズンに『狂言に就て』といふ題に接する事を非常に喜ばしく思ふ。

でも能く其の調和が取れてゐると思ふから。

狂言とは狂言綺語と云つて『たわれ言』『根なしご

と』など解せられて居る様であるが、此處に述べ

て見ようとすると狂言は、いつもアドとシテこの對話

で、足りない智恵に威張散らす、シテが終に失敗に

歸す。其所に狂言の滑稽味は存在して居るのである。

そも狂言の起りといはゞ、總ての音楽の根本である

所の神樂であらう。天宇受賣命が手に茅卷を持つて

巧に舞曲を奏せられた當時の物語は古事記に歴々と

見えて居るが私は寧ろ傳説として味ひたい、それか

ら火闌命の火々出見命に對する故事や宇治拾遺物語

の一段やが、思ひなしかや我古代の國民性の一節を

語つて居るやうである。而して其の稍々進歩した笑

劇に、支那の文化を盛んに輸入した時代から彼地の

雜劇といふものが加はつて茲に猿樂といふものが生じて來た。可笑しい物眞似を『さるがう』といふのも基をこゝに發したものであらうか

此頃又別に農夫が日々の勞を醫する唯一の樂みとしたものに田樂といふものがあつた。之は後に田樂法師といつて之を主業として、地方を巡回する者も生じて來た。芋の田樂は下女の好む處で魚田といへば魚の田樂、田樂さしといへば物の眞唯中から串を突通した形をいふ。法師の好みが、味噌をつけるといふ失敗の謎か、此の邊の消息は解しない

扱この田樂の舞と猿樂の曲とが相プラスして出來たものゝ幽玄味を持つたのが能樂となり謡曲となり淨瑠璃となつたが、一方猿樂本來の滑稽的趣味は狂言となつたのである。而して之が既に鎌倉時代に其の形を成して足利時代に最も隆盛を極めたといふ事である

俗間でよく歌つて居る三味線の曲に『翁渡しの三番叟』と云ふのがある『どうくたらし、どうたらし』とか何とか云つて舞祝言をする。この内に可笑味のあるのが狂言で、今日の様に獨立するに至つたのは幾多の變遷を經たものだといふ事である

狂言の詞章を作つたのは南北朝の頃玄惠法師といふ人で五十九番もあるといふが、私の知つたのは『素襖落し』『二人袴』『三人かたは』『入間川』『うつば猿』『釣狐』などである。其の後種々の作者が輩出して近代は凡そ三百番を以て數へるさうだ。『姥酒』『棒しばり』『二人大名』『花争ひ』こんなのは見た事もあり聞いた事もあるが多くは知らない

狂言を演ずる物を狂言師といつて大倉、和泉、鶯の三流派があつたが今は和泉流のみ行はれて居る。夫から狂言の演出は元來能樂の中入の時間の延引を結び合はせる爲に行つたもので之を間狂言と云つたが後に一番立の狂言が出来る様になつた。さあ斯うなる狂言にも相當のプログラムが必要になつて來る。先づ最初に出すものを脇狂言といつて神祇に關するもの、次を二番目狂言といつて男を主人公としたもの、といつた様に順序を立てる。主人公といへば狂言の主人公は能と同じくシテといつて主として働く役、相手になるのが能なら脇が狂言ではアドアドが多人数あると重アド、次アド或は一のアド、二のアドといふ。序に二番目狂言の一例として『花争ひ』の梗概を述べて見やう。

主人が太郎冠者を呼出し花見に行かうと思ふから準備をせいといふ。太郎冠者は花を見たくば某が鼻を見させられいといふ。主人、汝が面は鼻といふ花は別じやといふ。太郎冠者主人がいふのは櫻じや花とはいはぬ。いや花といふと互に問答し合ふて例歌を引証し數回の押問答ありド、太郎冠者の失敗に歸する。

こんな風で事件の錯誤や矛盾やが遂に失敗を生ずる基となるので其所に滑稽といふ一種の美感を喚起させる。『花争ひ』のは太郎冠者が主人公シテである。装束はどんな物を用ひたかといふと『花争ひ』の例について言うに主人大名は立鳥帽子に素袍長袴短刀の横ざしに中啓の扇を持つ、太郎冠者は半袴に腰帶新様に極めて素朴である。而して背景も何もない。彼の能樂の橋掛りや鏡板の大きな松やに比して非常に寂しさを感ずるけれども其所に何ともいへないなつかしさを偲はせる、況して其の風俗や用語が丸つ切り足利時代の夫れを裸出して少しも矯飾した点のないのが我々をしてドンナに當時の風俗慣習思にを致さしめるであらう。

まだ謡曲との關係や文學的趣味や愚評や感想や種々

書いて見たい事も有るが日限りある宿題として國語科の應用文として教へを受けた大畧を書綴つて見たのである。

俳句の變遷に就て友の間に答ふ

四乙 越智 コウ

前略俳句とは即ち俳諧の發句が獨立せる者に有之候俳諧とは滑稽の意味に御座候。人は風雅美を好む裏面に滑稽美を好む性ある者に御座候。古くは古今和歌集の内に既に俳諧歌の存するにても之を知るべく候。所が鎌倉の初めから連歌といふ者大に盛んに相成候。連歌とは一首の歌を二人以上にて詠む事にて其の始めは諸冉二神の唱和に候由申者有之候或は日本武尊東夷御征伐の砌甲斐の酒折宮にて火燒翁と問答遊ばされしが抑の初めと説く者も有之候。

新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる

尊

かどなへて夜には九夜日には十日さ

翁

即ち之にて候其他八幡太郎と安信貞任との應酬「衣のたては綻びにけり」と呼掛けたる義家の詞に對し貞任「年を経し糸の乱れの苦しさに」と答へたるも矢張連歌にて候。後鳥羽天皇は頗る風雅の道を好ま

れ給ひ純雅なる連歌をものする人の集りを枯本衆といひ滑稽なる所謂俳諧の連歌をものする人々の集りを栗本衆と唱へて盛に行はせ給ひきとか申候。

さて支那の聯句といふ遊戯平安朝の中頃から輸入せられて僧侶や公卿の間に行はれ候之は終始對句ばかりを澤山の作者が集まつて一句宛作る事に候。萬事支那を模範とする我國の事とて早速其の聯句の法にまねて從來唯二句に限つた連歌を更に長く續けることを工夫致候が鎮連歌の濫觴に御座候即ち一句を鎮のリンクとしてチェーンになりしものが連歌に候。而して各句の名稱に就ては漢詩の起承轉合を又發句胸句腰句落句といふに倣つて連歌に於ても第一句を發句と云ひ第二句を脇句又入韻等稱し五十句續けるを五十韻句百句續けるを百韻と申す様相成候。連歌も鎌倉時代まではまだ、歌人仲間の遊戯として弄れるに止り候へ共足利時代に至りては稍々見るべきものも出て「切字」等の法則も生じ申候併し全く文藝上の作物と認められる様に相成りしは足利末葉の詩人荒木田守武山崎原宗鑑の功による事と存候。元來連歌が鎌倉以後に流行したのは歌の法式が面倒であつたから比較的の自由なる連歌に集まり候儀に候

而も古典的の知識は戦乱のために一般社會に缺乏し歌詞は日に月に口語と遠ざかり従て連歌にしても歌道に用ひる言語の俗に近きは野卑なるものとして退けられ候されば當時の和歌者流にしても少しも新な詞を用ひ候へば大抵は滑稽的色彩を帯びる様相成候而して其滑稽的色彩を帯びたる歌特に連歌が俳諧的に傾くは理の當然に御座候。宗鑑は此種の連歌師の大立者にて其集めた連歌の集が「大筑波」に御座候。

宗鑑の著はした「大筑波」の俳諧は今から考へるとまだ、謎々の様なものにて文學的價值は至つて渺き者に候ひき

摩訶般若はらみ女の奇特かな

宗 長

一二もすんでさんの紐解く

宗 長

大抵斯んな類であつて全く駄洒落に止りし者に候。

宗鑑は支那範重と稱して足利義尙の侍童にて候ひしが義尙薨去後出家して攝津の山崎に住し赤貧に甘んじ後奈良天皇の天文二十二年に歿し候。宗長も殆ど同時代の人にて柴屋軒と稱し駿河の人にて候、守武は伊勢内宮の神宮にて宗鑑と共に俳諧の創始者に御座候併し生れが生れだけに小姓上りの宗鑑よりは多

少上品な所有之候ひき。守武が或る連歌興行の席に行つた時見渡す所いづれも法体の人のみでありしに
より。

御座敷を見ればいづれも神無(髮無)月 守武

とやると坐にありし宗祇取敢へす

ひとり時雨の(降る)古鳥帽子着て 宗祇

と付けたといふ逸話が御座候。守武には「獨吟千句」

といふが御座候。宗祇は姓を飯尾といつて和歌山の

人で花の本の号を受けし人にて候。

宗鑑守武が相尋いて歿して暫く俳道は一頓挫を來し

候ひしが里村紹巴の弟子に松永貞徳が出て俳諧の大

成を期し其式作法を定めて「御傘」を著はして俳諧

中興の偉人と仰がれ候。此人の俳風は高尚優雅なり

しを西山宗因出づるに及び別に談林派を起し俗語漢

語を用ひて多少貞徳の風と相容るゝ事無之候ひしを

元祿に至り松尾芭蕉出てゝ初めて詩歌的價値あるも

のと致し天明の頃に至りては谷口蕪村の徒出て明治

に入りて正岡子規出づるに及び終に今日の狀況を呈

するに至り候。

然していつの頃よりか思ふに宗鑑守武の時代なりし

ならんが俳諧の第一句即ち發句のみを獨立させて試

み候事起り俳諧の連歌(後には付合、又歌仙)と共に
行はれ候様相成天明以後はこの發句の方優勢を占め
明治に入りては歌仙の方は丸でお留守に相成遂に俳
諧の發句といふ事が畧されて發句となり俳諧となり
俳句(明治時代)と申す様に相成候今左に宗鑑以後の
主なる俳人に就て其俳句の二三を御目につけて申候強
ち代表句と申す義には無之候へ共幾分か理想の變遷
を知る事を得べしと存候へばに候。

手をついて歌申上くる蛙かな

元日や神代の事も思はるゝ 宗鑑

皆人の晝寝の種や秋の月 貞徳

あら涼し富士は磯うつ波の音 宗因

よく見れば齊花咲く垣根哉 芭蕉

寒月や衆徒の群議の過ぎて後 蕪村

初芝居見て來て贖着未だ脱がむ 子規

右大畧申述候各派の末流に就ても申上致候へ共餘り

長く相成り候間次便に譲り申候各人の俳風等に就て

は先生の講義拜聽の上御通信申上べく先は之にて

筆を擱き申候

草々

卒業をことほぐ文 四甲 宮邊フミ

旭のかげきらくとして晴れたる空に千代よばふ鶴
の一聲きくつけたらんは如何ばかり珍らしうめでた
からましをうれにもまして嬉しきはわが友の多年螢
に雪に勉めたまへるしるし見えていや高き月の桂を
手折りて今日此處に卒業證書を受けさせたまへる由
を御聞遊ばされし御父君母上の御ほこり如何ばかり
にかおはすらんと思ひ参らせ、將た御許様の御喜び
さぞやと存じ上まゐらすにこそ 是も道ある御代
に御生れ出で給ひしことの幸にてみ恵の露の光さし
そへて咲き出でし花にも類ふべく只々一人御うらや
み申すばかりになじうれしきは筆にもえ盡されぬを
よろづは御目にかゝりて御ことほぎ申し侍らん あ
なかしこ

年賀状 四乙 濱原静乃

今日しも年改りて山陰の賤が小家にもひらひらと日
の丸のみ旗ひるがへり申し候。御許様には君が代の
初日の光を御一統様御揃ひのどかに御迎へ遊ばされ
候事とかましくおめでたく御祝申上候。私方にも皆
々恙なく歳迎へ候まゝ憚りながら御心安う思召下さ

れ度候。

常は御無沙汰のみ致し御なつかしき貴女様の御尊顔
も久しう拜しまゐらせまゝ一入おなつかしく存じ参ら
せ候せめて此の春はいつもの通り御伺ひ致すべくと
存じ候ひしに父事暮より關東地方に旅行致し居り候
へば留守居仰せ付けられお伺ひも出来かね候はんと
存じ候まゝ失禮ながら文して御慶のみ聞え上げ参ら
せ候何卒皆々様へもよろしくお傳へ下され度願上候
此の品東京の姉より送りしもの御珍しくも之なく候
へどもお年玉の印までに御目にかけて参らせ候めで
たくかしこ

偷盜戒

浮草の一片なりとも磯がくれ

思ひなかけそ沖津白波 (新古今集)



學校彙報

◎ 日誌摘録

(自大正六年六月
至大正七年五月)

○地久節 六月廿五日午前八時地久節拜賀式を行ふ
○李王殿下奉送 全日午後一時停車場に集合李王殿下を奉送す

○授業時變更 七月二日より午前七時始業とす

○講堂訓話 七月十八日夏休暇の意義及心得及日誌の書き方等につき訓話あり

○折口氏講演 九月七日講堂に於て『萬葉集以前の女性』に付きて講演あり。要旨別記

○平賀教師出張 十月四日五日両日間廣島市内學校參觀の爲め出張す

○戊申詔書奉讀式 十月十三日第一時限奉讀式舉行詔書換發當時の世態に對する陛下の御軫念、今日の状態が當時の状態と其轍を一にせるに付き能く

戒心すべき旨訓示

○氏神祭參拜 十月十五日一同八幡神社參拜

○森信講師告別式 森信講師辭任に付十月十九日其告別式を講堂に擧ぐ

○運動會 十月廿一日運動會舉行。天候前日より恢復引き續き快晴となり。觀覽者眞に空前の多數にて滞りなく競技を終る

○勅語奉讀式 十月卅日勅語奉讀式を行ふ。

左に訓話の要項を擧げて再び注意を喚起せんとす

(1) 教育勅語の淵源は皇祖天照大神の大詔に存す

豐葦原の瑞穂の國は吾子孫の君たるべき地

なり……………君臣の分……………忠

此の鏡を見ること吾を見るが如くせよ…孝

三種の神器……………智仁勇

(2) 智仁勇の三徳を磨きて克く忠を全うし克く孝

を全うする事、國初以來嚴として樹つ。是隨

神の道なり

(3) 外來思想全化作用は儒教に對し佛教に對して

行はれ來りしと雖ども維新以來の歐米の思想

に對しては頗る遺憾なるものあり

(4) 先帝軫念乃ち教育勅語を臣民に降し給ひて聞

夜に燈火を得たる如く國民道德基の本民心に入るを得たり

(5) 而して神社は數千年來今日に至るまで廣く民間にありて時に盛衰汚隆ありしと雖も此の隨神の道を擁護し來りぬ

(6) 今や世界の大打に際し、諸種の思潮の紊れ起るの時に會す。吾等は將來此の大事を失ふ事なく汚すことなきを要す

○講師披露式 十一月一日岡田堅二郎(點茶)大塚靜馬(插花)兩氏就任の披露式あり

○修學旅行 四學年生は十一月六日午前五時發、伊勢京坂地方に修學旅行を行ふ。引率者大河内森岡田三氏。十一日歸着

○遠足 十一月八日三年は宮島 一二年は佛通寺へそれく、修學旅行をなす

○越智氏參觀 十一月十六日文部省視學委員越智教授參觀せらる

○校長歸校 十一月六日より東京へ出張中なりし杉野校長十九日無事歸校

○始業時變更 十一月十九日より八時五十五分朝會開始九時十分授業開始とす

○音樂會 十一月二十五日新嘗祭當日を卜し音樂會を行ふ。温暖快晴にて聽衆堂に滿つ

○三木教諭告別式 十一月廿八日講堂にて三木教諭告別式を行ふ

○廣岡女史講演 全日第五時より廣岡淺子刀自の講演を聞く。歐米婦人の能率高きこと婦人參政權を得居る米國の某々の州は禁酒が行はれ政界の腐敗が廓清されつゝあること、是等の状態に比し我國の婦人が沒理想にて従つて子守料理人に過ぎざる觀あるは慨歎に禁へざる處須く將來の日本婦人は向上發展を計らざるべからず云々

○義士會 十二月十四日富市教誨會主催の義士會を本校講堂に開く。廣島高師教授藤岡繼平氏の講演あり「義士中の花大石主税と遺族中の花堀部お順」と云ふ題の下に趣味津津たる講演あり。本校生徒も參聽す

○蒙古の談 十二月十五日二葉天外の蒙古談を聞く
○講堂訓話 十二月二十二日三四年生に對する講堂訓話あり

○終業式 十二月廿四日第二學期終業式を行ふ

○皇太子殿下御影拜戴 十二月廿五日午後三時三十

四分尾道驛着の列車にて御影着御、三宅吉野兩教諭は正副組長並に校友會委員を引率して驛に奉迎す、奉安の儀終るや一同奉拜式を行ふ

○新年拜賀式 大正七年一月一日新年拜賀式を行ふ本年よりは兩陛下の御眞影に皇太子殿下の御眞影を掲げ奉る。芽出度さ一しほなり

○始業式 一月八日舉行、過去二學期の仕上げとなすべき時にして而も日子僅かに二ヶ月些の油断を容れざるべき旨訓示あり

○新年試筆成績發表 冬季休暇中に課せし習字の練習を元旦に試筆せしめ各教室に掲示せしが一月十日各級一二三等入選者氏名を發表す

- 一甲 一高橋 敬子
- 二井上 京
- 三柳父 コト
- 一秦 コトヨ
- 二甲 二森 壽子
- 三石井 トラ
- 一中村 喜代
- 一晋家 春代
- 三甲 三岩井 清子
- 一乙 一佐々木幹枝
- 二寺西 久榮
- 三矢野シツコ
- 一武田千代子
- 二乙 二吉田サワ子
- 三有地トミヨ
- 一吉井千代子
- 二乙 二吉村ミツノ
- 三青木 千代

- 一東 芳枝
- 二甲 二村上 小枝
- 三繁村 マツ
- 四乙 二壽美谷重子
- 三今井 高代

○競点作文 一月十六日午後第一時より競点作文を行ふ。入賞文別掲

○講堂訓話 一月三十日講堂に於て軍國主義と民本主義とに就き三宅教諭の訓話あり

○一色教諭就任 一月三十日一色教諭就任披露式あり

○參觀者 全日梅林山中高女教務長、野田福山高女教諭參觀せらる

○父兄懇話會 三年以下の生徒の父兄懇話會を二月二十三日下裁縫室に開く。因に圖書室三乙の教室に生徒の圖書を陳列し父兄の觀覽に供す

○丹下女史講話 三月十一日第一時より第二時に亘りて丹下松子刀自(八十九歳)の講話あり。女史が報徳の精神を説き自己の實歴を説きて時の移るを覺へざる概あり多大の教訓を與へたり

○送別會 三月廿二日送別會を行ふ

○進級式及内學教諭告別式 三月廿三日午前中は大掃除机入替陳列準備等の爲め授業休止午後第一時

○掃除机入替陳列準備等の爲め授業休止午後第一時

進級式及告別式を行ふ。受賞者數内譯左の如し

	四年	三年	二年	一年	計
性行善良		六	三	四	一三
學力優等		八	七	八	二三
精勤	八	二五	一七	一九	六九

○卒業式 三月廿五日午前十時より第七回卒業式を

舉行す。卒業生數五十八名。性行學力及精勤の廉により受賞せし者各々二名宛計六名なり

○入學試験及入學式 四月四日午前八時より入學試験を行ふ。出願者百九十三名。採点係は多忙を極めたり。全七日午前八時より入學式を舉行す。

○始業時變更等 四月八日より七時五十五分朝會開始八時十分より授業開始と變更。今日對面式始業式及音楽科担任龜井之な氏來任の披露あり

○級長任命 四月十一日正副級長及役員を任命す。校友會役員氏名は別に掲ぐ

- 吉井千代子、岸田道惠
- 今井 小園、越智 コウ
- 岡田カヨツ、葛西壽香
- 吉田サワ子、石井 トラ
- 市川ヲユキ、柳父コト
- 碓山 里子、矢野シヅコ

吉村チカ子、田門勝子、高垣 延代、中根 慶江

○開校紀念式 四月二十日開校紀念式舉行

○大轟御發聲紀念式 四月廿七日第五時大轟御發聲紀念式を舉行す

○遠足 四月三十日第三時より立花をへて千沙方面

に遠足を行ふ。午後二時頃より降雨、大に困難す

○出張 杉野校長圖書館の用向の爲山口地方へ出張

五月三日發全五日歸着

○海軍紀念式 五月廿七日放課後式舉行。東郷大將

の意氣軍艦和泉の意氣兵卒の意氣等のことより地

中海に於て特に我軍艦の敵に恐れらるゝ所以も亦

この意氣にありて機械の精妙によるのみに非らざる

旨訓示あり

◎朝會訓話抄

◎悪口には聞耳を立て、忠言は耳に忤ふ、好事は門を出でず、悪事は告げ告げて千里を走る。何の爲の耳何の爲の口?

◎本日は日光の照り付くること強し。汗ばむを覺ゆ心よき汗は身体の活動の結果によりて得らる。人間萬事汗によりて解決せられざるべからず。汗により

て作りたる財産でなければ駄目なり。汗によりて作りたる健康でなければ駄目なり。汗なる哉々々。諸子試に汗の効用に付きて一文を草せませや

◎佛畫石地藏の類如何に美しく立派に描かれ刻まれあるも其のまゝにては何人も之を拜せせ。入佛供養ありて後始めて拜す。之れ佛の魂を尊ぶなり。形よりも精神を尊ぶなり。有名なる關の地藏は大きい事日本一なり。然れども大きいからとて拜むにあらず一休禪師の開眼供養を得て有名なる靈驗いやちこなる佛とせらるゝに到りしなり。女子も形美しくとも美しき精神を缺けば即ち石屋の庭にある石地藏同様のものと知れ

◎關東地方暴風雨の狀慘憺を極む。然るに此の天災に乗じ買占め賣惜みをなして暴利を貪る奸商あり。政府は之が取締令を發布したり。如是奸商は實に人道の敵なり。憎むべし。二宮先生は賣つて喜び買ふて喜ぶが商法の極意なりと云へり。或人商業に失敗して先生に教を乞ふ。先生乃ち其人に一膳飯屋を営むべきをすすめ且つ其の價を定む。某啞然として曰く「それでは引き合ひませぬ」と先生曰く「損失は余が償ふべし、唯謹んで余が言を守れ」某乃ち開店

するや千客万來し決して損失なく莫大の富を得たり今この箱根の旅館福住は此の後なり。乞ふ「賣つて喜ぶ買ふて喜ぶ」の語を記せよ

◎今夏大阪府下に於て千年前の白骨を發掘せられ、京都大學にて精細に研究中なりしが、其の結果男子の身長は五尺六七寸、女子の身長は五尺二三寸の平均なりと云ふ。我等の體格は歐米人に比して劣り、従つて仕事の能率も著しく劣れりとの事にて大に悲しむ所なりしが我等の祖先が上述の如く立派なる體格を有し居たりし事を知り、大に意を強くせり。銳意改良を計れば祖先の如くなり尙進んで祖先よりすぐれたるものとなるを得べし

◎廣岡淺子刀自は三井家より入嫁せられし方なるが衣類諸道具の嫁入荷物を省きて多くの書物を購ひ持ち來られしと云ふ。妙齡にして俗流を抜くことかくの如し。夫の家衰ふるを見るや綿服を着て廣岡家の經營に當り、石炭販賣に先鞭を着け（斯業は社會より賤しめられ廣岡家の如き名家のなすべからざるものと考へられしものなる由）銀行業を創始し幾多の困苦を凌ぎつゝ遂に成功を收め、家運爲めに隆々たるに至れり。女史は本年七十九歳の高齡を以て尙且

つ樂隠居を學ばず。東奔西走女子の向上に努めらる偉なりと云ふべし。又音吐朗々四千人の聽衆までは徹せしむるを得べしと自ら語り居らる。強健人に勝れたる点亦學ぶべきなり

◎力士綾川高等師範學校に於て吾等の爲に健康法を説けり。氏曰く勞働をなして温くなるは血行のよくなる爲なり。血行のよくなるは勞働の爲に大きく呼吸する故なり。寒しとて縮めば益々血行を悪しくし寒を感ず。我等は此の理により大に呼吸することに依つて自ら裸體となり氏一流の大深呼吸を行ふや見る々々流汗淋漓たりき。傳へて以て諸子の參考とす

◎古武士の魂は刀なりき。今日の武士の魂は時計ならずんばあらざ。古は刀を以て自省し今は時計によつて自ら省みる亦よからずや。時計は吾人に正確と努力とを刻々に刺戟すればなり。一外人日本を評して曰く『古へ西班牙の隆盛なりし時は人民勤勉なりき。然るに彼等は時間を無視し、貯蓄心なく、奢侈に傾くに至り國勢挫けたり。今日日本人を見るに此の三つの者備れり。危い哉日本の前途』と余思ふに誠に好箇の忠告なり唯彼は下り阪の中途と上り阪の

中途とを混同せり。日本の將來は有望ならせとせず惡しき状態より改良に向つて上り始めたる途中なればなり。然れども國家衰亡の三惡要素を西班牙と同様に持ち居ることは確かなる事實なれば大に發奮努力せざるべからず

◎人は萬物の根源を探らんとする傾向あり。智的には之を絶對とし或は宇宙の意志とし、宗教的には或は神と云ひ佛と云ひ或は天と云ふ。神儒佛何れに歸するも可なれども、或る宗教に屬する或る者は日本の祖先崇拜神社崇敬を排斥すと聞く。大なる誤りなり。日本人にして日本の皇室を忘れ皇室の祖先を忘れ、國家の功臣を忘るゝものあらば……之れ本を忘るゝもの忘恩不義の徒と云ふべし。かかる傲慢無禮の神の子佛の子あらんや。彼は神の道を説き乍ら其の道にそむかむとしつゝある者なり

◎我海軍地中海に於て獨逸潛航艇の驅逐に従ひ盛名世界に高し。聞く、我驅逐艦は敵を發見すれば直に全速力を以て是を追ひて砲撃を加へ、手を以て爆彈を投げ付け得るまでも間近く追ひ迫るが故に到底敵は我を攻撃する餘裕を見出す能はず。然るに他國の驅逐艦は敵潛航艇を發見するも敵の水雷を恐れて敢

て急迫せむ唯大砲を遠くより打發して命中を萬一期するのみなれば敵は悠々逃れ去るを得。如是の大相違あるによつて我海軍の驍名敵味方の間に大きなりど。意氣なるかな。

◎又聞く、我驅逐艦は英國より供給し呉るゝ重油(石炭の値の數層倍にして煙少し)を辭して石炭を用ひるといふ。蓋し英佛の驅逐艦共は石炭の煙の爲に敵に發見さるゝを恐れて重油を使用し我は發見せらるゝも我も亦彼を發見し急迫止まざるの意氣あるを以て石炭の煙を意に介せざるなり。而して爾來敵は黒煙を見れば我海軍なる事を知り直に艇を海面より潜めて懸命に逃れ去ると云ふ。昔者死せる諸葛生ける仲達を走らす。今は地中海の黒煙敵を走らす。意氣なるかな。

◎『成金』は近來の流行語なり。元來將棊の用語にして譬へば歩兵が一躍して將官となり將官たるの働をなせども境遇が變れば復元の一步兵となるが如きを云ふ。世界大乱の大波にゆられて僥倖にも高所に打ち揚げられて大金を獲得したる俄金持を意味す。故に元來資本あり信用あり之を正しく運用して莫大の富を得たるものは之を成金とは云はず。『成金』は大

金を持つ丈の人格價值なくして金銭を所持するが故に其の金銭を悪用して社會の風儀を紊る癡狂人に正宗の銘刀を持たせると一般なり。若し諸子にして平素勉強せず。一夜作りに勉強して偶然よき點數を得ば、是れ點數成金のみ最も賤しむべし

現在職員

(大正七年五月)

出身學校	受持担任 學科事務	職名	就職年月日	族	氏名
東京高等師範學校	修身 教育	校長	大正二、一〇、四	愛知	杉野三治郎
全	地理 歴史 主任	教諭	明治四三、三、三一	兵庫	三宅素
全	地理 學 教務 主任	全	大正六、四、七	茨城	秋山幹
全	國語 學 主任	全	大正三、四、一六	靜岡	三橋六治郎
試驗檢定	國語 全	全	大正四、六、一七	福島	森要人
全	國語 全	全	明治四五、四、九	茨城	大河内定雄
東京美術學校	圖畫 習字 全	全	明治四五、三、三一	埼玉	吉野賢司
日本體育會 体操學校	体操 全	全			

東京大學醫學部 別科			商業教員養成所		和洋裁縫學校	物理學校	廣島尋常師範學校	臨時教員養成所 第六	共立女子職業學校 高等師範科	東京音樂學校	京都府立第一高等女學校專攻科	津田英學塾
	點茶	挿花	商業	庶務 會計	裁縫 手藝	數學 理科 主任	作法 家事 會監	裁縫 家事 全	裁縫 手藝 主任	音樂	裁縫 家事 會監 全	英語 全
校醫	全	全	職 教師	書記	全	教師	助 教諭	全	全	全	全	全
明治四五、五、二	全	大正六、一一、一	明治四四、四、六	大正二、二、三八	大正三、一、二二	大正五、一、一五	明治四二、三、三一	大正七、一、六	大正五、三、三一	大正七、四、五	大正六、四、七	大正五、九、二一
士島廣	全	平島廣	山口山	平島廣	士島廣	平島廣	平島廣	平媛愛	平島廣	平王崎	平山岡	平馬群
大和三郎	岡田堅三郎	大塚 靜馬	河地 大輔	三次 隆次	西田 ナル	平賀 瑞夫	岡田 タツ	一色 保子	戸野廣キタヨ	龜井 はな	小野 増野	高橋みゆき

生徒原籍郡市別表

(大正七年五月調)

郡市別	學年別			
	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
比婆郡	一	一	一	一
豐田郡	三	二	一	一
深安郡	三	二	一	一
芦品郡	二	三	二	一
沼隈郡	一〇	一四	一四	一三
御調郡	二五	二二	二二	二六
福山市	二	三	二	一
廣島市	三	一	一	一
尾道市	三六	四一	四三	三八
計	一五八	一五八	一五八	一五八

農 業	職業別	學年別				
		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
二九						
二二						
一九						
一九						
八八						

父兄職業別

(大正七年五月調)

計	他府縣	甲奴郡	佐伯郡	加茂郡	世羅郡	双三郡
一〇〇	一三	一	一	一	一	一
九七	六	一	一	一	一	一
九二	六	一	一	一	二	一
八八	五	一	一	二	一	一
三七七	三〇	一	一	三	四	一

言の葉の濱の眞砂はつくるとも

限りはあらし君か齡は

計	其 他	神官僧侶	會社員	教 員	官公吏	雜 業	商 業	工 業
一〇〇	一二	一	六	二	四	三	四〇	四
九七	五	二	六	二	五	五	四七	四
九二	五	二	五	二	二	六	四五	六
八八	七	二	五	一	六	七	三七	四
三七七	二九	六	二二	七	一七	二二	一六九	一八



雑報

教員室だより

卒業生の方々に御心配をかけない爲に、第一にお断り申上げておく事は、岡田先生の温容が巻頭の記念写真中に見えないことである。それは先生が丁度其頃病氣欠勤中であつた爲で此頃は一層御壯健で學校の爲に盡してゐられるから御安心下さい。去年の冬三木先生が郷里の母校へ御轉任。今春内藤先生が郷里へ退かれた外は、先生方皆さんお揃ひでお元氣です。後任の方は高師出の 一色保子先生とそれから音楽學校出の龜井はな先生。一色先生は經驗家で龜井先生は卒業なさると直ぐ此方へ見えたのですが、お二人共極氣サクな方ですから、早くお近付になつて下さい。之は卒業生への御紹介。五月雨で鬱陶しいとは云ひ條、教員室は例によつて和氣鬩々、月に二回づゝ職員が句會を開きます。實は未だ俳句の門

にも入らない連中……先づ門前の小僧（但しお經の聞き覚えもまだなり）と云ふ形……メイ句カン吟百出の態である。又それ／＼の專問によつて研究した結果の發表會もある。此頃は秋山先生の『遺傳と教育』の發表を聴問中である

寄宿舎だより

蛙の聲一しきり高くなりました此頃舎では夕食後運動が盛んでフットボール棒押しテニスなど盛んに行はれます年々入舎を希望するものが多く御座いますので舎はさつちりつんで影法師さへ入れる事は出来ませんこんな狭くなつて不自由を感じながらも情深い先生のお蔭で睦しく暮して居ります

去年の末頃から風呂がこはれて居りますので木風呂が二つすへられて一日に三室づゝ入つて居りますが最早釜も整つてきて居りますので七月よりは又元の石風呂に一室こぞつて疲れを醫する事が出来るのでございませう食道の横のざくろの花だけは毎年咲いて居りましたが實としては見る様なものはございませんでしたが去年の運動會には見事に結びまして皆様のテーブルにも飾られました井戸端の海棠もあは

れな花の一輪二輪咲いて春をつげて居りましたが本年は幹が軒まで達して賑はしう咲きほころびましたこれも舍の日にく進んで行く前徴と思へば何んとなう嬉しうございます本年の卒業生のお植へ下さいました銀木犀も緑深う勢よく成長して居りますやがて句の出る事と楽しんで居ります黒垣に枝を混へた桃びはも元氣よく實のつて居りますから同窓會には是非くお越し下さいませ古巢に残る妹達は何よりの樂しみとして待つて居ります此の頃の様にシトクと降りつづく五月雨を縫ふて琴の音のもれくればヒシくと御姉様方々の事を思ひ浮べるのでございます夕日を西國寺に望む瑠璃峯にたてる寄宿舎は御姉様方々の御残し下さいました暖い清い中に、其の日くを樂しく陸じく送つて居りますから何卒御よろこび下さいませ最近舎を訪れ下さいました方々には市川様井出様繁村様村上様なぞでお宿り下さいます方々の所は病室で同室であつた人達は寢具を其所へ運んでいつて昔話をするのですこの様な事が何よりの樂しみでございます



校友會報

文藝部報

委員 四甲 小森 秋子

私は初めて文藝部の委員になつたばかりですから薩張様子が解りませんが從來委員として盡力された方に伺つても見、又自分の觀察によりますと矢張例年の通り夏期は運動のシーズンなので閲覽室は寂々寥々です。其代り土曜日の貸出目になると能く出ます大方書棚はカラツポになつて仕舞ひます
 閲覽される書物の類別をしますと、近來は修養に關する物が多く出ます、勿論文學物が一位を占めては居りますが例のお御物の様な幼稚な物は追々と歡迎されなくなりました。如何に校友諸嬢の思想が着實になつて來たかが了解されます
 例によつて昨年の夏から買入れた書物の主なるものを左に御紹介する前に常に先生方から讀書法に就て

御教訓を受けた二三を左に申上げませう

書物の中には一夜作りの物もありますが非常な苦心によつて出来たものもあるといふ事です

例へば伊太利のマルコポーロは牢屋の中で東洋見聞録を作つたとか我國幕末の志士平野國臣は矢張牢獄中で獄卒から貰ふ便所紙を紙撚りにしてそれを文字の形に適當に紙上に貼りつけて書物を書いたとか申します。經世濟民の具に供する書物の中には斯ういふ苦心の結果に成つたものもありますから仇疎かにはならぬと申す事です

讀書の仕方に就ては冷靜に理性の眼を以てしないと却て本に讀まれて仕舞ふといふ事です

又書物を手當り次第に乱讀するといふ事は頭腦を錯乱するといふ惡結果に陥るといふ事、又數多の本を讀む場合には其の目次や序文やを一應調べて書物の大体を知り必要部の分だけを讀むとか或は書中の梗概をノートに書取つて後に文を整理して置くとかしないといふ事は却て害をする事があるとのこと事です。

兎に角私は委員の一人として校友諸嬢が不用意に手當り任せに且つ單に新刊の書物であるとか又は標題が面白そうだとかいふ理由の本に讀書なさらぬ様に

願ひたいのです

さらば例によつて新着の書籍に就て其主要なるものを擧げる事にします

◎ 現在書籍一覽表

科 目	部 數	冊 數
一 修身教育	八九	九八
一 家 政	三一	三一
一 地 歴	一三九	一四三
一 傳 記	三五	三八
一 理 科	三五	三五
一 文 學	二〇八	二一五
一 雜 計	一〇九	一一三
合 計	六四六	六七三

◎ 雑誌の種類

新女界	少女の友	少女新聞	婦女新聞	婦人週報
淑女畫報	趣味の友	A B C	實業之日本	
音楽界	戦争時報	戦争畫報	裁縫雜誌	

◎ 新購入圖書の主要なるもの

代表的主義主張講話	獨の内陣	三部生活	藝術講話
續洋樂夜話	足掛四年	醫學体操の理論及實際	
エマーソン全集	水彩畫の描方	歸一協會叢書	

運動部報

運動會の記 四乙 岡田三樹枝

- 渡鳥日記 自生と人然叢書 新春 近世小説史
- 近代文藝協會叢書 日本女性史 評釋日本名歌選
- 魔術的物理解驗法 自然界之理科智識 夏目漱石
- 源平物語 平家の人々 歐洲大戦美談 日本國粹全書
- 現代女性觀

大正六年五月二日——大正七年五月三十一日

文藝部會計報告

(大正七年五月三十一日調)

收入

五月二日	五〇、〇〇	會費
九月十五日	五〇、〇〇	全費
十月九日	壹、五〇	雜誌拂下
大正七年一月二十四日	五〇、〇〇	會費
計	壹五壹、五〇	

支出

三、〇〇	黑板代
〇、六〇	書架
九六、三九	圖書購入
九九、九九	

差引殘金

計 五壹、五壹錢

秋も漸く中旬になりたる十月廿一日、本校にては第七回秋季運動會を舉行したり快き空に無限の喜びをつくみきれず校内に高らかにかくげられたる万國旗は秋風にひらくとひるがへるなりまして申分なき好天氣なれば我等の動作も自然まめしくなりて準備にいろがしドンと花火の音にさはがしかりし校庭も時刻の合圖なりと知るや一入心を引きしむるなり觀覽者は老若男女といはせ我先きにと争ひ來るなり第二の花火の音と共に樂隊のさへたる調子は競技を始まらしむべく先づ鳴り響きぬ四三二一の順に出て校長先生の教訓も終りいよく競技に取りかゝりぬ。左に競技の大畧を批評せんに

〔二年〕の徒競走は一年生振りを發揮し走らるゝに力籠りしは愛らし〔二年〕のセンターポールは元氣稍々缺けたる点あり〔三年〕の球竿は平生の練習の結果は仇ならせ動作整然誠に上出來なりき〔二乙〕の造花は尊き菊水の花を作りし優しき心根表はれるたり〔四年〕の棍棒は重きものを平然として振れし様例年

に比して上出来なりき(四年甲乙)の汐干狩は大波小

しさは繪の如くなりき爾後卒業生の方々が多く出ら

波を飛び越え具を拾ひ来る
變りし考へさすがは上級生

れ一團体を作り一つの競技を行
れん事を今より望むなり

なりどうなづかる併し大波
小波を越される際あはてら
れたる者ありて綱にかゝれ

秋の日は西國寺山の彼方に落つ
る時首尾よく四時半を以ちて全
く終りぬ

し点は遺憾なり(四年有志)

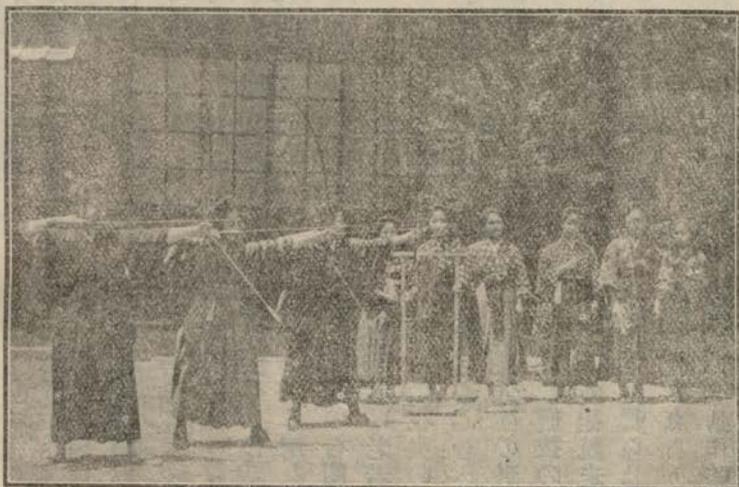
平素に於ける運動

の大弓は態度は雄々しかり
しか當日は的に矢のあたり
ざりしは不出来なりき(二
甲)の繪畫競走のダルマの
怒りし顔も可愛しく保護者
席にてはハンカチフを口に
當てられたる者多かりき

(三年)の輪体操は當地にて
は珍らしき動作なりし爲一
入見物の眼を引きたり(市
内小學校徒競走)は三校の
内の何れか本日の名譽を負
ふ爲見物人の感興又一入な

りき(鈴削り競走)は職員卒業生の競走にしてその美

暑い日光を物どもせず淨土寺山を越えて高須公園へ



初夏の若々しい氣分は体全体に
みなぎつて如何にしても木蔭や
教室にひつこんでゐられぬ或一
部の者はフットボールの相手に
餘念なくボーンと勢よく足先よ
りけられる高さ或は屋根よりも
高く又自分の身長よりも低いの
があつて思はぬ滑稽も出来る四
月三十日には向島方面へ遠足を
試みた、折り悪しく途中より雨
となり、思ひかけぬ失敗をした
此失敗遠足を補ふ爲ボカ〜と

午後の小遠足をした何れも体を鍛へる爲である

フットボールの遊びを離れて或一部はテニスに熱心である諸先生を相手の勝負は見物人の多い事。これは中庭のテニスの様子であるが表庭のテニスは一年が多い。なれない手振でボン／＼してゐる様羽根つきの様である

「キャツ／＼白赤」といふ聲にふりかへり見れば庭の或一隅で四年の方が一二年と相手のセンターボール我を忘れてボールに一心を奪はれているのも愛らしい

近來は弓が盛んである時はいつも其の女丈夫らしい態度に接す或時は餘りに矢が的に當つてしば／＼早く破れるので一方その熱心に感ずるが又一方早く破れて造らなけ



ればならぬのであたねばいと思ふ感じも浮ぶ新に運動器具として出来たのは三本の棒である、これは辛抱強くする爲の道具である、勿論力も加はるから体育の爲はいふ迄もない三本ともいつも少し捧の取り方が遅いと誰彼が取つてしまつて傍に立つて自分もしたい斗りの風に見えるのは如何に皆様が進んで体育に心掛けてゐられるか分る何れの運動にしても近來は三百有餘の姉妹が身体を鍛へるといふ事を自覺して物に當るので総べての動作に活氣あり元氣あり、益々勉めはげし事を望む

身におはぬ

賤がしわざも玉くしげ

あけてだに見よ中の心を

（本居宣長）

大正六年度運動部決算報告

収入の部

會費 一五〇,〇〇〇

フットボール外皮賣却(古物) 〇,五〇〇

大正七年利子 一,一六〇

計 一五一,六六〇

支出の部

雜費 一〇〇,五七〇

計 一〇〇,五七〇

差引殘金 五一,〇九〇

校友會役員

會長 杉野校長

副會長 三宅教諭

文藝部長 三橋教諭

運動部長 吉野賢司

文藝部委員

運動部委員

四甲 吉村ミツノ 小森 秋子 青木 千代 村上 季子

四乙 岩井 清子 稻田 トミ 岡田三樹枝 中村 喜代

三甲 杉谷加津子 桑原 好子 阪井 久子 佐藤 絢子

三乙 和田イサヨ 木曾シヅコ 名越 美子 濱口 末子
二甲 片上不二子 兒玉 光子 村上スミエ 高橋 敬子
二乙 寺西 久榮 大久保好子 金子 玉樹 坪島 君子

校友會々計報告

(大正六年度分)

収入の部

一會費 七〇九,七九六

一雜收入 六〇三,四〇〇

一前年度越高 六,六一〇

支出の部

一雜費 五八六,六五〇

一運動部へ 二八六,六五〇

一文藝部へ 一五〇,〇〇〇

▲引殘高 一五〇,〇〇〇 一二三,一四六

運動部會計文藝部會計は別に報告あり

本年度より獨立せし爲めなり 此報告は元帳の報告と御承知ありたし

日は沈むども、希望は沈まじ

星は昇り、信仰は疾く起きぬ (エマーソン)



同窓會報

同窓會記事

自然の夏は意氣横溢活力充滿せる青春の期に同じでございませう。然るに我々は暑さに負けて仕事もせず怠漫倦厭さへ感じ無意味に無駄に過す日が多うございませう。それに夏期は一般に家事に餘裕のある時機でございませう。此の期を利用して有益に過させたいとの校長先生の御意見で昨年と同じく七月廿一日から卅日まで十日間刺繍の講習がございました。講師は矢張戸野廣教諭で場所は母校の下裁縫室でございませう。出席會員は若干名で昨年も講習を受けたりと新たな者との二種に分たれました。従つて講習科目も異つて居ります。

新 木綿部分縫

手柄

帯ノ半襟等

舊 額(梅に鶯)

半襟等

朝は我れ勝ちに先を争ひ集ひ寄り少しでも涼しい所風のある所風のある所に陣どり互ひに遅れちと一生懸命針持つ手を運ぶのです。全身からスルリとした油汗がにじみ出で針がきしめて通らなくなる。『暑いナァー』この聲と同じにパタ／＼と扇を煽ぐ音がせはしく聞える。木々に啼く蟬の音も一入暑苦しう感じられる。通りの方で氷賣の聲がする。『心涼しければ身自ら涼し』とか、東西に窓のある彼の部屋へは何故か風の子も入らない。午后からは皆廊下上台を持ち出していたします。久しく無沙汰した同級の方達と台を並べて手を動しながら、學生時代の追懐にそれからそれへと花を咲かせそれは／＼おもしろうございました。時には忘れかけた記憶を呼び起してヨラスもいたします。まるで在校の方と同じ様な気分になりて騒いだり、はしやいだりいたしました。一時高まる話聲も止み又もどの静寂に返ると今まで忘れて居た暑さが一時に込みあげてたまらなくなりませう。と彼方のポプラの梢を誘つて一陣の涼風、初めて蘇生した様な氣持になりてスーと胸一杯に吸ふ其の時の氣持よさ。

その冷さが全身の隅から隅まで行き渡ると今までの暑さは何處へやら。脊中の汗が冷んやりと氣持がわるい。かくして長い夏の太陽も西に傾いてゴブラの影が長く校庭に尾を曳く頃になると夜業に少しでもと重い臺を提げて歸るのでございます。

毎日てく／＼蟻が物が運ぶ様
に一針づゝ抜いてはさしく
時には嫌になる事もありまし
たが。此一本の針と糸で世の
あらゆる萬物を縫ひ出される
のだと思ふと興味が出て針の
運びがもどかしくなり出しま
した。日々色濃くなる台の表
を樂しみに十日間は夢の様に
過してしまふました

この講習に御出席になりまし
た方々は大變得るところがあ
りたと存じます。殊に二年御出席になりました皆さま

んは刺繡をして愈々實用的に應用し得る様子になら

れる事と信じます

今回の講習の爲に澤山の會員
が集つて居られるのを幸最終
日の卅日に同窓會が開催され
る事になりました

金もどろげんばかりの暑さにもかゝらぬ卒業生の皆様はなつかしいみどりの母校に集まりました。午后一時總會記念にと校庭におり立つて寫眞を取りました。中には第一回の長安愛子様小西うら様などをお見受けしました。ききませば長安様はうの後おいたわしいことに歸らぬ國へと逝かれましたとか誠に御氣毒なことでございます。あの時とりました寫眞がこう云ふ悲しい記念となりませうとは、ほん

とに夢の様でございませう。先づ總會の日は皆様愉快



に寫眞にとられて一同會場たる講堂に入りました。今年も暑苦しい茶話會などぬきにして十人位宛白いテーブルを中にとり圍んで涼しい茶菓を頂き楽しく自由に談笑いたしました。遊學された方達の土産話を初め様々な積る話しにさしもの暑さも忘れた様で若々しいほぐえみの内にたのしいつどいの日も終りました

長安愛子様のみまかり給ひしを悼みて

第一回卒業生有志者

私達は先に三名の同期生を失ひこゝに又同じ不歸の客を悼まんとは何てふ悲しかるべき事に候はせやおぼつかなき筆の尙一入乱るゝを覺え候如何に運命の神の脱れ得ぬ悪戯とは申せ君の長き前途に思ひを馳する時涙滂沱として下りよしなき愚痴の禁じ難く候あの才徳と御身体とにして一つの美しき家庭よりは聽て花は堅實なる實となりて輝き出でんと期待淺からざりし人なるに吁！今はすべて一場の夢とえらぶ所なく可惜一生は閉ぢられしを思へば遣る瀬なく悲しう候されど如何に悲しめばとて叫べばとて所詮甲斐なき繰言のみさればせめて／＼今は君が安き眠り

を慰め奉りて御冥福を祈らん哉

哀悼の辞

泉隆子様のみまかり給ひしを悼み謹しみて御吊詞申上候

第五回卒業生有志

生者必滅は世のならひと存じ候へど業卒へて三年過ぎし今、彼の君には呼べど答へ無き遠き黄泉の客となられ給ひしと承ればたゞ胸ふさがりて限りなき悲しみにとざされ申候

かねて御病氣のお勝れぬよしは承り候へどかくばかり急に悲しき報せにあはんとは夢にも思ひ申さず候ひき。さてもありし當時を思ひ出せば御身もおすこやかに學びの業にも人にすぐれておはしましゝを思へば誠に惜しみても尙あまりある方なりしにあたら花の盛りをはかなくも散らせられ給ひしは實に口惜しき限りに存じ候

さりながら散りにし花は再び枝にかへらず候せめて後の世にても御幸福にゐらせられます様かげながら祈り上げまゐらせ候

あまりの御いたはしさにかくは一筆書きそへてつきせぬ哀悼の意をさゞげまゐらせ候

同窓會大正六年度決算報告

収入之部

前年度繰越金 四三八・八四〇
 夏期講習會費剩餘金寄附 二、〇五〇
 第七回卒業生五八人分會費 一一六、〇〇〇
 大正六年度利子 二〇、二八〇
 合 計 五七七・一七〇

支出之部

郵 税 六、二五〇
 眞たま第四號三〇七冊代 七八、〇〇〇
 雜 費 一八八一〇
 合 計 一〇三、〇六〇
 引殘金 四七四、一一〇

柔能制剛

降る雪に撓むと見えて折れぬこゝろ

柳の枝の力なりけり

〔下田歌子〕



● 舊師消息一括

先日福井市に大火事があつて佐藤先生のお住みの豊島中町と云ふ町名を新聞の中に見出した時の驚き！早速お見舞を出すに折返し御無事との御返事で安心。相變らず多方面に興味を持つてお忙しい中から弓もテニスも碁も球突もと云ふお元氣、球突は急に上達せられるたらうと陰ながら憚り乍ら想像して居る。古山先生（新潟商業學校）は此間も頗りに尾道が戀しいとの御手紙を頂いた。お子さんが出來たらだらうかどうぞか。其邊不明なのが物たりない。子供がほしくと云つてゐられた牧田先生（名古屋第二高女）は都合三人の子福者となられたとうで嘸可愛くてゐらつしやるだらう。澤田先生は護謨林を何エーカーとか配當に貰つたと云ふ通信が先達てありました。阪本先生は今年の秋トロント大學は御卒

業なれど序だから今年紐育の大學で御研究の運びになるだらうこの事。勉強もしたいし歸りたいしと云つて來られた。上村先生は何よりも非常に健康になられたことをお祝ひ申す次第。此冬お忙しい中から態々當地へお尋ね下さつた程、昔なつかしく思つて居て下さる。内藤先生は家庭にあつて靜に御修養の豫定であつたのに御友人及び學校の切なる依頼もだし難く下關高女へ御赴任。杉藤先生（舊姓新帶）は可愛らしい坊ちやんのおつ母さんとして内外頗る御多忙の御様子。クリクリと肥えて色白の……濃い三ヶ月眉が取り分けおつ母さんソツクリ……と聞いて私はほほ其の坊ちやんのお顔が想像出來ます。

追記 古山先生は香川縣師範學校（高松市）へ杉藤先生は御良人が天王寺中學校へ。ソレソレ御轉勤の由

雁のつて

「お断り」卒業生のおたよりは岡田先生及幹事の方々のお骨折でまさめがつかしました。然るに本年は頁数を著しく減じなければならぬ爲めに遺憾乍ら「御様子の知れない方」又は「御無事にて取り分けお知らせすべき程の材料のなき方」に就いては此

欄には御姓名及記事を書きました段は皆様に對して済みませんが何卒不惡御諒恕を願ひます
(三宅)

第一回卒業生

西中 さん 本會として母校のため將た會員の爲め熱心に盡し給ふ先づ頃母校に於けり鳩山春子女史の講演の際お健かなるお顔を拜したり以前よりは餘程御肥満遊したかの様に見受けらる

生酒

コト 長らく愛兒の看護に盡し給ひし甲斐もなく遂に御永眠の悲しみに逢ひ給ふ事何ぞお慰の申さん様もなく御同情に堪へず西中様と同じく本會幹事として母校の爲彼是と幹旋の勞を取り給ふ

宮

サト 世羅郡東太田村宮家に御入嫁いと睦じくお暮しどきく六月中旬お里入の御様子

井出上千代花 祖父君を失はれ當地にお越しの由只今はお二人の母様なりと

辻

その 先の頃赤ちやんをおつれになつたお姿を御實家のお店に拜したりと聞けり己に若き母様となられしか

小倉

ヒデ 近頃眼病のため當市にお越しと聞く

森 ハナ 此頃は當市にお住る遊すかお子供様

をお連れになりし所を見受けたりと

小田 マサヨ 今春御來尾藥局の方から御子供様の

お世話など随分お骨折の御様子

伊藤 菊野 當地山の手邊にお住の御良人様のお

みどりやお子供様のお世話にお暮しの御様子

佐藤 カチ 御主人様とお二人にて御商賣におつ

どめ遊すとか

楠戸 エイ 可愛盛りの女のお子を相手にお過し

の由

岡本 ウラ 岡山縣なる岡本家に御入嫁遊さる

楠戸 千代子 お便りにてはお子供様發熱のためお

手ひけすとか早く御全快を祈る

秋葉 勝子 昨秋東京に御轉勤暫く三原に御逗留

遊しお二人の母様となられし際久々振にて母

校を訪れ給ひぬ

伊達 房子 女醫としての昨今の御生活ぶりお洩

しの程を

田中 ヨシコ 只今は御良人と共に福岡市にあり

内海 フヂエ 御良人と共に大阪市にあり

堂野 エイ 引續き學校にお勤めの由

中野 ナトセ 此春の頃母君となりませしとか

長安 愛子 長らく御病氣にて種々とお手をつく

させ給ひし甲斐もなく遂に永き眠りにつき給

ひぬ昨年同窓會には久しぶりにてお目にか

よりなつかしき昔語りは其から其れへと果し

なきも道理吾等は小學校時代よりの深き

因縁ありき又の逢瀬を契りおきて盡きぬ名殘

りを惜みたりしがはからざりき之ぞ永久逢ふ

由もなきながきお別れならんとは噫

橋本 信子 御姉様を亡ひ給ひし御心中御察しま

ゐらすもなかにおいたまし先の頃久々ぶ

りにて母校を訪れ給ひなつかしき御物語を伺

ひたりき今は二人の母様とおなり遊したり

野村 喜代子 當時は當市第三尋常にお務めの由

水河 光代 岡山市に御轉住寄稿別項に掲ぐ

榎崎 タマ 御良人の留守を預り御老人様と静な

生活をなし給ふ

湯淺 熊子 昨今當市にお暮しとさき

藤井 ふで 三人のお妹様を相手に楽しくお暮し

の由

高田 ミキノ 昨年御實父様を失はれ御來尾の由昨

年生れの御男兒歩行を始められ片言の一つ二つも出る様御成長のよし

高橋 春子 昨年は面白き南國の有様御報知下されありがたく拜しぬ相變らず御無事にや

橋本 きく 神戸にて恩師齊藤先生御婚家の近くにお住ひの由先つ頃當市にてお目にかゝりぬお二人のお子様をお連れなされし御様子天晴若き母様のお姿ぶりなりき

第二回卒業生

阿蘇 カヲル 本會幹事として母校のために盡し給ふ御良人様を助けて商業のためにいそしまる

高邸 テルヨ 只今は御良人と共に大阪にありと聞きしが因島にお歸りとも傳ふ

上田 靜江 本會幹事として母校の爲に御盡力遊す近き頃東京なる御婚約の方御卒業と聞く

佐藤 ヒサコ 御産のため暫く當市にお歸りなりしが丸々と御丈夫なる赤様をお土産に又々御良人のお住ひ遊す上海にと御越しの御様子セキノ 只今は御良人と共に因島にお歸り遊せる御様子

黒木 ノブヨ 相變らず會社に御勤めと聞く
山根 トクノ 御良人と御一所に東京に御住居遊し

至極平和なる日を御過しの由
榊原 滿江 本會幹事として母校のために御盡し遊ばさる

小林 キヌ 當市小林家に御入嫁赤様をおあげなされし御様子

稲田 玉子 東京なる稲田家に御入嫁遊され樂しき新家庭をおつくりの由近き頃お里かへりありしと人の噂

井口 八重子 近き頃お母様を失ひ遊されて非常にお悲みの御様子お便りにて見ゆ相變らず家事においそしみにて折々畑の草取り菜園の指圖までもなし給ふとか弱きお身体に障らぬやう御自愛を祈る

平田 敬子 一ヶ月前當市御實家にて御出産遊ばしたりと

吉岡 ツネ 吉岡家に御入嫁遊され樂しく御暮しの由

平瀬 ノブ 樂しき家庭より土地の女學校に御勤務遊さる

第三回卒業生

稻田 ノブ 同窓會幹事として母校のため御努め遊さる

小川 のぶ 此節は土生町に御歸りの由なれど多くは鎌倉なる姉君の許にて御暮しの由

松尾 なほ 御良人と共に臺灣基隆にあり

金谷 たづ 小學校に御奉職御多忙なる職務にも

楠生 みね 今春玉の様なる赤ちやんを御あげなされて御養育に余念なしと

兒玉 きよ子 先日母校の講演會にちらとお顔を拜したり

杉野 リウ 御良人と共に秋田縣小阪鑛山元山冷水第三號にあり

江川 久子 小學校に御奉職とさく

壽美谷 タカ子 本會幹事として母校の爲に盡し給ふ

近頃は門司なる御親類にあり

穴戸 竹代 當時は佐世保市にありお便によれば

非常に御丈夫にて家事の傍いゝお稽古事に御熱心の由

池田 壽子 過ぎし日母校にてお姿を拜したり
海老谷 悦 大阪府下今宮町にありて家事に御い

そしみの由

高橋 シゲル 御子様の御養育に御熱心

藤田 禧子 只今はお髻者様の奥様として夏日本

の景色豊なる地にあり美保關の景なごちと御投稿ありたし

河野 く に 先日丸鬚姿を拜見いたしました

長尾 千代 御男兒をあげ給ひし事は聞けど其後の御様子承らず

政池 つな 東京職業學校卒業后當時は廣島進徳女學校に御奉職元氣よく御活動

松浦 まさ子 鹿兒島市にあり樂しく御暮しの由

村上 下枝 先日母様となられ端午の初節句のお祝に御忙し御様子

村上 ツルコ 先日鳩山先生御講演の際久しぶりにてお顔を拜見いたしました

山口 ツネヨ 本年三月より阪井原小學校に御奉職とさく

若山 帛世 本年四月御妹君女學校御入學の際母校にて拜顔せり

第四回卒業生

尾田 コワサ 河内尋常小學校御奉職今春久々ぶり

にて寄宿舎に訪れ給ひいろ／＼なつかしき昔

語りをなせり

永原 ヨネノ 御變りなく愛兒の御養育に余念なし

とが

中島 清子 昨秋中島家に御入嫁楽しく御暮しと

の事

植田 きくの 伯父君の元にて家事御練習とかきく

小川 春江 今春東京女子高師御卒業后竹原高女

に御奉職遊さる

鞍掛 トヨノ 本春鞍掛家に御入嫁第五回卒業生の

鞍掛様と御姉妹となり給ひぬ

柏原 ミユキ 中庄尋常小學校に御奉職日々楽しく

御務の傍精神修養を怠り給はぬ御様子良先生

として生徒の信用厚しとさき

赤石 シゲヨ 近き頃赤石家へ御入嫁遊さる

村上 ミツエ 愛兒の御教育に餘念なしと

兒玉 ヨシ 職業學校卒業后は家庭にありて家事

練習中なり此夏休暇には久しぶりにて御歸郷

の由母校へも訪つれ給はん事を祈る

佐々木 豊野 東京女子大學在學中

末田 ヒサノ 今春三原の方へ御入嫁遊されし由な

れど一向御様子承らず本誌御受取の上は必ず

新姓御住所御報知を乞ふ

高垣 シケノ 當市第二尋常小學校に御勤務

時山 マサヨ 佐世保の軍人の奥様となられ楽しく

御暮しの由

立神 タネ 東京女高師在學中

倉井 恒子 昨年夏倉井家に御入嫁せらる昨秋軍

人の奥様らしき姿を拜したり

林 良 本會幹事として母校の爲めに盡し給

ふ御婚約なりしと人は傳ふ

福原 可代 若き母君となられし由

藤井 静子 東都にて銀行に御勤の由

森安 フジノ 母君として愛兒御養育に御熱心の由

三次 イチ 大阪師範學校第三部を出られ目下同

地にて御奉職とさき

宮崎 亮 本會幹事として母校の爲に盡さる當

市第一尋常小學校御勤務

村上 ヨシ 東京職業學校在學中

堀田 好 昨秋母校の音楽會にて丸鬚姿を拜し

たり

第五回卒業生

安保 チヨ 鎌倉なる伯父上の許にあり

佐藤 キクノ 御良人と共に大連にあり

清水 コトヨ 清水家に御入嫁しくお暮しの由

池田 澤子 當時は東京にお暮し遊さる

村井 タマエ 村井家に嫁せられ大阪に暮し給ふ

泉 隆 昨年の寄宿舎送別會にはお健かなる

お顔を拜しまゐらせしに可惜病魔のために今

は世になき人となり給ひぬいとおしきかな

村井 テツ 村井家に嫁せられ臺灣にあり

和田 ヒデヨ 只今は東京にて御暮しの由

惠谷 ヨシコ 小學校に御勤務

惠谷 春子 竹原某家に御入嫁の由なれど御様子

なし

惠谷 ハツヨ 二部御卒業の後今は向島東尋常小學

校にて熱心にお務め遊さる

大山 芳枝 本會幹事として盡し給ふ

岡田 ヨシエ 京都府立第一高女にて御勉強中

金丸 君子 三月以來御病氣のため大阪にあり御

全快を祈る

宇野 静枝 長江町宇野家へ御入嫁遊され折々御

散歩姿を見受く

野村 輝子 伏見なる野村家に御入嫁遊さる

上田 ハルコ 當時は木門田の方においでのお様子

高橋 モト 大阪へおこしと聞けどお便りなし

楠生 フミ 音楽學校入學後は熱心に御勉強の由

黒川 美佐代 竹原の御親類にてお裁縫花茶のお稽

古に余念なしと

小林 イチ 先の頃御養子をお迎へ遊したりと

河野 キヌエ 年老い給ひし祖母様を助けて家事に

おいそしみの由

小西 シヅ 本會幹事として母校のためにお盡し

遊さる

藤井 清子 御良人と共に御在京の由

杉原 エツ 若き主婦として家事においそしみの

由

佐藤 シズエ 佐藤家に御入嫁遊されしと聞きしが

一向御様子なし

小出 秀子 布哇ホル、に御良人と共にあり彼

の地發行の雑誌に新郎新婦として掲げられし

肖像を拜したり

田中喜久恵 本會幹事として母校の爲におつくり

遊さる

高 シツエ 吳市なるお姉様の許にて御修業中

清水 福子 清水家に御入嫁遊され樂しき家庭に

お暮しの御様子

佐伯 ミサエ 當時は多く實家にお暮しどの事

永井 チサト 廣島にてお稽古事においそしみ

原 歌子 今は今津野なる小學校にて熱心に教

育の任に當らせらる

藤田 セイ 本會幹事として母校のために盡さる

御弟妹様方のお世話やいろいろのお稽古事

に御多忙の趣き

藤田 ツギ 御良人と共に伊勢の桑名にお住ひの

由

清浦 智恵 清浦家に御入嫁遊され樂しくお暮し

の由

松本 千枝 御自宅にてお暮しの由七月頃には御

來尾の御様子

高橋 美津枝 竹原なる高橋家に御入嫁當時御良人

の航海中なるを以つて御實家にてお暮しどの

事

村上 ヒサノ 入江家に御入嫁の由

岡田 秀子 御良人様御留中實家にありて育児に

いそしみ給ふ

高田 アサコ 高田に御入嫁遊し家事の全部を引受

けてお働きの由

吉田 キクエ 若き母様となられし御様子

山根 サダ 大阪なる山根家に御入嫁

吉原 艶 御養子遊されし由

吉本 ナミコ お裁縫にお通ひの御様子

小池 貞子 家事においろしみの御様子

渡里 縹子 御養子遊されし由

第六回卒業生

池田 マサコ 奈良女子高等師範にありて相變らぬ

御熱心に御勉強の由

松岡 キミ 若き母様となられし由

井上 敏子 タイピスト養成所を御卒業後芝の電

氣商會に御勤務

井上 春子 本會幹事として盡力し給ふ

井上 千里 福山補習科御卒業の後は茶の湯お琴

生花のお稽古に御熱心とさく

内海 ツタヨ 御便りによれば隣村の小學校におつ

とめの所母様病氣のため退職遊ばし今は主婦

同様御活動の由

大久保 清子 御病氣御全快後は家事に御熱心の由

御自愛を祈る

大西 政世 御便りによれば當時は田舎に御住居

遊ばし御店の方を御手傳ひなされていと元氣

よく御暮しの御様子

上月 學子 御姉妹お連れたちにてお裁縫に御通

ひの由

今西 ヤヘコ 神邊なる呉服店にお入嫁遊しいと平

和にお暮しの御様子妹君のお話によれば今頃

五月のお節句にお里かへりなされしとか

木梨 キミヨ 近頃は勝れ給はず御病氣御養生中な

り早く御全快の程を

木曾 章子 姉君の許より實科高等女學校に通學

裁縫御勉強中とさくしが近頃はとんと御様子

なし

栗原 まつの 岩子島の學校に御奉職

兒王 千賀子 本年四月の下旬御上京其後の御様子

承らむ

碓井 敏江 近々母様におなり遊す御様子折角御

自愛を祈る

村上 ミサカ 大阪なる村上家に嫁せられいと陸じ

く御暮しの由

仙田 俊子 お母様の御手傳やら御兄弟方の御世

話にお忙しき御様子

田中 千代乃 妹様と仲よく家事の手傳を遊さる

田頭 ミス お店の方を引受けてお商賣に大へん

趣味をおもちの御様子

田頭 ハナエ 御便りの御様子では御卒業后間もな

く下の關に御出に相成あちらの名所舊蹟をさ

ぐられ樂しき月日を送り給ひ今は故郷に御歸

り遊し御両親の許にていと平和に御過しの

由

高竹 ヨシ 大阪へおいでのよし

高橋 政子 來會幹事として母校のためにお盡し

遊さる家事練習中

高村 照子 日々眞玉會にてお仕事に御熱心

高岡 勳 お稽古のため當市へお通ひの由

竹尾 ヒサ 當市佐々木氏にありてお裁縫に通ひ

給ふ

田村 マツヨ 神戸なる衛生院内にて病人の看護に

日を過し給ふお便りありき

檀上 リツコ 岡山市片山翠松舎にて裁縫修學

津田 タツ 家事練習の傍バイオリン寫眞術など

木村 兄上様と共に熱心に御研究中とか近頃は桃割

ればかりお結ひになるとのこと

中村 シヅヨ 廣島の淺野家より御歸り遊し近頃は

おみ足をお痛みの御様子

長尾 タマ 朝の小學校に御つとめ遊さる先頃母

様におわかれなされて間もなく又弟御様と永

きおわかれを告げ給ひぬ御心中お察しまるら

せ同情の涙せきあへず

濱井 ヨシカ 小學校に御奉職遊さる

花咲 サカエ 神戸技藝專修科に御入學御勉強の由

吉光 政子 吉光様と御姉妹となられし由

廣川 イト 母君を助けて家事にいそしみ給ふ

平井 淳子 東京渡邊裁縫女學校勉學中

檜垣 保世 東京和洋裁縫女學校勉學中

東上 一枝 齒科醫學の方面を御研究中又折々は

繪筆にもお親しみの由

平岡 重子 日々御忙しく御暮しの御様子

福永 千代子 英學塾にて御勉學中寄稿別紙にかゝ

ぐ

深井 辰 當市にて御稽古事に御熱心

藤井 タキ 芦品郡出口町立神裁縫所にて御研究

の由

細谷 ツタヨ 向島江ノ奥尋常小學校に御奉職

高祖 純子 五月廿六日備中牛窓町高祖家に御入

嫁遊さる

村上 サダ 家事練習の傍ら養蠶にお忙し御様子

野瀬 貞子 大阪なる野瀬家に御入嫁遊さる

本森 千代子 家事お手傳の傍お稽古事に御熱心の

由

山本 喜代 本會幹事として母校のため種々と御

盡力遊さるお裁縫にお通ひ遊さる

吉原 美代 大阪においての由

和田 波子 お稽古事に御熱心の由時々母校を訪

れ給ふ

第七回卒業生

宇佐 照子 卒業后間もなく宇佐家に入嫁せらる

今井 高代 本會幹事として御盡力遊さる

井上 ヒサ 卒業后御病氣にて御困難遊されし御様子併し只今は己に御全快の内御自愛を祈る

内海 より 東京にて御勉強の由

岡崎 淑子 本會幹事として御盡力遊さる

岡野 ユクエ 割烹の實習折々は畑にいで草取なごも御試みの御様子すべて活動的に御暮しの

お便りに接す

岡本 茂子 お便りによれば年多き人たちどうち交りて随分熱心に御勉強の御様子又随分嚴重なる寄宿舎にありて一生懸命御努力の由

貝沼 歌 近頃大阪にお引越の御様子

川本 きぬ 福山なる裁縫所に御通ひの由

加納 文子 伯父上御病氣の爲御看護に余念なし

木村 アヤ 大阪なる御親類に御越の由

國近 ヒデノ いつも變らで母校に訪れ給ひ折々は手紙もて先生方の安否をたつねらる在學中と同じく母校に對する温き情趣いと美し

繁村 マツ 母校を助けて非常にお働きの御様子

先日鳩山先生母校に御越の節御來尾ありて一

高橋 照 夜寄宿舎にお泊り遊し積るお話を承りぬ 御久しぶりにて母様の許にかへられ家事のお手傳の傍稽古事に御いらしみの由

高橋 トミコ 裁縫に御熱心の由母校に於ける鳩山先生御講演の際お姿を見受けたり

高橋 良子 當市の御親類より裁縫にお通ひの由

高垣 當子 東京職業學校入學の後は熱心に御勉強の趣教室内に活氣がみちて時間中お話などする人もなく只カチカチと鉄の音尺の音のみといふ有様修身教育などは鳩山先生より御教授を仰がる、御様子

坪田 菊枝 汽車にて當地の裁縫にお通ひの由

濱中 澁江 大阪にお住居御勉強の由

士道に志して悪衣悪食を耻つる者は

未だ與に議るに足らず

(孔子)

○ 舊師通信

八鶴湖畔にて 三 木 多 可

はや蝨とびかふ頃となりました。先生方はじめ、御卒業の皆様、さては在學中の方々には、ますます御すこやかに御すごし遊ばされますとか、誠によるこばしう御座います

お早いもので、皆様と御別れいたしましたのも、昨日の様に思はれますに、早や半年余りをすごしました。其後はたゞ、御無沙汰に打ちすぎ、失禮のみいたして居ります、しかし、皆様よりは度々御親切な御たよりいただきまして、誠に有難く、いつもうれしく、くり返し々々拜見いたして居ります。承りますれば、近いうちに「眞たま」御發行の由、岡田先生より御手紙いただきました。皆様にこれと申して御知らせいたす様な事も御座いませぬ、たゞ折にふれて、あのなつかしい學校や、たのしい寄宿舎の事が、ちごろに思ひ出されて、今少し近い所で御座いましたら御尋ね申し上げたいと、いつも残念に存じて居ります。でも近く御發行になります、眞たまによりまして、學校の御様子、皆様方の御動靜も伺は

れます事と、そのみ楽しんで居ります。私も其後御かげ様で、いつも丈夫に暮して居りますから、何卒御休心下さいませ。悲しい袖をお分ちいたしました、母校にかへりましたが、生徒の時とは、學校の様子も幾分かわり、仕事も違ひますので、一向わかりませんでした、しかし、教へて頂きました、先生方も、いらつしやいます、又、小使、門衛なども知つて居りますし、見るもの聞くもの、そごろに偲ばれて、生徒の時代にかへつたやうな、氣がいたしました。まゐりますとすぐ學期末にさしかかり、忙しいうちに、大正七年を迎へ、其内に又、卒業式、創立紀念祝賀式の準備などし、事多い時をすごしました。三月十日に、悲しくも母を失ひまして、その後には誠に涙多く、日曜日毎に、墓參のため歸宅いたしますし、學校の方も此頃やうやう様子も分りました御地よりは田舎で御座いますので、一体に質朴のやうで御座います。園藝がなかく盛んで御座います、各組ども裝飾花壇、實習花壇、野菜畑、苗床とを分擔いたして居りまして、思ひ々に世話をいたして居ります、私も一年生の副主任をいたして居りますので、晝の休みには出て、生徒と一所に、いた

して居ります。裝飾花壇には、きいに咲い居りました、つつじも散つて今は、ばら、菖蒲が盛りで御座います、これからダリヤで賑ふ事で御座いませう。實習花壇も此頃は、さくら、撫子、マーガレット、ひなげし等咲いて、きれいになりました、生徒は只肥料をやらないで、如露で水ばかりくれて居りますので、若き葉が赤い様になります、畑にも先達までオランダイチゴが赤く澤山あつたやうで御座いました、此頃は大分少くなりました。里芋、生姜、がだんく、大きくなりませう、先達は皆んで茶摘みをいたしました、上等のお茶を澤山つくりました、又二番芽を摘まねばなりません。運動も盛んで、ブラシコ、遊動圓木、バスケットボール、テニス等を行いました、居ります、高地運動場が御座います、そこへ上つて、クローバをさがして居る生徒も御座います。

お掃除が大變にやかましく、便所なども、毎日生徒がいたして居ります、まあ、自分の勝手な自慢ばかり申し上げました。これで筆どめいたします、ごうか皆様御上京の折が御座いましたら御立寄り下さいませ、東京よりは二時間程でまゐります、これから

は九十九里海岸に海水浴場も開かれます、自働車も通つて居りますから御案内いたします、末ながら、諸先生はじめ皆様の御健康と御校の御隆盛とを祈り上げます。

○卒業生通信

水河 光代

思ひ浮ぶまゝを

前文略……皆サン御變りは御座いませんか、往々にはお目にかゝつて直接御健やかな御姿を拜したり御話しを承つたりいたしました、が夫等は極く僅かです、御座いまして多くは一年一回づつ、此眞玉誌上で御目にかゝつてゐるに過ぎません、そして皆様から御近況や御經驗談を伺ひますのが、何よりの樂しみの一つになつて居ります事は穴勝ち一人ばかりではありますまい、私は御目にかゝつて御話を承ります時々御返事として次の感想を認めますから寧ろ散漫的になりますのが至當だらうかと勝手な解釋を下してゐます。切に私が感じてゐますのは、今迄私共がしてゐました事は餘りに久しい間の習慣に捕はれてゐましたので、之をもつと今日の進んだ忙しい世に相應

しいものにしたと思ふ事で御座います、例へば生花の如きものでも、何流何派と銘打つた眞面目の生け方……少し悪く言ひますと、餘り規則形式に拘泥しすぎた花は挿すのにも比較的時間がかゝりますし、出来上りましたものは、人々の趣味にもよりませうけれど、心から感服出来難く俗っぽいと思ひ出しました。其流派のお方には大に御氣に障りませが、其處は趣味が違ふのだと御憐察し下さいませ。それで私は忙しい今日では、もつと雑作なく生け得らるゝ投入花が最も自然に近い天真爛漫のもので其枝にも葉にも恬淡可憐な情致が溢れて、眞に心神慰樂の目的を達する事も出来又裝飾とする事も出来ると思ひ出したので御座います。而して短時間でも時間の節約が出来ましたなら、他に之を利用したいと存じます。之は一例にしか過ぎませんが、かう云つたやうに今日の世に相應しいものに全力を注ぐ方が利巧なやり方だと信じます

次に私が手紙について感じました事は、字の上手下手よりも文意が充分に先様に通じ得る範圍内で早く書き終る事で御座います。更に上手に美しく書けますれば之に越した事はありませんと思ふので御座

います。日に四五本も書きまのに、餘り念を入れ過ぎ、長い時間を費しますのは無駄でもありません。心苦しい点もあります。私は此方面に向つて學校時代から卒業後稽古して居なかつたのを悔いてゐるので御座います。尙今一つは、返事は必至其日の内に書く習慣をつみませんと、明日ありと思ふ心は仇となりまして、数日の延引なら未だしも、遂に其まゝ御無沙汰になつて仕まい勝のものと思つてゐます。

今迄は餘り手紙の往復もありませんでしたが近頃切に斯廢事を感じてゐるので御座います、閑暇さへありすれば、字を早く而かも成るべく美麗に正しい字を書く様に勉強したいと思つてゐます。今日でも能く假名遣ひを違えたり、誤字を書いたりいたしまして赤面する事がありますので、平素から此点にも特に注意しておかねばなりませんと思つてゐます。

他家様へ御邪魔に伺ひまして、一番心地よく直感されますのは、眞から快く應接して下さる事でありまして、少し御懇意な御宅なんかでは、皆様と一室で御話いたしましたり、或は御飯でも頂きます場合などかば手輕に同じ食卓位で一緒に頂きますのが何より嬉しく思はれます。殊に仕出し屋なんかよりお取

寄せになつた品よりも、御手料理の方が其真心が汲みとられますばかりでなく、珍らしいものでは其材料や御料理の仕方なんか御尋ねして教へて頂きますと利益もしますし、早く御懇意にも願はれまして、何とも云ひ得ない程無上な嬉しさを覺えます。私も今後お客様に對しましては、出来るだけ此主義方針をとらうと決してゐますが、其れに就きましては、料理と云ふ事に一寸ではありませんが、大いに閉口頓首してゐるので御座います。料理は歸するところ味加減で御座いますから其方面に向つてお稽古がしたくて堪りません

それから女のすべき事柄は、一通りやつて見て置きませんと女中を使ひます時に困りますよりは寧ろ使ひ得ない事があると信じました。例へば御飯の出来具合でも自分で経験して置きませんと、水が過ぎてゐるとか、火加減が如何とか云つて改めさす事が出来難いやうなものですから、女學校を出しても餘りに上品らしい点にのみ走らないで一般の事にも目を注いで見ておく必要があると確信したので御座います

次に申上げたいのは、修養といふ小六ヶ敷事で御

座います。此修養と云ひます事は、世の中の激浪を泳ぎ廻つて、酸いも辛いも知り盡しましてから、云ふべき事柄かと存じますけれども、其入口につきまして書き添へて見度ので御座います。平生は左程必要とも思ひませんが、何が知ら事件が起りました時に於きまして、非常に役に立つものと思ひてゐます其事の生じました時に周章でないで、冷静に善惡處置を考へる様だと、餘程修養にも積んだ人でせうが更に其の時に事の善惡、及び處置を考へ得るのみでなく、更に一步進んで、速かに決斷する事の出来なくしてはならないと存じます。人様から或る問題につきまして、然？、否？、と決心の程を問はれたり、疑はれました時、即座に然とか、否とか、判然と返答の出来ますのは、餘程修養を積んだ人でなくては迎も爲し待たない藝當だと確信してゐます。其修養を積みますには、種々な手段方法がありませうが、茲には申し上げません、否、申上げ得るまでに達してゐないのをお恥しく思つてゐるので御座います。此の事も一朝一夕では到底出来ない事柄ですから、平生から心にかけておきますれば、此の点で何にも心にもかけない人とは、知らず／＼の間に大分の差が出

來つゝあると、考へるので御座います

私が申し上げ度い事は、不得要領な中に之位で一段落告げましたが、勉強し度いお稽古したいと、思ひますものが、餘りに多すぎる様な氣がします。之が即ち私自身が何も彼も缺點勝である事を立派に証明してゐるのでは、ありますまいか。お恥しい次第で御座います

それから、慾張つたお話で御座いますが、出来るだけ多くの御方様から、御話を伺ひまして、常識をつけて頂きますと、共に其お方の應對の有様なんかに、氣をつけまして美しい点はどつて以て自分のものに致します事が、交際上には必要であり且つ自分の路だろつと存じてゐます。随分長たらしい、詰らぬ事を申し上げます。最後に、諸先生始め皆様の麗しい御機嫌を祈りまして、又來年の此頃を待つと致しませう

五月雨の降りそうなごんまりと曇つた

六月九日夜半しるす



津田英學塾より

福永千代子

前略……………思ひかへせば去年の四月、希望に満ち満ちて上京致しましたものの、生れて初めて父母の許を離れ、遠い都の空に居ると思ひますと、何ともいへぬ、淋しい感じが致しまして、只故里なつかしく、母校戀しさにてたへられず、人知れず西の空を眺めては、袂をぬらした事も一度や二度では御座ひませんでした。私の様なものでも、まあ無事に豫科へ入學する事は出来ましたが、さて入つてからの忙がしさ苦しさ、今迄聞ひた事もない、西洋人の會話には、ほどほど油をしばられました。先生のお話も生徒の答へてゐらつしやる事も、わからぬのですからお話しになりません。豫科へは學校内にある實習科、或はミツシヨンスクール等から重に入るのもうへラペラなので御座います。まあそれでどうなることかしらと淋しさも混じて教室でも知らぬ知らぬに、涙が出た事も御座いました、けれどもその度毎に御恩を受けた、諸先生に對して相濟まぬ、母校の名折れになつてはと、思へばぐつたりした心もひきたち努力して参りました。どんな事でも努力に

よつて、出来ないものはないと思ひます。昨秋は杉野校長先生、女學校長會議の爲めに、御上京遊ばし殆んど東京してゐらしやいます、同窓の皆様にお會ひするのも、まれなので御座います、久しぶりに先生の常にかわらぬ、御温情ある御言葉をいたゞきほんぞにお父様の様な氣が致しました。昔の友はいくら長くお會ひ致しませんが、昔の通りの親しさをもつて、母校の事、皆様の事をお話致し、少しもへだてぬ集ひに楽しい嬉しい半日を送りました。只今では大分學校になれましたが、やはり忙がしく過して居ります、皆様の御参考にと、少し塾の様子申上げませう、只今私のクラス、本科一年では一週に二十三時間の授業で、その内十六時間は、英語（譯讀、文法、歴史、會話、獨習、時事問答）でございませう、この中、獨習と申しますと、一冊の本を自分で讀み、わからぬところを先生におたづねして、試験があります。時事問答といふのは、新聞より大意と思はれるものを選び、これを英譯し持つて参ります、英學塾と申しますと、英語ばかりと、思つて居らつしやる方も御座いませうが、が英語の外に、一週に四時間も國語、漢文があり、割合に國語が程度

が高く、今更も少し女學校の時にやつてをけば、よかつたと思つて居ります。土曜日はお休みで、午前中はお裁縫を致します。これは舍生には必修科となつてゐまして、この時に足袋のつくろひや、ほころび、自分の思ふものを縫ひます。この中一時間はシンギング、クラスへ出る事も出来ます。この學校では。毎日の豫習が大變で、自分で大抵の事はしてゆき、教室では只先生に間違つてゐるところを直し説明していただくだけで、毎日毎日うかくして居る事は出来ず、その爲、運動不足になつてはどの、津田先生の御心配から、寄宿生は三時より五時迄運動時間として、勉強は禁せられて、外出、運動、洗濯或は手紙書きに使ひます。自習時間と定めてありますのは、七時から九時までで、食堂が圖書室であります、割合に自習時間が少ないので、この時間中は皆一生懸命です。寮は三つあり、私の寮が一番小さく十八人居ります、従つて家庭的で、少しも寄宿舎の様な氣が致しません。寮の規則としたものは、別になく、お互に自治して行く様になつてをりますが、かへつて秩序正しくする事が出来ます。日曜は朝は教會へ行き、夜は祚禱會あり、この時には一週間の

中に考へた事感じた事を、お互に話し合ひ、故郷に残した父母兄弟を思つて祈ります。私にとつては、この時はほんとに嬉しい時で御座います。寮生の一、番楽しい時は、土曜日の夜で、この日の夕飯は寮生が二三人で致します、舎監の先生より、或一定のお金をいただき、それで不足しない様に、出来るだけ立派で味のいいものを作るのが自慢なのでございます。校内に住居して居られる先生を、三寮でわけてお招待し食後はいろんなゲームをして、全く一週間の事を忘れて面白く遊びます。時には緑日とか、日比谷の音楽會へつれて行つていただきます。こうして楽しい事もあるうちに、品性が磨かれて行く事と感謝して盾ります。この學校には、廣島縣の方は一人も居られません、岡山縣の方が大勢居られますので、尾道言葉も平氣で出す事も出来ます。夕飯後の大使館の前、櫻の並木の下を散歩します度には、そごろに西の國が、思はれます。總べて女學校騒ぎの時代がなつかしく、も一度クラスの方と御一所にあの角の四年の教室へ、學んでみたくてなりません。だんだん流れゆく年月と共に、皆様の境遇の變つて行くのを雀のたよりに聞くにつけても、何ともいへ

ぬ悲しい氣分になります。今年春に又楠生様兒玉様が御上京になりましたので、嬉しく皆様にお會ひ致しますにはいつも、女學校時代の樂しかつた事、面白かつた事を、話してなつかしんで居ります

東京より 檜垣保世

先月の五日でございました。青年會では新渡戸夫人が、久しぶりにお國へ、いらつしやるので、其の送別會が催されました、そして今一人、今まで東京の女子青年會のためにお働き下すつた、ミスベーツ（坂本先生のお友達）が、一度お國へお歸りになつて今度は京都の青年會が出来るので、それにお働き下さいますそうです、それは、日本をよく御存じのやさしい先生です。この先生とお二人の送別會なので、かなり盛大な催しでございました。二階に上つて行くと、皆おいしいお菓子をいただきました。しばらくすると加藤先生（やつぱり坂本先生の友達）がいらして『さあ皆様いらつしやい、こゝえづつと列びなさい、二列になるんですよ、二列ですよ、いけない、貴女はお一人なの』しばらくして新渡戸

先生もいらした、二人で二階中を駆けまはつていらつしやる、今まであちらこちらで浮巢をなして居た人群は早くも窓ぎはにうね／＼と二列にならべられた

『さあお歩きなさい』加藤先生の軽い手拍子に一同ゾロ／＼と進み出すと、階下の会場より軽いマーチが起る、水色の薄絹の美しいベーツ先生を先だちとして、心も浮々と階段をおりて会場に行く、会場には椅子が幾列も／＼とつづ／＼脊あはせに配列よく列べられ、會場の中央には花輪にて飾られた『ボンボエトツ』の額が私の眼に入つた、これが今日お送りするところの、両先生の門出を祝する一同の赤心より出たものであつた『さあ皆様こちらへいらして下さい、そしてね恐れ入りますが、順々にこゝへいらして、この皿を受取つてお仲間とはなれない様に椅子に腰をかけて下さい』またマーチがはび、一同西洋皿を持つて順々に席をとつた、愛嬌たつぷりの西洋の先生達も会場へのりこんでいらつした、殊に今日の主賓なる新渡戸夫人は一同を見渡していよ／＼以て愛嬌たつぷり、快活な表情、ほんどに嬉しう御座いました、マーチ弾く手の疲れた時には会場

は花の様なレデイ達できつちりとつまつた。ピアノ弾く手のハタと止むと、只今より皆様食事を始めます前にあたり『聖なる／＼』の一節をうたつて下さい、そして洋食に箸は少し不似合かもしれませんけれども、どうぞごゆつくりと、めしあがつて下さい

い 食事の賑かな事、思ひ／＼におむかひの人々と面白のお話し、その内に戴いた一皿はどんなにおいしかつたでしょう『皆様又恐れ入りますが、そこをお立なすつて下さい』間もなく軽いマーチが始まつた。何處かで快活な手拍子も始まる、なか／＼会場は賑かです、皆様の後につづいて、今度はコーヒの皿を受取つて、今度は前とは違つた位置に席をしめた。席につくとすぐお先に失禮で戴く。いよ／＼遠慮もなにも無。順々コーヒ皿を持つた人は私共の前をすぎて行く、其人の中には危そうなきの方があるかと思ふと、片方に手に皿を持ちながらも猶ピアノに合せて足どり面白く踊り行く連中もある

又加藤先生のお聲に会場は静まつた。皆様おすみになつたら、これから餘興が始まりますから、なるべく椅子を廣くぐりにおよせなすつて下さいまし、

その聲にかかる、と椅子は両わきによせられた、そして會場の中央にさつきより意味ありげに立つていた柱はたちまちにして春野のメーボールとなつて紅白の長い布は八方にひろげられた、間もなくピアノにつれて白の涼しい装をした、數多の少女は袴をつけて軽く踊り出であるく、ヒラ／＼と舞狂ふ様はまるで胡蝶の様であつた。何時の間に垂れ下つた。紅白の布は各の手にとられ、ピアノにつれて、紅白入り乱れ、柱を美しくまき上げたその様に、うつとりとして居ると間もなく、其の入口のところへ、今度は小さな少女が赤き袴を裾短かくはき上げて、樂器にあはせて踊り出た。又もメーボールをとりかこみ、ベビードダンスの可愛らしさ、もうとても田舎では見られません、坂本先生より、メーボールのお話しは、聞いていつも見たい／＼と思つて居りました、それを思がけもなく、眼のあたり見まして、嬉しう御さいました。

まゝ西洋で、廣い／＼緑の野に、中ですると云ふそのメーデはどんなに楽しいでしょう、間もなく其のメーボールは、取去られて席は正面になほされた。幕が開くと兎長者、その滑稽又かはいらしい事、満

面の笑ひの聲は絶えなかつた。次の幕は渡邊先生の紹介により開かれた、五〇年間の女子青年會と題して、それは／＼面白おかしく茶目連中のお手際見上げたものでした

電話のかけ振りなんかは、とてもなみの人には出来ません。無線電話だ、やれ飛行機だのつて、之らささわざ、東北地方の山中から、東京見物に出かけて女子青年會をたづねて、案内をかふ、その言葉の面白い事、まるで英語の様、五〇年後の英語は改良されて、ばん顔で、あれは何處の言葉ですの。と不思議うにおたづねになりました、そして新渡邊博士は、その山中より出て來た人で、出演中絶えずうまい／＼これはうまい、まるで東北らしいぞうま／＼と、大變のお言葉でした、笑の中に五十年後青年會も、どう／＼終へ、第二の幕は未來の夏期修養會の有様、電燈は消されて、あたりはうすぐらくなつた間もなく幕は開かれた、夢の様に眼の前に、緑の廣野の中に、大きな美しい建物が見える、やゝありて軽いピアノにつれて、何處からか左右より眞白な天女の群が、かる／＼花に飾られておどり出た、これは修養會の、氣分を表したものです。しばらくは

そのやさしい踊りに、皆恍惚として居ると、今度は何時の間にか、二つの花束が、天女の間をとりかはされて、かはいらしいダンスは始まつた。そして終りにその群は進み出で、新渡戸夫人とミスページーにさよ上げた。これは私達一同の真心のこも



つたものでした。そして間もなく新渡戸夫人よりは嬉しくもおわかれの言葉を下すつてほんに嬉しう御送り返す事が出来ました。

そのやさしい踊りに、皆恍惚として居ると、今度は何時の間にか、二つの花束が、天女の間をとりかはされて、かはいらしいダンスは始まつた。そして終りにその群は進み出で、新渡戸夫人とミスページーにさよ上げた。これは私達一同の真心のこも

つたものでした。そして間もなく新渡戸夫人よりは嬉しくもおわかれの言葉を下すつてほんに嬉しう御送り返す事が出来ました。...

附 錄

同窓會員名簿

第一回卒業生

現住所

尾道市藥師堂町	死亡	天野千代子
尾道市長江町	◎ 西中さく	
世羅郡東太田村	◎ 生酒コト	
尾道市土堂町	宮	井出上千代花
松山市港町	旧姓小川	
尾道市久保町	旧姓小倉	
東京市本所區千歲町	旧姓大崎	
岩國町魚町	旧姓大田垣	
岡山市弓之町四五	旧姓柏原	
比婆郡東條町		
臺灣澎湖島小池爭公小學校	旧姓川崎	
備中郡窪郡帶江村	旧姓桑田	

◎印は幹事

沼隈郡今津町	旧姓桑田	河本キミ
岡山縣瀬戸町	旧姓小西	岡本ウラ
名古屋市古池町	旧姓齊藤	野崎幸
備中倉敷	旧姓榊原	楠戸千代子
御調郡糸崎		眞田フミ
東京市神田區中猿樂町一七	死亡	首尾木露子
東京府下大井町瀧王子四四八〇番地	旧姓末田	來留島カメコ
尾道市土堂町	旧姓高木	秋葉勝子
福山市住吉町住吉	旧姓田中	田阪花江
沼隈郡鞆町		田中ヨシ
大阪北區東野田五丁目	旧姓土屋	伊達房子
尾道市尾崎町	旧姓宮田	内海フサエ
御調郡市村	旧姓堂野	富田サカ
加茂郡竹原明神	死亡	堂野エイ
佐世保市濱田町	旧姓永井	中野チトセ
尾道市米場町		長安愛子
尾道市藥師堂町		橋本信子
名古屋市板屋町	旧姓平田	野田喜代子
尾道市	旧姓金丸	野村喜代子
神戸市葺合町二一〇九番地ノ一		檜崎タマ
尾道市十四日町	旧姓福島	伊藤菊野
		橋本キク
		神原久枝

蘆品郡府中町

旧姓松尾 死亡

松尾初代 蕨谷クマノ 安長フツノ

廣島市三川町

旧姓山路

湯浅熊子

島根縣濱田町

旧姓山下

藤井フナ

安佐郡可部町

旧姓原

吉岡繁子

尾道市土堂町

旧姓吉原

高田キミノ

神戸市布引町三丁目

旧姓佐々木

門田ツ子 佐藤オカ子

大阪市南區天王寺

旧姓阿蘇

阿蘇カナル

愛媛縣新居郡中萩村

旧姓井上

花本ミチヨ

御調郡因島長崎

旧姓池田

伊藤春江

尾道市久保町

旧姓字坪

高邨テルコ

上海乍浦路共和里二一〇號

死亡

上田静江

弘前市匠町六七

旧姓大藪

佐藤ヒサコ

御調郡因島

旧姓岡

大本コト

福山市下町

旧姓梶田

岡セキノ

神戸市奥平野再度筋三二ノ三三

旧姓川本

谷本クメノ

御調郡向島

旧姓木原 米國シヤトルメイン街六〇二東洋商會

旧姓木曾

神戸市加納町二丁目

尾道市小石川區雜司谷町一六旧姓栗井

尾道市長江町

尾道市久保町

尾道市土堂町

愛媛縣三津濱

尾道市十四日町

大阪市南區難波赤手拭稻荷神社境内

東京府下戸塚町諏訪八二

高田郡吉田町

福山市西町

朝鮮京城御成町

尾道市中濱

尾道市長江町

岡山市上西川町

神石郡仙養村

尾道市久保町

神石郡來見村時安

朝鮮平安北道塔古河龜城害山旧姓三浦

佐賀縣西松浦郡大山

御調郡美郷村

旧姓村上

旧姓立上

旧姓高田

旧姓豊田

旧姓中川

旧姓中村

旧姓平岡

旧姓平岡

旧姓松浦

旧姓横

旧姓三上

旧姓村上

旧姓村上

旧姓山本

村上トミ

繁田チヨ

黒木ノブ

山根トク

小林久

榊原満江

小林キヌ

池田芳子

田阪マス

岡本ヒサ

稻田玉子

井口八重子

中川秀子

池亀琴

三阪玄子

平田敬子

日高貞子

松浦コマ

大西タミ

吉岡ツ子

鶴田フミ

平瀬ノブ

竹之上コチ

竹之上コチ

第二回卒業生

豊田郡瀬戸田町
東京市麴町區飯田町一ノ八

第三回卒業生

尾道市中濱
尾道市長江町
御調郡土生町
臺灣キールン郵船會社
作州眞庭郡落合町
双三郡十日市町
沼隈郡松永
尾道市久保町
尾道市土堂町
尾道市十四日町
秋田縣小坂鑛山元山冷水三号
陸前石卷裏町
沼隈郡松永町
尾道市西御所町
佐世保市松浦町
尾道市土堂町
吳市東港町
廣島市段原村
御調郡三原町

旧姓横山
旧姓池尻
旧姓大山
旧姓柏原
旧姓河本
旧姓楠生
旧姓栗原
旧姓小山
旧姓佐藤
旧姓清水
旧姓田中
旧姓谷本
旧姓竹本
旧姓徳山

◎ 大 泰 司 靜 江
渡 邊 キ ヲ
◎ 三 阪 カ メ
稻 田 ノ プ
小 川 ノ プ
松 尾 ナ ナ
金 田 菊 代
金 谷 田 龜
九 十 九 キ ヌ
楠 生 ミ 子
栗 原 フ サ
兒 玉 喜 代 子
杉 野 リ ウ
橋 高 キ ミ ヲ
江 川 ヒ サ ヲ
◎ 壽 美 谷 ム カ 子
穴 戸 竹 代
田 阪 幾 世
池 田 壽 子
佐 々 木 マ ツ ヲ
神 原 ル イ

大阪府西成郡今宮町
賀茂郡造賀村
菅品郡府中町
尾道市久保町
御調郡三原町
鳥取縣境港
廣島市堺町
尾道市土堂町
尾道市土堂町
廣島市國泰寺町百九
御調郡土生長崎
尾道市土堂町
尾道市久保町
尾道市久保町
鹿兒島平野
越智郡生名村
尾道市久保町
尾道市土堂町
沼隈郡高須村
東京神田錦町三丁目
御調郡羽和泉村
廣島市新川端町

舊姓永田
舊姓鍋島
舊姓鍋島
舊姓西村
舊姓野村
舊姓林
舊姓原田
舊姓原田
舊姓松森
舊姓三熊
舊姓三井
舊姓村上
舊姓山科
舊姓山本
舊姓吉池

◎ 海 老 谷 悅
日 山 キ ヌ エ
高 橋 シ ゲ ル
多 田 憲 代
納 見 チ ト セ
藤 田 禧 子
河 野 ク ニ
長 尾 千 代
原 田 政 野
政 池 つ な
松 森 ツ ナ
正 木 春 子
三 熊 小 里
松 浦 雅 子
村 上 下 枝
村 上 ヤ ス
村 上 ツ ル ヲ
村 上 ハ ル ヲ
増 田 由 巳 子
山 口 ツ 子 ヲ
若 山 帛 世

第四回卒業生

伊豫三津濱

御調郡八幡村

岡山市中筋四百十番

御調郡吉和村

神戸市榮町三靖和商會内

大阪市西區幸町

備中玉島町

賀茂郡竹原町

尾道市久保町

御調郡糸崎町

尾道市中濱

東京市本所區千歲町

尾道市土堂町

尾道市久保町

東京日本女子大學玉成寮

御調郡向島

尾道市御所町

御調郡栗原村

横須賀市深田二八五

東京女子高等師範學校

松江市雜賀寶豆記町

御調郡向島

尾道市土堂町

尾道市十四日町

尾道市長江町

舊姓市川

舊姓井手

舊姓今井

舊姓宇都宮

舊姓岡田

舊姓兼森

舊姓熊丸

舊姓永井

舊姓武田

舊姓永井

青野セツ

尾田コノサ

永原ヨネノ

伊藤ミネ

中島清子

植田キクノ

宮本エン

小川春江

鞍掛トヨノ

赤石シゲヨ

村上ミツエ

兒玉ヨシ

小西ハル

小松ゆき

佐々木豊野

下川小雪

末田ヒサノ

高垣シゲノ

時山マサヨ

立神タチ

倉井恒子

中司カツヨ

新田ヒサ

野村アサ

林アサ

御調郡八幡村

御調郡向島

東京市京橋區元島町

廣島市松川町

尾道市十四日町

朝鮮京城覆慶院官舎

大阪市

御調郡因島

尾道市土堂町

尾道市久保町

東京共立職業學校

尾道市久保町

御調郡吉和村

御調郡因島中庄村

尾道市長江町

相州鎌倉雪ノ下

大連神明町つ區二二

尾道市長江町

東京市外品川町本宿一七番地

尾道市十四日町

尾道市十四日町

大阪市西區三軒屋上ノ町三番ノ一七

尾道市十四日町

尾道市十四日町

尾道市十四日町

舊姓福原

舊姓藤原

久田チロサ

福原可代

藤井静子

森安フシノ

松井エイ

三井敏子

三井敏子

三井敏子

宮地清子

宮崎亮

村上カチ

村上ミチ子

村上ヨシ

毛利ユキノ

藤野喜美代

堀内好

柏原ミユキ

阿蘇シズヨ

安保チチ

佐藤キクノ

清水コトヨ

池田澤子

砲櫃イソ

村井タマエ

泉隆

◎

◎

臺灣臺北龍口街六丁目一八 舊姓井出
尾道市十四日町
東京市神田三崎町三丁目一番地

舊姓井上
舊姓入江

御調郡向島

尾道市長江町

尾道市土堂町

伊豫新居郡濱原地銀第八号

尾道市十四日町

御調郡向島東村

尾道市土堂町

尾道市十四日町

京都府立高等女學校

御調郡吉和村

大阪市西區築港三條通三丁目三七

尾道市長江町

京都府下伏見下町

御調郡木庄村木門田

大阪西區土佐堀裏町二四

東京音樂學校

尾道市久保町

賀茂郡竹原町

不 明

死 亡

◎

村 井 テ
井 上 タキ

和 田 ヒテ

高 田 ムツ

尾道市久保町 舊姓小林
沼隈郡田島村
尾道市土堂町
東京府下目白臺高田鴉山一五〇四

舊姓佐伯

舊姓相良

舊姓清水

舊姓杉谷

舊姓大

舊姓田中

舊姓瀧迫

舊姓塚本

舊姓土井

舊姓德毛

舊姓林

◎ 小林 イチ
河野 きぬ
小 西 シヅ

藤 井 清 子

杉 原 エツ

武 内 キヲ

砂 川 千代 龜

杉 本 愛

佐 藤 シズエ

小 出 秀 子

高 橋 トシエ

武 本 カメヨ

◎ 田 中 喜久 惠

◎ 高 橋 春 子

中 村 芳 子

高 村 シズ子

清 水 福 子

藤 井 ナホ

德 永 ユキエ

佐 伯 ミサホ

永 井 チサト

西 永 ミサチ

西 本 ヒサヨ

第六回卒業生

沼隈郡今津村
御調郡三庄村
尾道市土堂町
尾道市十四日町
伊勢國桑名町
東京市外大森八景坂
尾道市土堂町
大阪市東區島町
愛媛縣越智郡關川村
沼隈郡戸手村
廣島市下柳町
尾道市防地大坂
廣島市大手町
沼隈郡高須村
御調郡美鄉村
因島外ノ浦
大阪市北區堂島北町
尾道市土堂町
御調郡向島立花村
御調郡向島東村
御調郡三原町
御調郡向島

原 歌 子
平野たまこ
藤田セイ
樋口繁子
藤田ツギ
清浦智恵
正木フサ
松本千枝
高橋美津枝
入江ヒサノ
八杉イソ
岡田季子
山根トシ子
高田アサコ
行友房子
吉田キクエ
山根サダ
吉原艶
吉本ナミコ
吉光テルエ
小池貞子
渡里標子

尾道市長江町
奈真女子高等師範學校
御調郡三原町
尾道市東御所町
御調郡向島東村
朝鮮京城喜會洞二六一
東京市神田區錦町一八一
芦品郡近田村
尾道市土堂町
蘆品郡近田村
御調郡河内村
尾道市十四日町
沼隈郡今津村
御調郡三原町
尾道市土堂町
尾道市久保町
尾道市久保町
岡山縣阿哲郡熊谷村
尾道市久保町
御調郡美鄉村
深安郡神邊村
尾道市久保町
大阪市北區本庄中津町四五七旧姓杉原
尾道市土堂町

阿蘇ケイ
池田マサコ
池田花子
石岡芳子
石川秀子
松岡キミ
井上一敏子
井上一枝
井上春子
井上千里
内海ツタ
岡田千代
小川キミコ
大久保文子
大久保清子
大西千代子
大西政世子
上月學子
笠井ツル
今四ツエ
木梨キミヨ
村上ミサカ
木曾章子

旧姓井田
旧姓川ノ上

御調郡向島

尾道市久保町

東京市本所區千歲町六三

御調郡中庄村

御調郡三原町

豐田郡忠海町

尾道市土堂町

尾道市土堂町

沼隈郡浦崎村

尾道市久保町

尾道市土堂町

尾道市十四日町

御調郡美郷村

御調郡栗原村

尾道市久保町

福山市西町

神戸市旗塚通衛生院内

岡山市片山翠松舎内

沼隈郡浦崎村

愛媛縣新居郡新居濱

御調郡吉和村

岡山縣川上郡牛莊村字地頭

沼隈郡鞆町

佐伯郡大柿村柿浦

旧姓島谷

木曾アサコ

栗原マツノ

兒玉千賀子

小林シゲコ

白石三千子

碓井敏江

仙田敏子

田中千代乃

田頭ミス

田頭花江

高竹正子

高橋正子

高村照子

高岡勳

武田トミコ

竹尾ヒサ

谷静香

田村マツヨ

檀上リツ

檀上ハツヨ

津田田鶴

中村シツヨ

那須隆江

長尾タマ

濱井ヨシカ

神戸市女子高木技藝學校

尾道市久保町

御調郡向島

尾道市尾崎町

東京本郷區湯島三組町二三

東京市小石川水道町女子青年會

尾道市久保町

尾道市土堂町

尾道市長江町

東京市津田英學塾

尾道市久保町

御調郡河内村

御調郡栗原村

沼隈郡松永町

備中牛窓町

尾道市久保町

大阪市西區靱中通二丁目

尾道市土堂町

御調郡三庄村

尾道市久保町

尾道市十四日町

尾道市土堂町

尾道市久保町

御調郡三原町

沼隈郡柳津村

旧姓牛田

花咲サカエ

花井真子

吉井政子

廣川イト

平井淳子

檜垣保世

東田一枝

平岡重子

福永千代子

深井辰

藤井タキ

細谷ツタ

三谷ヨシコ

高祖純子

村上サダ

野瀬貞子

村上ハルコ

毛利トキノ

本森千代子

山本喜代

吉原美代

和田波子

脇真子

渡邊シゲノ

大正七年七月十一日印刷
大正七年七月十六日發行

(非賣品)

編輯兼發行者

岡

田

タ

ツ

廣島縣尾道市立
高等女學校內

印刷者

山

野

佐

一

廣島縣尾道市十四日町
百九番屋敷

印刷所

廣島縣尾道市十四日町
百九番屋敷

三

秀

舍

發行所

廣島縣尾道市久保町
尾道市立高等女學校

校

友

會

445

田舎名

376

松島

13

秋田

4

416

〃

430

21

100歳

2

南本

~~149~~

余介

870⁷⁷⁷

5